京都市内遺跡発掘調査報告

令和４年度

２０２３年3月

京 都 市 文 化 市 民 局

京都市内遺跡発掘調査報告

令和４年度

２０２３年3月

京 都 市 文 化 市 民 局

1　調査区全景（北東から）

2　講堂北軒廊東縁基壇外装（東から）

巻頭図版２　伏見城跡　遺構

１　４区全景（東から）

２　４区断割１（南西から）

例　言

1　本書は、京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した、令和4年度の京都市内遺跡発掘調査報告書である。本書では令和3年度・令和4年度に実施した発掘調査成果を報告する。

2　調査は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が主体となり、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所の支援を受けた。

3　調査地・調査期間・調査面積・調査担当者は、下記のとおりである。

Ⅰ　史跡旧二条離宮（二条城）、平安京左京三条二坊八町跡、堀川御池遺跡
（受付番号　3N076）
京都市中京区二条通堀川西入二条城町541
2022年3月7日・3月8日　11㎡　　堀大輔

Ⅱ　平安京左京七条二坊十六町跡　（受付番号　22H202）
京都市下京区学林町299、300、301
2022年8月1日～9月2日　60㎡　　佐藤拓

Ⅲ　平安京右京三条二坊十四町跡、西ノ京遺跡　（受付番号　22H140）
京都市中京区西ノ京下合町23、24
2022年7月6日～7月27日　74㎡　　奥井智子

Ⅳ　史跡西寺跡、西寺跡（40次）、平安京右京九条一坊十一町跡、唐橋遺跡
（受付番号　3N045）
京都市南区唐橋西寺町57
2021年11月15日～12月3日　77㎡　　西森正晃・松本千裕

Ⅴ　史跡西寺跡、西寺跡（41次）、平安京右京九条一坊十一町跡、唐橋遺跡
（受付番号　4N032）
京都市南区唐橋西寺町57
2022年10月13日～11月4日　76㎡　　八軒かほり・熊谷舞子

Ⅵ　植物園北遺跡　（受付番号　21S657・21S658）
京都市北区上賀茂梅ケ辻町7-9、7-10
2022年1月26日～2月10日　61㎡　　清水早織

Ⅶ　山科本願寺南殿跡　（受付番号　22S235）
京都市山科区音羽伊勢宿町33-2、33-62
2022年9月26日～10月6日　15㎡　　新田和央

Ⅷ　伏見城跡　（受付番号　22A005）
京都市伏見区桃山町下野41
2022年8月29日～10月5日　56㎡　　奥井智子

Ⅸ　長岡京右京一条四坊十町跡（第1258次）、石見城跡　（受付番号　21A003）
京都市西京区大原野石見町330
2021年11月29日～12月27日　125㎡　　黒須亜希子

Ⅹ　長岡京跡隣接地　（受付番号　21A011）
京都市南区久世殿城町
2022年2月24日～3月16日　69㎡　　鈴木久史

4　本書の執筆分担は、本文の末尾に記している。

5　本書に使用した写真の撮影は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託し、遺構・遺物の一部は調査担当者が行った。

6　本書で使用した遺物の名称及び形式・型式は、一部を除き、平尾政幸「土師器再考」『洛史』研究紀要第12号　（公財）京都市埋蔵文化財研究所2019年 に準拠する。

7　本書で使用した土色名は，農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。

8　本書中で使用した方位および座標の数値は、世界測地系　平面直角座標系Ⅵによる（ただし、単位（m）を省略した）。また、標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。なお、調査における測量基準点の設置は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託した。

9　本書で使用した地図は、本市都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺1/2,500）「聚楽廻」「壬生」「島原」「花園」「山ノ内」「中河原」「梅小路」「西賀茂」「幡枝」「安祥寺」「山科」「丹波橋」「石見」「寺戸」を調整したものである。

10　本書の作成及び編集は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課で行った。

本 文 目 次

Ⅰ　史跡旧二条離宮（二条城）、平安京左京三条二坊八町跡、堀川御池遺跡

1．調査経過 ……1

2．層序と検出遺構 ……1

3．まとめ ……4

Ⅱ　平安京左京七条二坊十六町跡

1．調査経過 ……5

2．遺　跡 ……5

3．遺　構 ……8

4．遺　物 ……14

5．まとめ ……19

Ⅲ　平安京右京三条二坊十四町跡、西ノ京遺跡

1．調査経過 ……21

2．遺　跡 ……21

3．遺　構 ……25

4．遺　物 ……31

5．まとめ ……33

Ⅳ　史跡西寺跡、西寺跡（40次）、平安京右京九条一坊十一町跡、唐橋遺跡

1．調査経過 ……34

2．遺　構 ……37

3．遺　物 ……43

4．まとめ ……45

Ⅴ　史跡西寺跡、西寺跡（41次）、平安京右京九条一坊十一町跡、唐橋遺跡

1．調査経過 ……49

2．遺　跡 ……49

3．遺　構 ……51

4．遺　物 ……55

5．まとめ ……59

Ⅵ　植物園北遺跡

1．調査経過 ……61

2．遺　構 ……63

3．遺　物 ……70

4．まとめ ……72

Ⅶ　山科本願寺南殿跡
1．調査経過 ……74
2．遺　跡 ……74
3．遺　構 ……78
4．遺　物 ……79
5．まとめ ……81
Ⅷ　伏見城跡
1．調査経過 ……84
2．遺　跡 ……86
3．遺　構 ……89
4．遺　物 ……98
5．まとめ ……99
Ⅸ　長岡京右京一条四坊十町跡（第1258次）、石見城跡
1．調査に至る経緯と経過 ……101
2．位置と環境 ……103
3．調査成果 ……107
4．まとめ ……115
Ⅹ　長岡京跡隣接地
1．調査経過 ……117
2．遺　跡 ……119
3．遺　構 ……122
4．遺　物 ……125
5．まとめ ……126

報告書抄録

挿 図 目 次

Ⅰ　史跡旧二条離宮（二条城）、平安京左京三条二坊八町跡、堀川御池遺跡

図１　調査位置図 …… 1
図２　１区全景（南から） …… 1
図３　調査区位置及び遺構平面図 …… 2
図４　１・２区壁断面図 …… 3
図５　石組溝検出状況（南西から） …… 3

Ⅱ　平安京左京七条二坊十六町跡

図１　調査地点と周辺調査 …… 5
図２　調査前風景（北東から） …… 6
図３　重機掘削状況（南から） …… 6
図４　調査区配置図 …… 6
図５　調査区断面図 …… 9
図６　第３面平面図 …… 10
図７　井戸152断面図 …… 10
図８　第２面平面図 …… 11
図９　柱穴列１・２平・断面 …… 12
図10　火災処理土坑（北西から） …… 12
図11　第１面平面図 …… 13
図12　土坑149・井戸150平面図 …… 13
図13　柱穴26、43断面図 …… 13
図14　基盤層出土遺物実測図 …… 15
図15　井戸152出土遺物実測図 …… 15
図16　第２面整地土内出土遺物実測図 …… 15
図17　第２面各遺構出土遺物実測図 …… 16
図18　第１面整地土内及び各遺構出土遺物実測図 …… 16
図19　第１面整地土内出土遺物実測図 …… 17
図20　攪乱土中出土遺物実測図 …… 17
図21　出土瓦実測図及び拓影 …… 18

Ⅲ　平安京右京三条二坊十四町跡、西ノ京遺跡

図１　調査位置及び周辺調査位置図 …… 21
図２　重機掘削風景（南西から） …… 22
図３　人力掘削風景（南西から） …… 22

図4　写真撮影風景（西から）……22
図5　測量風景（南西から）……22
図6　埋戻し風景（南東から）……22
図7　埋戻し風景（南西から）……22
図8　調査区配置図……25
図9　北区遺構平面図……26
図10　北区北・南壁断面図……27
図11　北区東・西壁断面図……28
図12　南区平面図……28
図13　南区壁断面図……29
図14　南区野寺川変遷図……30
図15　出土遺物実測図及び拓影……32
図16　野寺川及び西側溝復元図……32
図17　十四町内調査遺構配置図……33
Ⅳ　史跡西寺跡、西寺跡（40次）、平安京右京九条一坊十一町跡、唐橋遺跡
図1　調査位置図……34
図2　調査前風景（西から）……34
図3　南区子ども発掘体験（東から）……35
図4　唐橋小学校現地見学（西から）……35
図5　土嚢養生（南西から）……35
図6　真砂土養生（北東から）……35
図7　講堂北側旧伽藍復元図……36
図8　調査区配置図……36
図9　調査区平面及び柱列エレベーション図……38
図10　南・東壁断面図……39
図11　西壁断面図……40
図12　溝6（新・旧）実測図……41
図13　講堂北軒廊東縁基壇実測図……41
図14　出土遺物実測図……43
図15　出土瓦実測図及び拓影……44
図16　石製品実測図……44
図17　北僧房復元試案……46
Ⅴ　史跡西寺跡、西寺跡（41次）、平安京右京九条一坊十一町跡、唐橋遺跡
図1　調査位置図……49
図2　調査区配置及び周辺調査位置図……50

図３　調査前風景（北東から）……50
図４　調査区断面図……52
図５　調査区平面図……53
図６　瓦溜り平・断面図……53
図７　土坑１遺物出土状況及び上面土器取り上げ後平面図……54
図８　土坑２平・断面図……54
図９　ピット４平・断面図……54
図10　出土遺物実測図……56
図11　出土遺物実測図及び拓影１……57
図12　出土遺物実測図及び拓影２……58
Ⅵ　植物園北遺跡
図１　調査位置図……61
図２　調査前全景（南東から）……62
図３　作業風景（南西から）……62
図４　調査区配置及び調査⑤遺構平面図……63
図５　１区平面図……65
図６　１区壁面断面図……65
図７　１区土坑26・49・55遺構図……66
図８　１区柱穴19～22、土坑53、柱列A・B遺構図……67
図９　２区平面図……68
図10　２区壁面断面図……68
図11　２区土坑４、柱列C・D遺構図……69
図12　出土遺物実測図及び拓影……71
図13『社領絵図』（上賀茂神社蔵）と調査地の位置関係……72
Ⅶ　山科本願寺南殿跡
図１　調査地及び周辺遺跡位置図……74
図２　調査前全景（南西から）……75
図３　作業風景（東から）……75
図４　調査区配置図……76
図５　周辺調査位置図……76
図６　調査区断面図……78
図７　各遺構面平面図……80
図８　SD１断面図……80
図９　出土遺物実測図……81
図10『御在世山水御亭図』（光照寺所蔵・上が北）……81

図11　山科本願寺南殿跡復元図 ……82
Ⅷ　伏見城跡
図1　調査地位置図 ……84
図2　3区重機掘削風景（南東から）……85
図3　3区ボランティア受け入れ風景（北東から）……85
図4　4区重機掘削風景（南東から）……85
図5　4区作業風景（東から）……85
図6　4区石材調査風景（東から）……85
図7　記者発表風景（南西から）……85
図8　4区土嚢養生風景（南西から）……85
図9　4区埋戻し風景（南東から）……85
図10『伏見御城郭並武家屋敷取之絵図』（京都市所蔵）……87
図11　既存周辺調査図 ……87
図12　調査区配置図 ……89
図13　1・3区平・断面図 ……90
図14　2区平・断面図 ……91
図15　4区平面図 ……92
図16　4区立面図 ……93
図17　4区調査区壁及び断割2断面図 ……94
図18　4区断割1断面及び石垣エレベーション図 ……95
図19　4区石垣の石材№分布模式図 ……97
図20　出土遺物実測図及び拓影 ……98
図21　昭和2年地形図と調査地 ……100
図22　平成26年撮影空中レーザー測量図と調査地 ……100
Ⅸ　長岡京右京一条四坊十町跡（第1258次）、石見城跡
図1　調査位置図 ……101
図2　調査区配置図 ……102
図3　機械掘削作業状況（南西から）……102
図4　遺構面検出作業状況（南から）……103
図5　既往の調査位置図 ……105
図6　基本層序模式図 ……107
図7　第1調査区壁断面図 ……108
図8　追加調査区5・6壁断面図 ……109
図9　第1遺構面全体図 ……110
図10　第1遺構面遺構平・断面図 ……111

図11　第２遺構面全体図 …… 112
図12　溝11断面図 …… 113
図13　出土遺物実測図 …… 114
図14　石見城跡遺構概略図 …… 115
X　長岡京跡隣接地
図１　調査位置図 …… 117
図２　調査区位置図 …… 117
図３　１区調査前全景（北東から） …… 118
図４　１区作業風景（東から） …… 118
図５　１区埋戻し（北から） …… 118
図６　２区重機掘削（北東から） …… 118
図７　１区埋戻し終了状況（北西から） …… 118
図８　２区埋戻し終了状況（北東から） …… 118
図９　周辺調査位置図 …… 120
図10　１区平・断面図 …… 123
図11　２区平・断面図 …… 124
図12　出土遺物実測図 …… 125

表　目　次

I　史跡旧二条離宮（二条城）、平安京左京三条二坊八町跡、堀川御池遺跡
表１　遺構概要表 …… 3
II　平安京左京七条二坊十六町跡
表１　周辺の調査事例一覧表 …… 7
表２　遺構概要表 …… 8
表３　遺物概要表 …… 14
III　平安京右京三条二坊十四町跡、西ノ京遺跡
表１　周辺調査一覧表 …… 23
表２　遺構概要表 …… 24
表３　遺物概要表 …… 31
IV　史跡西寺跡、西寺跡（40次）、平安京右京九条一坊十一町跡、唐橋遺跡
表１　遺構概要表 …… 37
表２　遺物概要表 …… 43
V　史跡西寺跡、西寺跡（41次）、平安京右京九条一坊十一町跡、唐橋遺跡
表１　遺構概要表 …… 51

表２　遺物概要表 ……55
Ⅵ　植物園北遺跡
表１　遺構概要表 ……64
表２　遺物概要表 ……70
Ⅶ　山科本願寺南殿跡
表１　遺構概要表 ……78
表２　遺物概要表 ……79
Ⅷ　伏見城跡
表１　周辺調査一覧表 ……88
表２　遺構概要表 ……88
表３　４区石垣の石材観察表 ……97
表４　遺物概要表 ……98
Ⅸ　長岡京右京一条四坊十町跡（第1258次）、石見城跡
表１　石見城跡周辺調査一覧表 ……106
表２　遺構概要表 ……107
表３　遺物概要表 ……114
Ⅹ　長岡京跡隣接地
表１　周辺調査一覧表 ……121
表２　遺構概要表 ……122
表３　遺物概要表 ……125

図　版　目　次

巻頭図版１　史跡西寺跡、西寺跡（40次）ほか　遺構
１　調査区全景（北東から）
２　講堂北軒廊東縁基壇外装（東から）
巻頭図版２　伏見城跡　遺構
１　４区全景（東から）
２　４区断割１（南西から）

図版１　平安京左京七条二坊十六町跡　遺構
１　第１面全景（東から）
２　第２面全景（北から）
図版２　平安京左京七条二坊十六町跡　遺構・遺物
１　第３面全景（北から）

2　井戸152完掘状況（北から）
3　出土遺物（6・10・瓦1・瓦4は井戸152、68はピット11出土）
図版3　平安京右京三条二坊十四町跡、西ノ京遺跡　遺構
1　北区遺構完掘状況（南東から）
2　北区野寺小路西側溝及び野寺川断面（南から）
図版4　平安京右京三条二坊十四町跡、西ノ京遺跡　遺構
1　南区遺構完掘状況（東から）
2　南区野寺川完掘状況及び北壁断面（南東から）
図版5　平安京右京三条二坊十四町跡、西ノ京遺跡　遺構
1　南区東壁断面（西から）
2　南区南壁断面（北から）
図版6　史跡西寺跡、西寺跡（40次）ほか　遺構
1　調査区全景（南から）
2　北僧房南縁と講堂北軒廊東縁入隅（東から）
図版7　史跡西寺跡、西寺跡（40次）ほか　遺構
1　礎石据付穴・抜取穴1（北東から）
2　北僧房桁行中央間（西から）
3　礎石据付穴・抜取穴2（北から）
図版8　史跡西寺跡、西寺跡（40次）ほか　遺構
1　礎石据付穴・抜取穴3（北西から）
2　礎石据付穴・抜取穴4（北東から）
3　礎石据付穴・抜取穴5（北西から）
4　礎石抜取穴7（北から）
図版9　史跡西寺跡、西寺跡（40次）ほか　遺構
1　北僧房新旧南雨落溝（溝6）（西から）
2　北僧房と講堂北軒廊入隅（北東から）
3　講堂北軒廊東縁基壇外装（南東から）
図版10　史跡西寺跡、西寺跡（40次）ほか　遺構
1　講堂北軒廊東縁基壇外装（北東から）
2　講堂北軒廊東縁基壇盛土及び雨落溝（東から）
3　講堂北軒廊東縁基壇盛土及び雨落溝（北東から）
図版11　史跡西寺跡、西寺跡（41次）ほか　遺構
1　調査区全景とコンド山（北西から）
2　調査区全景（西から）
図版12　史跡西寺跡、西寺跡（41次）ほか　遺構

1　瓦溜り遺物出土状況（南東から）
2　整地土断割西壁（北東から）
3　土坑１上面土器除去後（北東から）
4　ピット４(北西から）
図版13　植物園北遺跡　遺構
1　１・２区全景（南東から）
図版14　植物園北遺跡　遺構
1　１区全景（西から）
2　２区全景（北から）
図版15　植物園北遺跡　遺構
1　土坑26検出状況（南西から）
2　土坑26集石検出状況（南西から）
図版16　山科本願寺南殿跡　遺構
1　第１面全景（東から）
2　第２面全景（東から）
3　第３面全景（東から）
4　SK2掘削状況（南東から）
5　SP3壁面確認状況（南東から）
図版17　伏見城跡　遺構
1　１区全景（北西から）
2　１区南壁東端（宮内庁監理地）状況（北西から）
3　２区全景（西から）
4　２区造成土（北西から）
5　３区全景（北東から）
6　３区南壁西端断面（北から）
7　３区北壁断割部分（南東から）
図版18　伏見城跡　遺構
1　４区石垣（南から）
2　４区石垣（南西から）
図版19　伏見城跡　遺構
1　４区石垣崩落石検出状況（北東から）
2　４区西壁断面（東から）
3　４区東壁断面（南西から）
4　４区石材№５矢穴痕跡（南西から）
5　４区石材№21矢穴痕跡（南西から）

図版20　伏見城跡　遺構
1　4区石材№24矢穴痕跡（南西から）
2　4区石材№24矢穴痕跡（西から）
3　4区石材№31矢穴痕跡（南から）
4　4区石材№7ハツリ痕跡（南東から）
5　4区石材№12周辺の間詰石（南西から）
6　4区断割1硬検出状況（南から）
7　4区断割1崩落土除去後石垣成立面（南から）
図版21　伏見城跡　遺構
1　4区断割1根石（南から）
2　4区断割1根石（南から）
3　4区断割1東壁断面（北西から）
4　4区断割2裏込め（南から）
5　4区断割2西壁断面（南東から）
図版22　伏見城跡　遺構
1　4区断割2裏込め（南から）
2　4区断割2積石部分断面（東から）
3　4区断割2崩落土除去後積石検出状況（上から）
4　4区東壁部分石垣崩落土（南西から）
5　4区崩落石（南東から）
6　4区石垣断面（東から）
図版23　長岡京右京一条四坊十町跡（第1258次）、石見城跡　遺構
1　第1調査区第1遺構面全景（南東から）
2　第1調査区第2遺構面全景（南西から）
図版24　長岡京右京一条四坊十町跡（第1258次）、石見城跡　遺構
1　第1調査区溝11・12検出状況（北東から）
2　第1調査区溝12東壁断面（南西から）
3　追加調査区5遺構面検出状況（北東から）
図版25　長岡京跡隣接地　遺構
1　1区全景（東から）
2　2区全景（東から）
図版26　長岡京跡隣接地　遺構
1　2区土坑9・落込み10（北東から）
2　1区柱穴2（東から）
3　2区土坑9（東から）

Ⅰ　史跡旧二条離宮（二条城）、平安京左京三条二坊八町跡、堀川御池遺跡

1．調査経過

調査地は史跡二条離宮（二条城）の城内、東大手門の南方である。東大手門のすぐ西側には、平成26年度以来、来城者対応のための仮設総合案内所が設けられていたが、城門内の本来の広がりを視覚的に阻害していたため、これを移設し、かつ本設とすることが計画された。そこで、計画地に保存すべき顕著な遺構がないか事前に確認することを目的として、発掘調査を実施した。

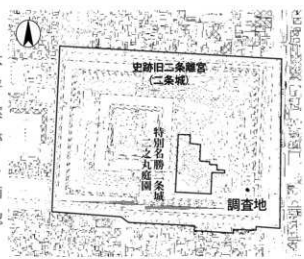


図１　調査位置図（1:5,000）

計画建物は空間的広がりを遮らないよう、また少しでも新規掘削が少なくなるよう、既存の松を２本除却して予定地としていた。この松の除根により計画建物の本体部分は既に攪乱されていたため[1]、本件調査は附設される土間予定部２箇所を対象とした。調査日は令和４年３月７日で、西側の調査区を１区、南側を２区とした。調査面積は約12㎡である。

なお、令和４年８月19日には、計画建物に引き込む電力線の埋設に伴う立会調査を行い、東大手門脇で石組暗渠を確認したので併せて報告する。

図２　１区全景（南から）

2．層序と検出遺構

（１）基本層序

第１遺構面は、厚さ３cmの現代整地土直下である。後述する溝１を検出したため、下層への掘り下げは行っていないが、建設が進んだ令和４年10月31日に、建物東側でアース設置に立ち会った際の所見では、GL-12cmまで暗茶褐色泥砂、-60cmまで円礫混じりで固く締まる暗褐色泥砂、以下、-70cmの掘削底まで水気を帯びた褐色砂泥という層序であった。

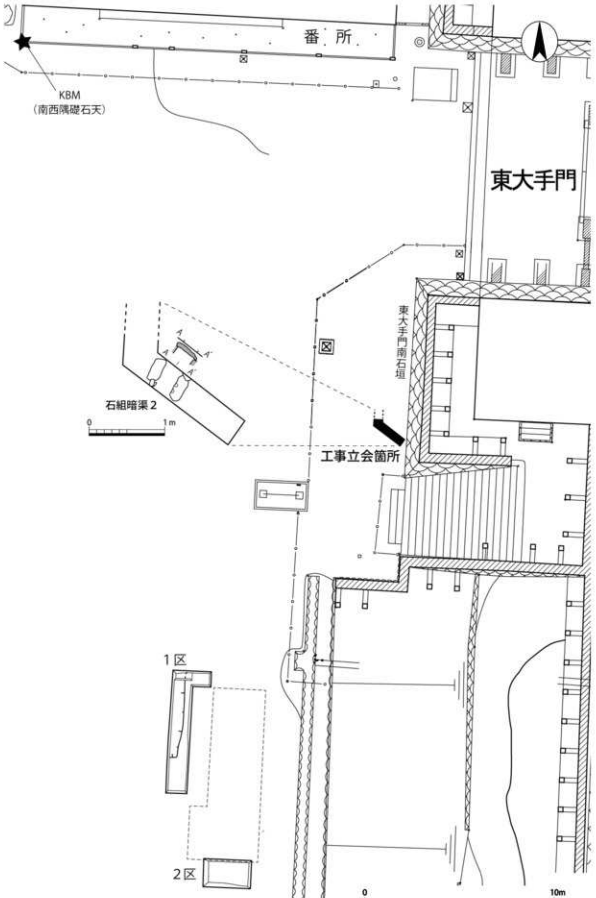


図3　調査区位置（1：200）及び遺構平面図（1：50）

表1　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
明治時代以降	溝１、石組暗渠２	

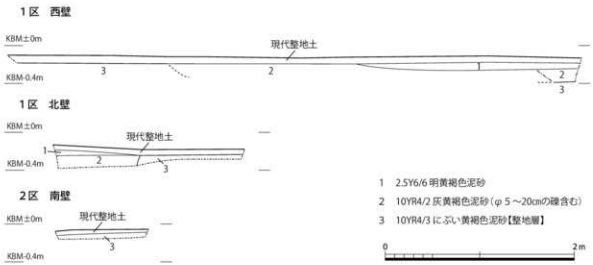


図４　１・２区壁断面図（１：40）

（２）遺構

溝１　１区の現代整地土直下で南北溝１条を検出した。検出幅0.6ｍ同長さ4.6ｍを測り、溝の西肩と北端は調査区外にある。北端を断ち割ったところ深さは約0.1ｍで、拳大の円礫を多く交えた灰黄褐色泥砂でこれを埋め（２層）、北半を中心に表面を明黄褐色泥砂（１層）で薄く覆っている。円礫同士の噛み合いは緩く、むしろ互いに遊離しているものが多い。表層の明黄褐色泥砂もほそぼそとした土を被せただけのような印象で、明瞭な機能面を形成しない。出土遺物は細片が少量のみで、年代を判定しうるものはなかった。

石組暗渠２　上述の立会調査において確認した。内法幅約0.45ｍで、矢穴を持つ側石は幅約0.3ｍ、長さ0.6～0.7ｍを測る。蓋石は厚さ約0.15ｍ。北に対して東へ振っているが、検出地点のすぐ北側では、攪乱坑の東壁で、溝の東側石列の続きと思われる石材が正南北方向に並ぶ状況を確認した（図５写真奥側）。なお、電力線はこれらの遺構を回避して埋設された。

図５　石組溝検出状況（南西から）

3．まとめ

今回の調査では溝１の全容は不明で、またこれと組み合うような関連遺構も検出していない。したがってその性格は明確でないが、若干の予察を試みる。

礫を詰めた溝の機能としてまず考えられるのは排水暗渠であるが、排水溝としてはやや浅すぎ、また流水を示す砂やシルトの堆積が認められないため、考えにくい。次に土蔵などの基礎地業が思い浮かぶが、礫同士が噛み合っておらず、重量物を支えたようには見受けられない。そこで二条城の古図面類を見ると、京都府庁時代[2]の明治４～６年のものとされる「二條城府廳建物千二百分一図」（二条離宮沿革附図所収、宮内庁宮内公文書館蔵）に、「御ウマヤ」と註記した南北棟建物が描かれていることが知れる[3]。この馬屋は二条城期、離宮期の図面には認められず、府庁期にのみ存在したようである。

溝１を馬屋に伴うものと仮定すれば、複数の馬房を横断する排尿設備である可能性が考えられる。馬屋における溝状の排尿設備は古代の事例が目立ち、近世・近代は馬房ごとに便槽を設けることが多いとされるが、18世紀の加賀藩屋敷に、便槽である土坑を浅い溝で繋ぐ事例がある[4]。加賀藩屋敷例では溝に礫の充填がなく、片や本件では便槽あるいは流末が未確認であるため、両者を安易に結びつけることはできないが、検出遺構の解釈案として提示しておきたい。

（堀 大輔）

註

１）除樞時には立会調査を行ったが、顕著な遺構は認められなかった。

２）府庁は明治４年に二条城に置かれ、明治18年に現在地へ移った。

３）京都市『史跡二条離宮（二条城）保存活用計画』、2020年。

４）東京大学本郷構内遺跡（東京大学埋蔵文化財調査室『山上会館・御殿下記念館地点』1990年、篠崎穣治『馬小屋の考古学』高志書院、2010年）。

Ⅱ．平安京左京七条二坊十六町跡

１．調査経過

調査地は下京区学林町299、300、301に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地「平安京跡」に該当する（図１）。ここに個人住宅兼共同住宅建築の計画がなされ、文化財保護法第93条第１項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。これを受けて、令和４年６月13日に本市文化財保護課は、埋蔵文化財の遺存状況を確認するための試掘調査を実施した。その結果、計画地の一部で遺跡が良好に遺存していることが明らかとなり、記録保存のための発掘調査を実施した。

調査は８月１日から９月２日まで実施し、調査日数は延べ23日、調査面積は60㎡である。なお、調査期間中に市民ボランティア１名を受け入れた。

２．遺　跡

（１）位置と歴史的環境

当該地は平安京左京七条二坊十六町に位置し、北は六条大路、東は西洞院大路、南は左女牛小路、西は油小路に囲まれる。調査区は町域内の北東に位置し、西三行北一～二門に該当する。平安時代

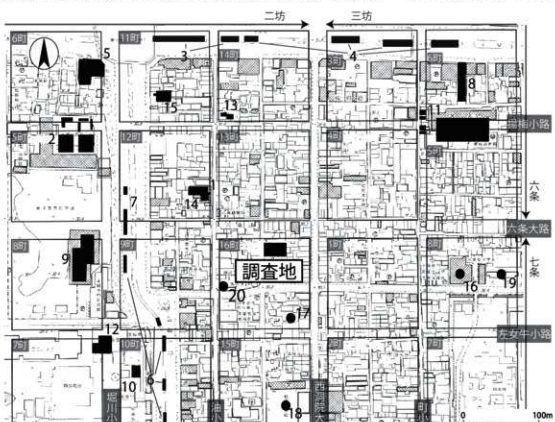


図１　調査地点と周辺調査　（１：5,000）

図2　調査前風景（北東から）

図3　重機掘削状況（南から）

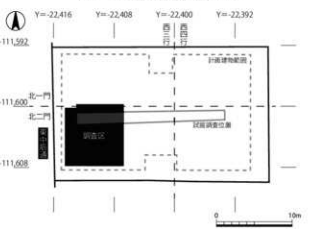


図4　調査区配置図　（1：500）

後期頃には、『仁和寺所蔵古図』に本町内に「親忠家平伯耆護堂」が所在したと記録が残るが、詳細は定かではない。周辺に目を向けると、十三・十四町には宇多天皇中宮藤原温子の御所である「東七条宮」が所在した。彼女の没後は宇多上皇の後院となり「亭子院」として知られるようになる。また北隣接町である六条二坊十三町には、宇多天皇皇女孚子内親王の御所である「桂宮」が所在した。その後、寿永2年（1183）に後白河法皇がこの地に入り、文治4年（1188）には隣接地をも取り込み、南北二町分の広大な「六条殿」を形成した。後白河法皇が広大な荘園を寄付したことで知られる長講堂は、この六条殿内にある。さらに周辺には院近臣の邸宅が集まり、中には源氏一族の館も一帯に所在していたようである。江戸時代に描かれた『中古京師内外地図』には、源氏一族の屋敷地や、「源氏町」、「源氏渠代堀川館」の名が見える。

室町時代における当該地の土地利用状況を示す史料には恵まれないが、天正19年（1591）に本願寺が現在の位置に移転すると、その周辺に坊官や商工業者が移住し、寺内町が形成される。調査地が位置する「学林町」の名は、宝暦12年（1762）に出版された「京町鑑」に初めて見られる。承応の闘諍（とうそう）[1]により破却された僧侶の教育機関である学寮が、元禄8年（1695）に当地周辺に「学林」として再設置されたことが、現在まで続く地名の由来となる[2]。

このように平安時代から鎌倉時代、江戸時代以降において、土地利用の記録が豊富に遺されている地域である。

（2）周辺の調査事例（図1・表1）

調査地が位置する十六町では、過去に試掘・立会調査が行われており、平安時代後期の整地土や中近世の包含層を確認している。さらに周辺町では、発掘調査を含めた多くの調査が行われている。周辺調査で確認されている基盤層は、砂礫ないし砂を主体とする洪水堆積層であり、弥生時代

後期から古墳時代前期頃に形成されたと考えられている[3]。平安時代前期から中期に属する遺構・遺物は希薄だが、平安時代後期のいわゆるウグイス色整地土に相当する整地土を、多くの調査で確認している。平安時代末期から鎌倉時代前期の遺構も数多く見られ、調査13ではウマの埋葬遺構を検出しており、当地が源仲国の屋敷跡に比定されており、武家屋敷との関連が注目される。

室町時代の遺構は、調査2などの本圀寺跡などで確認している。調査9では「大光山本圀寺」銘を持つ瓦など、本圀寺所用瓦が多数出土している。その他、調査15で室町時代後半に埋没した池および濠、調査11で井戸と埋甕遺構群、路面などを確認している。

室町時代末期から江戸時代には、再び遺構数が増加する。調査1では土壙墓を数多く確認し、隣接する調査14では、石室遺構を持つ町屋の存在が明らかとなっている。その他の調査でも、遺構・遺物共に数多く確認しており、本調査地周辺における活発な土地利用の痕跡が認められる。

表1　周辺の調査事例一覧表（調査番号は図1に対応）

調査	調査区分	概要	文献
1	発掘	平安時代から江戸時代にかけての遺構を多数確認。江戸時代の土壙墓を多数検出。	埋文研『552 年度京都市埋蔵文化財調査概要』、2011 年。
2	発掘	平安時代後期の整地土を確認。天文法華の乱に起因する火災処理土坑を検出。	埋文研『554 年度京都市埋蔵文化財調査概要』、2012 年。
3	発掘	平安時代～江戸時代の遺構を確認。	埋文研『557 年度京都市埋蔵文化財調査概要』、1984 年。
4	発掘	古墳時代、平安時代～江戸時代の遺構を確認。	埋文研『558 年度京都市埋蔵文化財調査概要』、1986 年。
5	発掘	平安時代後期の井戸や、鎌倉時代の土壙墓、本圀寺に関連する遺構を検出。	平安博物館『平安京左京六条二坊六町』、1986 年。
6	発掘	弥生時代から古墳時代、平安時代以降の遺構を確認。	埋文研『561 年度京都市埋蔵文化財調査概要』、1990 年。
7	発掘	調査区全域で堀川を検出。	埋文研『562 年度京都市埋蔵文化財調査概要』、1991 年。
8	発掘	平安時代後期から鎌倉時代、江戸時代初頭の整地土を確認。	埋文研『H2 年度京都市埋蔵文化財調査概要』、1994 年。
9	発掘	平安時代の包含層、室町時代の遺構を確認。本圀寺銘の瓦が出土。	埋文研『H6 年度京都市埋蔵文化財調査概要』、1996 年。
10	発掘	平安時代後期から江戸時代の遺構を確認。	埋文研『史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊十町跡』2007-2、2007 年。
11	発掘	平安時代～江戸時代の遺構を確認。平安時代後期と江戸時代の整地土を確認。	埋文研『平安京左京六条五町跡』2005-8、2005 年。
12	発掘	鎌倉時代、室町時代（3 層）、江戸時代の整地土を確認。 室町時代から江戸時代初頭の園池を検出。	埋文研『H7 年度京都市埋蔵文化財調査概要』、1997 年。
13	発掘	平安時代後期から江戸時代の遺構を多数確認。 中世のウマ埋葬遺構を検出。	元文研『平安京左京六条二坊十四町・烏丸綾小路遺跡』、2017 年。
14	発掘	平安時代後期から江戸時代にかけての遺構を多数確認。 平安時代後期から室町時代前期、江戸時代以降に顕著。	元文研『平安京左京六条二坊十二町跡・烏丸綾小路遺跡』、2019 年。
15	発掘	室町時代後期の池を検出。	（株）文化財サービス『平安京左京六条二坊十一町・烏丸綾小路遺跡発掘調査報告書』、2019 年。
16	試掘	鎌倉時代・江戸時代の包含層を確認。	市文化観光局『京都市内遺跡試掘調査概要　平成 3 年度』、1992 年。
17	試掘	GL-1.0m で平安時代後期の整地土を確認。	市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告　平成 27 年度』、2016 年。
18	試掘	GL-0.95m で中世以前の整地土、-1.6m で地山の砂礫を確認。 3～4 面の遺構面が存在する可能性を確認。	市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告　令和元年度』、2020 年。
19	試掘	平安時代中期、平安時代末から鎌倉時代、中世前期、中世後期の遺構面を確認。	市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告　令和 4 年度』、2023 年。
20	立会	GL-0.6m で江戸時代包含層、-1.0m で室町時代包含層、 -1.2m で時期不明包含層を確認。	市埋文センター『京都市内遺跡試掘・立会調査報告昭和 55 年度』、1981 年。

※1　埋文研＝財団法人京都市埋蔵文化財研究所（2013年以降は公益財団法人）、市埋文センター＝京都市埋蔵文化財センター、元文研＝公益財団法人元興寺文化財研究所
※2　本表は周辺の主要な調査事例を抽出したものであり、悉皆的に提示したものではない。

3. 遺　構

（1）基本層序（図5）

壁面にかかる遺構が比較的少なく、各層が最も良好に観察できた西壁を代表して述べる。

現地表面は概ね水平であり、標高29.75mを測る。現代盛土以下、GL-0.4mでにぶい黄褐色粘性細砂の整地土（近代）、-0.5mでにぶい黄褐色砂泥の整地土（近世前期、第1面）、-0.8mでにぶい黄褐色砂泥～泥砂（平安時代末～鎌倉時代初頭、第2面）、-0.9～1.0mでにぶい黄褐色～褐色砂礫（基盤層、第3面）となる。

（2）遺構

平安時代中期の遺構（図6）

平安時代中期の遺構を、にぶい黄褐色～褐色砂礫を主体とする基盤層上面で検出した（第3面）。

井戸152（図7）　調査区の北東側で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、南北1.2m、東西1.4mを測り、検出面からの深さは0.85mを測る。底中央部は一段深くなっており、この平面形は径0.6～0.7mの不整円形、深さ0.35mを測る。集水部と考えられる。なお、木部は遺存していなかったが、検出状況から曲桝は木製の曲物と推測される。

埋土は大きく3層に分かれ、3～6層が掘り方、2層が廃絶時の井戸枠内埋土、1層が廃絶後の落込みに堆積した層である。出土遺物は概ね平安時代中期頃の特徴を持つもので占められており、廃絶時期は平安時代中期を大きく下らないと思われる。

平安時代末期～鎌倉時代の遺構（図8）

平安時代末期から鎌倉時代の遺構を、にぶい黄褐色砂泥～泥砂層上面で検出した（第2面）。検出高は標高29.2mである。柱列・土坑・ピットがあり、ピットの多くは調査区南半に集中する。

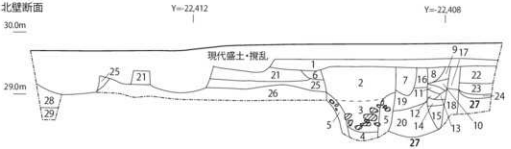
柱列1（図9）　調査区の南中央で検出した。南北方向に列を成している。ピット88・110・111・112から成る。ピットの径は0.3m～0.4mで、柱間は0.3～0.4mを測る。埋土は単層のもの（88・111）と、上下2層に分かれ、下層に径1～3㎝の小礫を含むもの（110・112）の2種がある。出土した遺物はいずれも細片で時期比定は困難だが、ピット110から6～7段階の特徴を持つ土師器皿細片が出土している。

柱列2（図9）　調査区の南東側、柱列1の西側で検出した。東西方向に列を成している。ピット

表2　遺構概要表

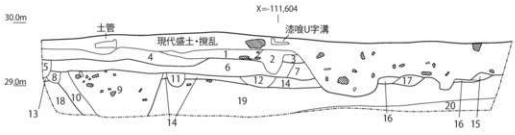
時　代	遺　構	備　考
平安時代中期	井戸152、ピット	
平安時代末期～鎌倉時代初頭	柱列1・2、土坑、ピット、整地層	
近世	井戸150、土坑149、柱穴26・43、土坑、ピット、整地層	

北壁断面



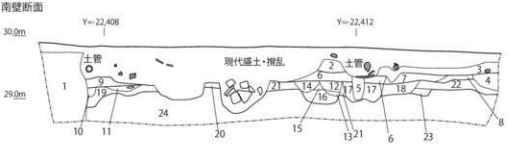
1 7.5YR6/4にぶい橙色細砂(φ3~7cmの礫多量含む)
2 7.5YR4/4褐色泥砂(遺物細片含む)【井戸150】
3 7.5YR4/4褐色泥砂【井戸150】
4 7.5YR4/1褐灰色粗砂(礫含む)【井戸150】
5 10YR4/4褐色細砂(φ5cm の礫含む)【井戸150】
6 10YR6/6明黄褐色泥砂(φ1cmの礫少量含む)
7 10YR3/3暗褐色粘性細砂(遺物細片含む)【ピット147】
8 7.5YR3/1黒褐色泥砂【ピット148】
9 7.5YR3/1黒褐色泥砂(Mn含む)【ピット148】
10 10YR4/1褐灰色泥砂(Mn含む)【ピット148】
11 10YR5/1褐灰色泥砂(Mn含む)【ピット148】
12 7.5YR5/2灰褐色泥砂(Mn含む)【ピット148】
13 2.5Y4/1黄灰色泥砂(Mn含む)【ピット148】
14 5Y3/1オリーブ黒色泥砂(Mn含む)【ピット148】
15 5Y2/1黒色砂泥【ピット148】
16 10YR3/2黒褐色粘性細砂(遺物細片含む)【土坑149】
17 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥【土坑149】
18 7.5YR3/1黒褐色砂泥よく締まる【土坑149】
19 10YR2/2黒褐色泥砂【土坑149】
20 2.5Y3/1黒褐色泥砂【土坑149】
21 10YR6/4にぶい黄橙色砂泥【整地土】
22 7.5YR3/1黒褐色泥砂【整地土】
23 7.5YR3/1黒褐色泥砂(遺物細片含む)【ピット161】
24 2.5Y3/1黒褐色粘性細砂(遺物細片多量含む)【ピット161】
25 2.5Y5/4黄褐色細砂【整地土】
26 10YR6/4にぶい黄橙色砂泥【整地土】
27 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂(φ1~5cm礫多量含む)【基盤層】
28 10YR5/4にぶい黄褐色砂(φ3~5cmの礫多量含む)【基盤層】
29 10YR4/6褐色粗砂【基盤層】

西壁断面



1 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂と
10YR7/3にぶい黄橙色粗砂の互層【近代三和土】
2 10YR4/3にぶい黄褐色中砂
3 7.5YR2/2黒褐色中砂~粗砂
4 10YR4/3にぶい黄褐色粘性細砂 (焼瓦片・焼土少量含む)
5 5YR3/1黒褐色粘性中砂【ピット168】
6 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(遺物細細片含む)【整地土】
7 10YR3/3暗褐色砂泥(遺物細細片含む)【整地土】
8 2.5Y3/1黒褐色粘性中砂(よく締まる)【ピット165】
9 10YR3/4暗褐色中砂(φ3~10cmの礫含む)【土坑66】
10 10YR3/3暗褐色中砂(φ3~5cmの礫含む)【土坑65】
11 10YR4/3にぶい黄褐色粘性泥砂【ピット67】
12 10YR3/4暗褐色細砂(遺物細片含む)【ピット170】
13 2.5Y5/4黄褐色砂泥(10YR4/4褐色泥砂をブロック状に含む)【整地土】
14 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥【整地土】
15 2.5Y5/4黄褐色細砂【整地土】
16 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂【整地土】
17 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂(φ1~3cmの礫多量含む)【整地土】
18 2.5Y5/2暗灰黄色細砂(φ3~5cmの礫多量含む)【基盤層】
19 10YR5/4にぶい黄褐色砂(φ3~5cmの礫多量含む)【基盤層】
20 10YR4/6褐色細砂【基盤層】

南壁断面



1 5YR3/6暗赤褐色細砂【火災処理土坑】
2 7.5YR4/1褐灰色細砂(ガラ多量含む)
3 10YR4/3にぶい黄褐色粘性細砂 (焼瓦片・焼土少量含む)
4 5YR3/1黒褐色粘性中砂【ピット168】
5 10YR3/1黒褐色粘性中砂【ピット169】
6 10YR4/3にぶい黄褐色粘性細砂 (土師器細片含む)【整地土】
7 10YR4/2灰黄褐色中砂【整地土】
8 5YR3/3暗赤褐色粘性中砂【整地土】
9 10YR4/2灰黄褐色粘性泥砂【整地土】
10 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂【ピット116】
11 10YR4/3にぶい黄褐色細砂~泥砂【ピット114】
12 7.5YR4/1褐灰色粘性細砂 (7.5YR3/3暗褐色中砂を含む)
13 10YR4/1褐灰色粘性細砂【ピット165】
14 7.5YR3/3暗褐色中砂 (φ1~2cmの礫含む)【ピット164】
15 7.5YR4/1褐灰色粘性細砂【ピット77】
16 7.5YR4/2灰褐色粘性中砂【ピット77】
17 10YR3/2黒褐色粘性細砂 (土師器細片含む)【土坑76】
18 10YR3/4暗褐色中砂 (土師器細片・炭含む)【土坑75】
19 10YR5/4にぶい黄褐色粘性砂泥【整地土】
20 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂【整地土】
21 10YR5/4にぶい黄褐色細砂【整地土】
22 2.5Y5/4黄褐色砂泥(10YR4/4褐灰色泥砂をブロック状に含む)【整地土】
23 22層に(φ1cmの礫含む)【整地土】
24 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂 (φ3~5cmの礫多量含む)【基盤層】

図5　調査区断面図（1：60）

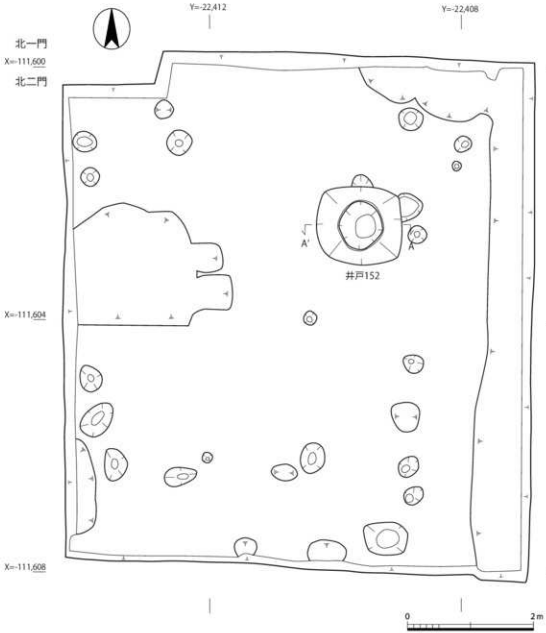


図6　第3面平面図（1：60）

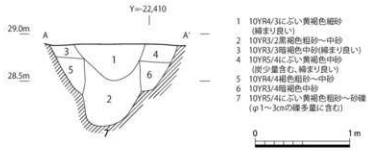


図7　井戸152断面図（1：40）

69・73・86からなる。ピットの径は0.2～0.4mで、柱間は0.8mを測る。埋土はいずれも単層である。出土遺物はいずれも図化に耐えられない細片だが、いずれのピットからも6～7段階の特徴を持つ遺物が出土している。

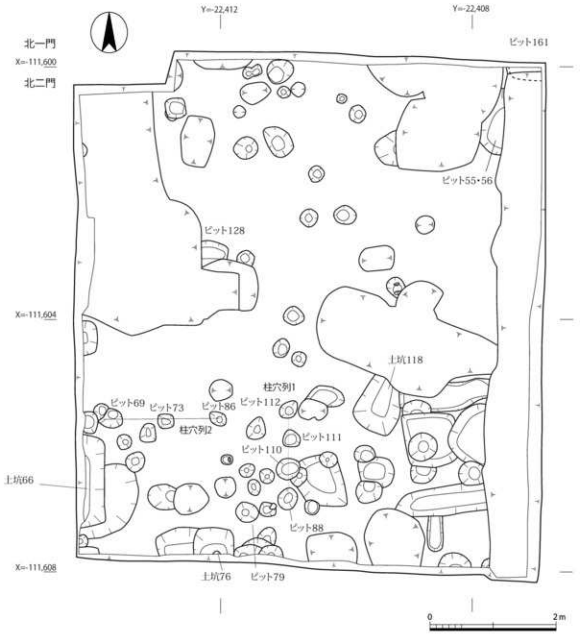


図8　第2面平面図（1：60）

桃山時代～江戸時代の遺構（図11）

にぶい黄褐色砂泥層上面で、室町時代末期から江戸時代の遺構を検出した（第1面）。検出高は標高29.4mである。井戸・土坑・ピットがある。

井戸150（図12）　調査区の北東側で検出した。平面形は円形を呈する石組の井戸である。北半は調査区外に伸びており、正確な規模は測り得ない。深さは断面図には反映できていないものの、約2.15mであることを断割りで確認した。埋土最下層の下は、径5㎝ほどの礫を多量に含む赤褐色粗砂であった。上部は遺物細片を含む褐色泥砂で埋められており、下部に石組みが遺存する。石組みは径5㎝の円礫が多数含まれる裏込めの内側に、短径10～15㎝、長径20～30㎝ほどの石材を、小口面を内側に向けて積み上げて構築している。裏込めの厚さは0.15～0.3mを測る。

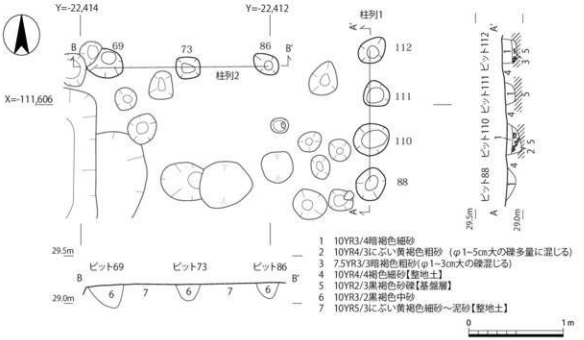


図9　柱穴列1・2平・断面図（1：40）

土坑149（図12）　平面形は円形を呈し、北側は調査区外に伸びており正確な規模は不明だが、径3m程度と思われる。深さは1.45mを測る。西側は井戸150に切られている。この土坑を埋め戻した後に、ピット147、148が掘り込まれている。

柱穴26（図13）　調査区の中央北側で検出した。平面形は不整円形を呈し、径0.3m程度、深さ0.15mを測る。埋土は単層である。中に長径20㎝、短径15㎝、高さ10㎝を測る河原石の根石を据える。根石の表面には被熱した痕跡が残る。

柱穴43（図13）　調査区の中央北東側で検出した。平面形は楕円形を呈し、短径0.3m、長径0.4m、深さ0.2mを測る。埋土は単層である。中に一辺15㎝程度を測る、ブロック状に加工された花崗岩の根石を据える。

他にも第1面では、柱穴26・43と同様の規模をもつピットを、特に北半で多数検出した。これらのピットは根石を持たないものの、切り合い関係を持つものが多く、建物が幾度となく建て替えられた状況を示している可能性がある。

火災処理土坑（図10）　調査区の東壁で、火災処理土坑を確認した。南北長7.8m以上を測り、調査区南側と東側に続く。焼土と焼瓦で埋められており、出土遺物の大半は桟瓦である。また、焼け焦げた木材や鉄釘といった、建築部材も含まれていた。出土遺物や史料を勘案するに、天明8年（1788）の天明の大火か、元治元年（1864）の元治の大火のいずれかで生じた瓦礫の処理土坑と考えられる。

図10　火災処理土坑（北西から）

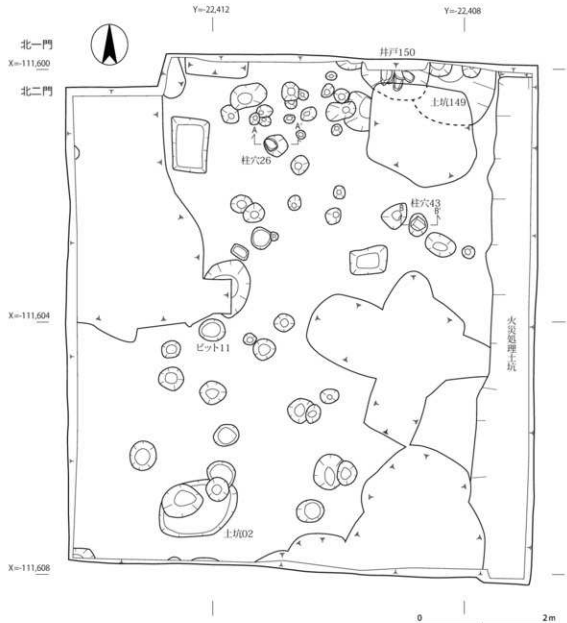


図11　第1面平面図（1：60）

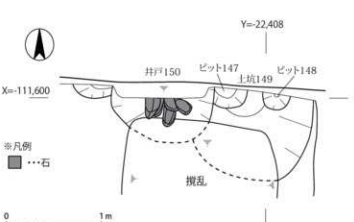


図12　土坑149・井戸150平面図（1：40）

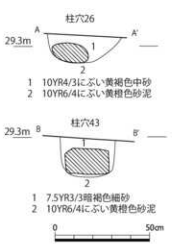


図13　柱穴26、43断面図（1：20）

4．遺　物

（1）出土遺物の概要（表3）

整理箱にして、調査終了時点で9箱出土した。時期は縄文時代から近代のものがあるが、大半が平安時代中期から鎌倉時代、江戸時代のものである。

（2）出土遺物

基盤層（図14）

下層確認のための断割を行った際、基盤層（西壁19層）から出土した。1は弥生土器である。壷もしくは甕の底部と考えられる。底部は平底。内外面は著しく磨滅する。他にも弥生土器か古式土師器と思われる細片が複数点出土しているが、いずれも表面が著しく摩滅している。

井戸152出土遺物（図15）

2～7は土師器皿Aである。口径は9.1～10.9㎝を測る。6は口縁部の一部に煤が付着する。8は土師器皿Nである。口径は12.0㎝を測る。体部に横ナデを施した後、口縁部を外反させるように再度横ナデを施す。これらは4A段階の特徴を持つ。9は灰釉陶器の底部である。底部径は7.0㎝を測る。残存部全体に露胎しているが、内面に部分的に釉が付着する。10・11は須恵器鉢である。10は口径27.7㎝を測る。いずれも内面下半は摩耗が著しい。11世紀前葉～中葉の遺物と思われる。

第2面整地土内出土遺物（図16）

12は土師器皿Aである。13～18は土師器皿Nである。口径8.5㎝の14・15と、口径11.8～12.7㎝の16・17の2つの口径群が認められる。13・18は大型の群に属するか。19・20は、土師器皿Scである。口径は19が5.2㎝、20が5.3㎝を測る。21・22は土師器皿Sである。口径は21が10.8㎝、22が11.2㎝を測る。21は体部に横ナデを施し、外面には凹状にその痕跡が明瞭に残る。

表3　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代以前	石器、弥生土器、土師器		石鏃1点、弥生土器1点		
平安時代中期	土師器、須恵器、陶磁器、軒丸瓦、軒平瓦		土師器7点、須恵器2点、灰釉陶器1点 軒丸瓦2点、軒平瓦1点		
平安時代末期～鎌倉時代	土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、金属製品、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦		土師器43点、瓦器2点、須恵器1点 土製品1点、鉄製品1点、軒平瓦3点		
江戸時代以降	土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、桟瓦、土製品		土師器6点、瓦器1点、施釉陶器1点、 土製品1点、陶製品3点、軒桟瓦1点		
合　計		11箱	79点（2箱）	1箱	8箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物の抽出、詰め直しのため、出土時より2箱多くなっている。

図14　基盤層出土遺物実測図（1：4）

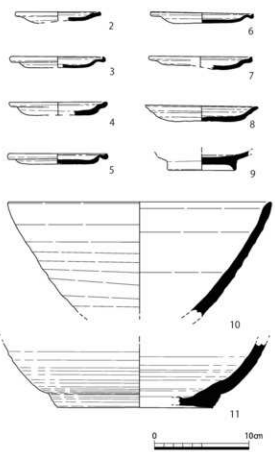


図15　井戸152出土遺物実測図（1：4）

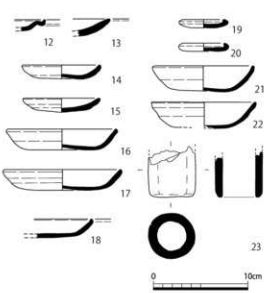


図16　第2面整地土内出土遺物実測図（1：4）

23は円筒状土製品である。外径4.8㎝、内径3.1～3.2㎝、残存長5.3㎝を測る。輪羽口の可能性が考えられるが、被熱痕や金属滓の付着等使用痕は認められず、他に金属製品生産関連遺構・遺物を確認していないため、その用途を断定する根拠に欠ける。一部に古い遺物が含まれるが、全体としては12世紀末から13世紀前半の遺物と考えられる。

第2面遺構出土遺物（図17）

ピット55・56　調査時には切り合い関係にある2つの遺構と認識していたが、整理の結果、同一のピットであると判断した。

24～31は土師器皿Nである。径8.3㎝を測る24・25と、径10.1～12.4㎝を測る26～31の、2つの口径群が認められる。土師器皿Nの破片が圧倒的多数を占めるが、わずかに土師器皿Sの細片が出土している。6B～6C段階頃のものと考えられる。32は瓦器鍋である。口径27.0㎝を測る。外面は指オサエ、内面は横ハケで整形する。33は鉄釘である。残存長3.0㎝、径0.5㎝を測る。頭部は方形で、下半を欠損する。身部にわずかに木質らしき有機質が付着する。

土坑66　34は土師器皿Scである。口径4.1㎝を測る。35は土師器皿Nである。口径7.5㎝を測る。36は須恵器鉢である。37は瓦器鍋である。口径22.4㎝を測る。これらの遺物は、13世紀後葉の遺物と思われる。

土坑76　38～42は土師器皿Nである。口径は7.9～8.7㎝を測る。38は内面に一方向ナデを施した後、外面に段が生じるような強い横ナデを施す。最後に口縁端部に横ナデを施しており、3度の調整痕跡が明瞭に残る。13世紀後葉～14世紀前葉の遺物と思われる。

ピット79　43・44は土師器皿Nである。43は口径10.9㎝を測る。45は土師器皿Sである。

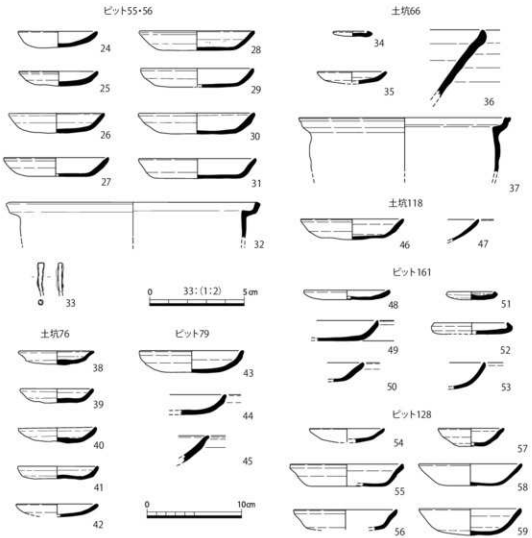


図17　第2面各遺構出土遺物実測図（24～32・34～59は1：4、33は1：2）

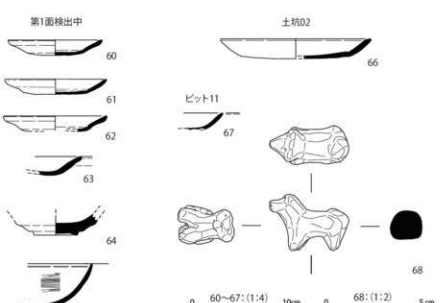


図18　第1面整地土内及び各遺構出土遺物実測図（60～67は1：4、68は1：2）

これらは13世紀後葉頃の遺物と思われる。

土坑118　46は土師器皿Nである。口径は10.1㎝を測る。47は土師器皿Sである。いずれも、7段階前半の特徴を持ち、13世紀後葉の遺物と思われる。

ピット161　北半は調査区北側に続き、南半は火災処理土坑に切られているため、平面上では検出できていない。壁面（北壁24層）に土師器片が大量に含まれており、これの一部を回収した。

48～50は土師器皿Nである。48は口径8.8㎝を測る。51・52は土師器皿Scである。51は口径5.5㎝、52は口径7.8㎝程度を測る。口縁端部の処理が雑描で、歪みが大きい。53は土師器皿Sである。これらは6C～7段階の特徴を持ち、13世紀後葉の遺物と思われる。

ピット128　54～56は土師器皿Nである。径8.1㎝を測る54と、11.1～12.1㎝を測る55・56の、2つの口径群が認められる。57～59は土師器皿Sである。径7.3㎝を測る57と、9.9～11.1㎝を測る58・59の、2つの口径群が認められる。7段階前半、13世紀後葉～14世紀前葉頃の遺物と考えられる。

第1面整地土内、遺構出土遺物（図18）

検出中出土遺物　60～63は土師器皿Sである。60は口径10.0㎝、61は口径10.8㎝、62は口径11.1㎝を測る。60～62の底部には先端の丸い棒状工具で圏線を施す。62は口縁端部の一部に煤が付着する。64は京焼の椀である。底部径は4.6㎝を測る。底部は露胎している。65は瓦器椀である。他に染付・焼締陶器等の細片が多数出土している。全体としては16世紀後葉以降の遺物が多い。

土坑02　66は土師器皿Sである。口径15.8㎝を測る。全体的に煤が付着し、特に口縁端部に顕著である。口縁端部に横ナデを施し、水平面を形成する。また、底部には泥漿のたまりが圏線状にめぐる。16世紀後葉頃の遺物と思われる。

ピット11　67は土師器皿Sである。68は犬形土製品である。体長4.3㎝、体高3.0㎝を測る。尻尾の一部と右後脚の一部がわずかに欠けているほか、完存する。手づくねで成形されており、両目を先端の尖った棒状工具で刺突し、口は横方向に一文字の切れ込みを入れて表現する。尻尾は反時計回りに巻いて表現した痕跡が残る。良好な共伴遺物に恵まれず時期比定は難しいが、16世紀末～17世紀初頭の遺物と考えたい。

第1面整地土内出土遺物（図19）

69はサヌカイト製の打製石鏃である。第1面検出中に出土した。全長2.3㎝、基部幅1.4㎝を測る。基部は平基式である。整地する際に混入したものと思われる。

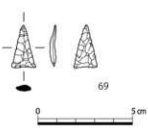


図19　第1面整地土内出土遺物実測図（1：2）

攪乱土中出土遺物（図20）

70～72は陶製の蝋燭立である。調査区北西部の攪乱坑から、数

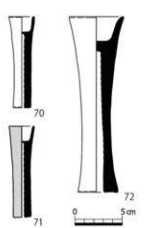


図20　攪乱土中出土遺物実測図（1：4）

百点がまとまって投棄されているような状況で出土した。大部分が破損していたが、遺存状態の良い3点を報告する。70は高さ9.6㎝、上部径2.8㎝、下部1.9㎝。71は高さ9.7㎝、上部径2.6㎝、下部径1.9㎝。72は高さ18.6㎝、上部径5.8㎝、下部径4.2㎝を測る。大小2種類があり、いずれも蝋燭の受けとなる上部内面が施釉されている。下部には軸棒を差すためのものと思われる穴が開いており、70・71は径0.5㎝、72は径1.2㎝を測る。また、素地は白色だが、71のように赤彩されているものもある。時期は出土層位から近現代の遺物と思われるが、調査地の寺内町としての性格を考える上で、重要な遺物である。

瓦（図21）

瓦1・2は複弁四葉蓮華文軒丸瓦である。井戸152から出土した。別個体だが、同文と思われる。中房には蓮子を配する。花弁間には弁間文を配置し、外区には圏線と珠文が巡る。珠文は小さく、密に配する。瓦当貼り付け技法で成形する。平安宮朝堂院で、同文の瓦が出土している[47]。11世紀中葉から後葉の丹波産である。瓦3は軒桟瓦の瓦当（丸瓦部）である。火災処理土坑から出土した。三巴文である。火災処理土坑からは大量の桟瓦が出土しているが、瓦3を含めた殆どは被熱している。瓦4は唐草文軒平瓦である。井戸152から出土した。唐草の各単位は独立し、外区には珠文が密に巡る。顎部裏面に横方向の縄タタキ目が残る。丹波産である。瓦5は剣頭文軒平瓦である。ピット55・56（図8）から出土した。中央に巴文を配置する。凹面に布目が明瞭に残り、上周縁部と顎下部にケズリを施す。12世紀後半から13世紀前半の山城産である。ピット55・56からは、他に

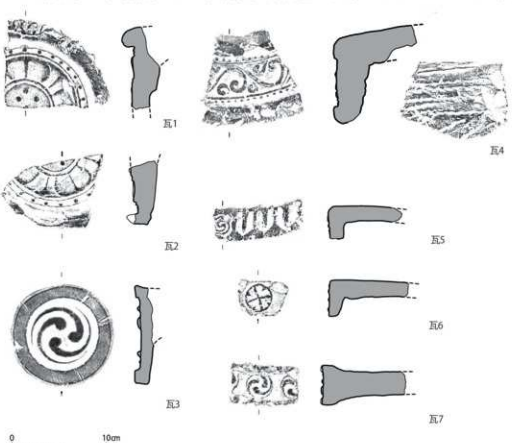


図21　出土瓦実測図及び拓影（1：4）

平・丸瓦の細片が少数点出土している。瓦6は軒平瓦である。第2面検出中に出土した。瓦当の一部分のみが遺存し、全体の文様は不明である。凹面に布目、凸面に縄タタキ目が明瞭に残る。細片のため判断は難しいが、六勝寺や平安宮真言院から同文の可能性がある軒平瓦が出土している[5]。これは12世紀後葉の山城産である。瓦7は連巴文軒平瓦である。土坑66から出土した。三巴文を2単位以上配置する。12世紀頃の遺物と思われる。

5. まとめ

平安時代中期の遺構を確認した基盤層内からは、弥生時代から古墳時代の土器片が出土した。土器片はいずれも激しく磨滅しており、洪水に伴って流されてきたものと見られる。周辺調査で確認した基盤層は、弥生時代後期～古墳時代初頭に形成された洪水堆積層と見られており、今回の調査で確認した基盤層と同一であろう。周辺調査成果を追認する結果となった。

11世紀中頃に埋没したと思われる井戸152からは、土師器や須恵器、軒瓦等が出土した。平安時代中期に属する遺構は希薄だが、井戸の存在は周辺で人々が生活していたことを裏付ける。周辺で確認されている平安時代中期に遡る遺構は数が限られており、今回の調査で当該期の井戸が確認できたのは、貴重な成果と位置づけられる。

調査地で最も遺構密度が高い時期は、平安時代末期から鎌倉時代である。特に、鎌倉時代の遺構が多かった。この時期のものは、柱列1・2をはじめとして、柱穴と思われるピットを多数確認した。調査区の南半でピットが集中している状況は、ここで幾度となく建物が建て直された状況が想定できる。また、周辺調査でもこの時期の遺構・遺物が多数報告されており、今回の調査成果からも、調査地一帯で人々が活発に土地利用をしていた様子がうかがえる。しかし、室町時代に入ると一転して遺構・遺物共に減少する。

再び遺構密度が高くなるのは、室町時代末期以降である。これは本願寺が現在の位置に移転する時期と符合する。整地を伴うことから、寺内町として大規模に整備されたのだろう。根石が据えられた柱穴を含む多数のピットや井戸の存在は、人々が調査地で生活を営んでいた証左となる。現在まで続く「学林町」は、この時期にその萌芽を見る事ができる。

調査区東壁で確認した火災処理土坑は、南北幅7.5m以上を測る大規模なものであった。大量に投棄された焼瓦から被害の甚大さがうかがえるとともに、この土坑の存在は、復興に向けた人々の活動を裏付ける。

以上、今回の調査成果を報告した。平安時代中期や、平安時代末期から鎌倉時代、室町時代末期から江戸時代にかけて、人々が生活を営んでいた痕跡を確認した。特に平安時代末期から鎌倉時代、室町時代末期から江戸時代にかけて遺構が集中する様子は、周辺調査でも確認されている。概ね周辺の調査成果を追認する結果となった。今後周辺でのさらなる調査事例の積み重ねにより、より詳細な歴史叙述が可能となるだろう。今後の調査の進展に期待したい。

（佐藤拓）

註

1） 承応2年（1653）に、浄土真宗本願寺派内で起こった教義紛争。これを裁定した幕府の命令により、当時西本願寺内にあった「学寮」が破却され、以後この教育機関を「学寮」と名乗ることを禁止される。

2） ただし、「学林」は学林町内において拡張や再建を繰り返しており、今回の調査地に「学林」が所在したかは定かではない。

3）『平安京左京六条二坊十四町　烏丸綾小路遺跡』（公財）元興寺文化財研究所、2017年。
『平安京左京六条二坊十二町跡　烏丸綾小路遺跡』（公財）元興寺文化財研究所、2019年。

4）「1　平安宮朝堂院・豊楽院跡」『平成11年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、2002年。

5）『円勝寺・成勝寺・白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-17、（公財）京都市埋蔵文化財研究所、2016年。
「平安宮真言院跡推定地発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告1975』京都市文化観光局文化財保護課、1976年。

Ⅲ　平安京右京三条二坊十四町跡、西ノ京遺跡

1．調査経過

調査地は、御池通と西大路通の交差点の南西にあたる中京区西ノ京下合町23、24に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地「平安京跡」、「西ノ京遺跡」に該当する（図1）。この地に共同住宅新築の計画がなされ、令和4年6月16日付けで文化財保護法第93条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。当該地周辺では過去に複数の発掘調査が行われており（図1）、中でも、対象地北側に位置する調査（図1-13、表1-13）では、平安時代前期の建物や井戸、条坊関連遺構のほか、平安時代中期から室町時代初め頃の野寺川とこれに伴う水利施設が確認されている。

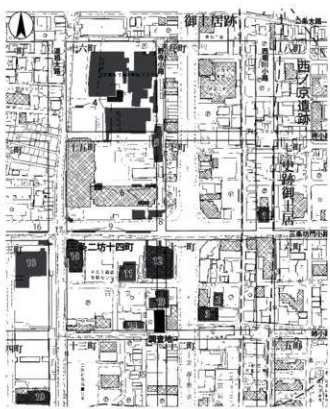


図1　調査位置図及び周辺調査位置図（1：5,000）

これらの調査成果から、当該地にも遺構が展開する可能性が高く、文化庁国庫補助事業による記録保存のための発掘調査を行うこととなった。調査期間は、令和4年7月6～27日、調査面積は74㎡である。

2．遺　跡

（1）地理的環境と歴史的環境

調査地は京都盆地の北西部に位置し、鷹峯を源流とした紙屋川（天神川）の扇状地上にあたる。弥生時代から古墳時代の遺構が確認される西ノ京遺跡の南東部と、平安京右京三条二坊十四町の南東部及び野寺小路の路面部分に該当する。十四町の居住者や利用について詳細は不明である。しかし、十四町の北にあたる三条二坊十六町は斎宮の邸宅、南にあたる四条二坊十一～十四町は淳和天皇の離宮である淳和院と、近隣には大規模邸宅が建ち並んでいた。中世以降は不明な点が多いが、近世から昭和初期までは西京村の耕作地として利用されていた[1]。

図２　重機掘削風景（南西から）

図３　人力掘削風景（南西から）

図４　写真撮影風景（西から）

図５　測量風景（南西から）

図６　埋戻し風景（南東から）

図７　埋戻し風景（南西から）

（２）既往の調査

調査地周辺では、多くの発掘調査が実施され、平安時代の宅地や条坊関連遺構などが確認されている（図１・表１）。

当該地は弥生時代から古墳時代の散布地である西ノ京遺跡の南東部にあたるものの、西に約150ｍの場所で行われた調査の際に古墳時代の溝が数条確認されている程度で、明確な遺構は確認され

表1　周辺調査一覧表

調査	条坊地点	主要遺構	文献
1	西堀川小路	平安時代前期の建物，平安時代中期の路面・西堀川小路西側溝	平尾政幸ほか『右京三条二坊』『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所　1984年
2	右京三条二坊十一町	平安時代前期の建物，鎌倉時代の耕作溝	モンペケ恭代『平安京右京三条二坊十一町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書 2006-24 (財)京都市埋蔵文化財研究所　2007年
3	右京三条二坊十一町	平安時代前期～中期の井戸・土坑・溝・柱穴，中世以降の遺物を含む泥炭堆積層	報告書は未刊.『平安京右京三条二坊十一町跡発掘調査終了報告書』より古代文化調査会　1994年
4	右京三条二坊十六町	平安時代前期～中期の建物群・庭園・泉	鈴木廣司ほか『平安京右京三条二坊十五・十六町一「嵯宮」の邸宅跡一』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊　(財)京都市埋蔵文化財研究所　2002年
5	右京三条二坊十五～十六町	平安時代中期の押小路両側溝・建物・井戸，平安時代後期の野寺小路川	辻純一『右京三条二坊(2)』『昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所　1983年
6	右京三条二坊十五町	平安時代前期～中期の池・土坑・柵	鈴木廣司ほか『平安京右京三条二坊十五・十六町一「嵯宮」の邸宅跡一』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊　(財)京都市埋蔵文化財研究所　2002年
7	右京三条二坊十五町	平安時代前期の溝・柱穴，中世の井戸	本弥八郎『平安京右京三条二坊』『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所　1991年
8	右京三条二坊十五町	平安時代中期の建物・溝・柵，平安時代後期の野寺小路川・柵	津々池忠一『平安京右京三条二坊十五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-8 (財)京都市埋蔵文化財研究所　2004年
9	右京三条二坊十五町	平安時代前期の土坑・井戸・柱穴，室町時代の溝	百瀬正恒ほか『平安京右京三条二坊十五町・三坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-6 (財)京都市埋蔵文化財研究所　2002年
10	右京三条二坊十四町	三条坊門小路南側溝，平安時代の建物・門・柵・井戸・道祖大路川	南孝雄『平安京右京三条二坊』『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所　2000年
11	右京三条二坊十四町	平安時代前期の建物・柵，近世の土取り土坑	報告書は未刊.『平安京右京三条二坊十四町発掘調査終了報告書』より(財)古代学協会　2002年
12	右京三条二坊十四町	平安時代前期～中期の三条坊門小路南側溝・野寺小路東西両側溝・柵，野寺小路川	木下保明『平安京右京三条二坊2』『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所　1994年
13	右京三条二坊十四町	平安時代前期の井戸・柱穴，平安時代中期～室町時代初め頃の野寺小路川跡・水利施設	布川豊治『平安京右京三条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-1 (財)京都市埋蔵文化財研究所　2006年
14	右京三条二坊十四町	平安時代前半の柱穴列，室町時代の土取り土坑	岡田麻衣子『平安京右京三条二坊十四町跡・西ノ京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2020-9 (公財)京都市埋蔵文化財研究所　2020年
15	右京三条二坊十三町	鎌倉時代～室町時代の土取り跡・柱穴，江戸時代の耕作跡	山口真子『平安京右京三条二坊十三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-19 (財)京都市埋蔵文化財研究所　2005年
16	右京三条三坊二町	平安時代前期の土坑・井戸・柱穴，室町時代の溝	百瀬正恒ほか『平安京右京三条二坊十五町・三坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-6 (財)京都市埋蔵文化財研究所　2002年
17	右京三条二坊十五町	平安時代前期～中期の南北溝・川跡・側溝	卜田健司『平安京右京三条二坊十五町・三坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-5 (財)京都市埋蔵文化財研究所　2005年
18	右京三条三坊三町	平安時代前期～中期の建物・井戸・道祖大路東側溝	南孝雄『平安京右京三条三坊三町跡・西ノ京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-23 (公財)京都市埋蔵文化財研究所　2013年
19	右京三条三坊四町	平安時代前期の道祖大路西築地内溝・橋・建物・土坑	平尾政幸ほか『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所　1990年

ていない[2]。

当該地を含む十四町内の調査では、町の中央部（調査11）で平安時代前期の1または2面の庇をもつ建物や宅地境界を示す柵が確認されており、二面庇建物を中心とした1/8町の宅地割が想定されている。北西部（調査10）でも建物や柵が複数確認されているが、東側（調査12・13）や南中央部（調査14）では希薄である。調査13では平安時代前期の井戸が確認されているものの、遺構の展開は希薄であり、宅地内の利用状況を知る手掛かりとなる。また同町の調査で特筆すべき

は条坊関連遺構である。これまでの調査で姉小路以外の条坊関連遺構を確認している。町の西側では、平安時代中期頃になると道祖大路が河川化していき、その影響を受けた宅地側の変化が明らかになっている（調査10）。町の東側では、野寺小路の両側溝を確認し、かつ平安時代中期頃までは野寺小路として機能していた路面部分が、平安時代後期になると河川化していること（以下、「野寺川」とする）[3]がわかる。また鎌倉時代前半になると、流水を分流するような水利施設が構築されていることも確認されている（調査12・13）。なお、北側の十五町でも野寺川が確認されている（調査５・８）[4]。平安時代中期以降になると、居住に関する遺構の確認が希薄になることから、宅地としての土地利用が衰退していると考えられる。一方で、耕作に関連する遺構の確認が増え、かつ道祖川や野寺川も鎌倉時代から室町時代頃までは維持されていたことから、室町時代までは耕作地として利用されていたと推測できる。しかしその後は河川も埋没しており、様相は不明である。

今回の調査地は、調査12・13の南側に位置し、野寺小路の西側溝及び路面、野寺川の延長が想定できる場所であるため、これらの遺構の状況把握を目的として調査を行った。

註

1）大塚隆編『慶長・昭和　京都地図集成』柏書房、1994年。

2）以下を参照。
平尾政幸ほか『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊　(財)京都市埋蔵文化財研究所、1990年。
山本雅和ほか『平安京右京三条三坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-4　(公財)京都市埋蔵文化財研究所、2009年。
田中利津子ほか『平安京右京三条三坊四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-4　(公財)京都市埋蔵文化財研究所、2012年。

3）野寺小路が河川化した川跡の名称については、「野寺川」と「野寺小路川」の２通りの名称例がある。対象遺構をこれまで数多く調査している公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、2002年に刊行した『平安京右京三条二坊十五・十六町－「齋宮」の邸宅跡－』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊)以降、「野寺小路川」という名称を使用している。しかし近年、関連する論文などを筆者が管見する限り、条坊遺構と人工河川を区別するため「野寺川」の名称が使用されており、本書でも条坊遺構と人工河川との区分を明確にするため、「野寺川」の名称を使用することとした。

4）なお、十三町以南で、野寺小路の河川化した痕跡は調査では確認されていない。

表2　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
平安時代	SD02（野寺小路西側溝）	
平安時代後期～室町時代	SD01（野寺川）	
近代以降	土坑	

3．遺　構

調査区は、対象地の北側（北区）と南側（南区）の２か所に設定した。対象地内の地表面の標高は北で32.8ｍ、南で32.6ｍと北から南に緩やかに傾斜しており、基本層序は北区と南区で少し様相が異なる。以下にその詳細を記す。

（１）北区

基本層序は、現代盛土や旧耕作土の下、GL-0.65ｍ（標高32.2ｍ）で黒褐色粘質土（11・12層：以下、黒褐色土とする。）、GL-0.8ｍ（標高32.0ｍ）で黒褐色粘質シルトや灰黄色細砂、灰白色粘土の地山に至る。

遺構面は、黒褐色土上面（第１遺構面）と地山上面（第２遺構面）の２面を確認した。

図８　調査区配置図（１：500）

第１遺構面

黒褐色土上面を第１遺構面として遺構検出を行い、溝（SD01）と４基の土坑を検出した。土坑は調査区の北西部にまとまっており、いずれも深さ0.3ｍほどで、埋土に遺物が含まれるものの、ごくわずかである。形状は不定形で、底は地山上面で収まっている。遺構の性格は不明である。近世以降と考えられる。

SD01

調査区東側で検出した南北方向の溝である。検出幅2.8ｍ、検出長3.7ｍ、深さ0.86ｍで、溝の西肩から底面の一部までを検出した。底面は平坦で、断面形状は逆台形である。埋土は大きく上下に区分でき、上層は黒褐色や灰黄褐色粘質土、下層は微砂が少量混じる褐灰色粘土である。西肩から東へ２ｍほどのところに直径約５～６㎝の木杭が６本、南北方向に並んで打ち込まれている。ただ東壁沿いの溝上部は、近代の撹乱により大きく削平されており、杭の上端も残存していない。出土遺物から、上層は鎌倉時代以降、下層は平安時代中期には形成されていたと考えられる。この溝は野寺小路路面上に位置し、また周辺調査で確認されている野寺川の延長線上にもあたることから、野寺川の一部であると考えられる。

黒褐色土（図10・11-11・12層、図13-29層）

第１遺構面を形成している堆積土である。北区の全面と南区の凹んだ箇所で確認でき、南区西側で確認している地山上面の高さまで堆積していることが周壁の断面観察からわかる。層厚は、厚いところで0.35ｍである。この堆積土には、わずかだが縄文土器や古墳時代の須恵器の小片、平安時代中期の遺物が含まれる。部分的に細砂が帯状に認められるものの、断面観察から人為的ではなく自然に堆積したものと考えられる。これらのことから、自然地形や氾濫などにより浸食された谷部

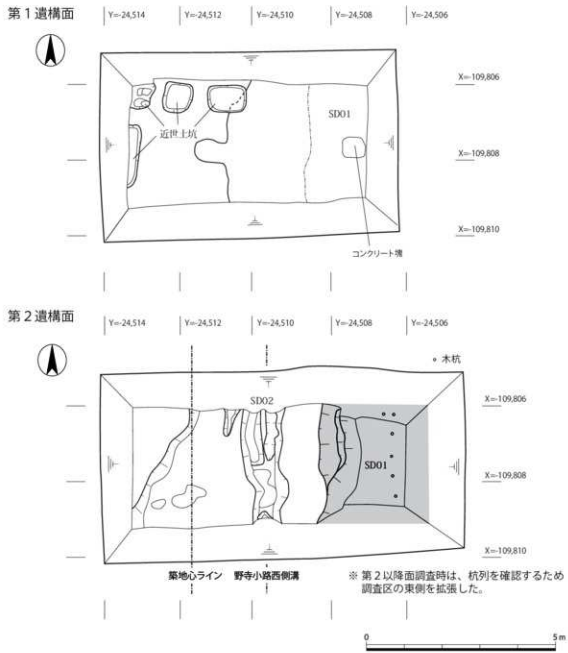


図９　北区遺構平面図（１：100）

分に平安時代以降に堆積し、形成されたものと考えられる。

第２遺構面

黒褐色粘質土を除去後、地山上面を第２遺構面として遺構検出を行い、溝（SD02）を検出した。

SD02

調査区中央部で検出した南北方向の溝である。幅0.8～1.1ｍ、検出長3.2ｍ、深さ0.15～0.3ｍである。埋土は上下２層に区分でき、上層は灰黄褐色細砂混じり粘質土、下層は褐灰色粘質シルトである。断面形状から掘り直しが行われたと考えられる。出土遺物から平安時代中期頃には埋没したと考えられる。この溝は十四町の東を限る築地心想定位置から東に約２ｍの場所に位置することから、野寺小路西側溝と考えられる。

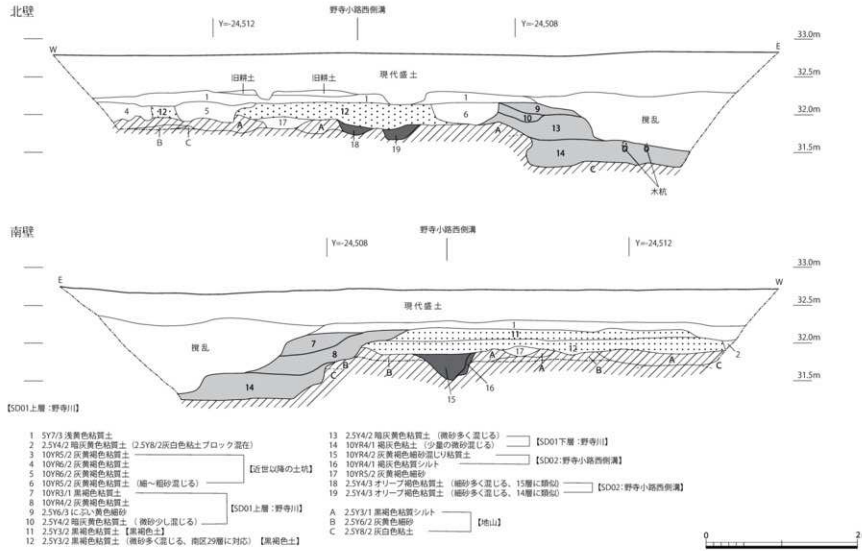


図10 北区北・南壁断面図（1：50）

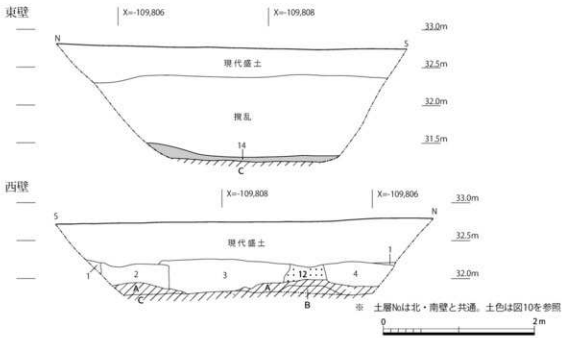


図11　北区東・西壁断面図（1：50）

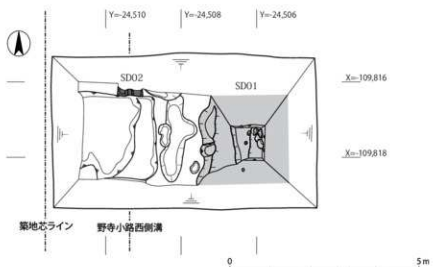


図12　南区平面図（1：100）

（2）南区

基本層序は、現代盛土や旧耕作土の下、GL-0.4 m（標高32.2 m）で淡黄色シルト～粘土や黄色粘土、明黄褐色砂質土の地山に至る。南区は西側半分が近世以降の土坑により削平を受けている。また北区で認められた黒褐色土は北壁中央部で部分的に確認できたのみで、面的な広がりはほとんど確認できなかった。このため遺構検出は地山上面で行った。調査区周壁の断面観察から、基本層序は、北区と同様の層序と考えられる。地山上面で遺構検出を行った結果、溝（SD01・SD02）を検出した。

SD01

調査区東側で検出した南北方向の溝で、北区SD01の延長部にあたる。検出幅2.4 m、検出長2.4

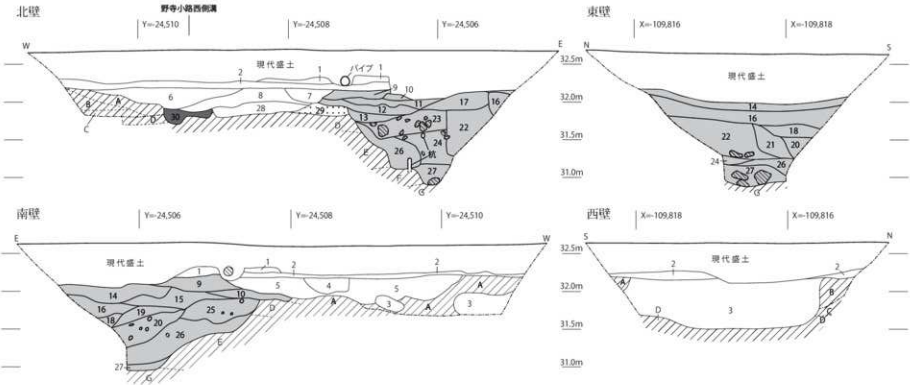


図13　調査区壁断面図（1：50）

1　2.5Y6/1黄灰色粘質土
2　2.5Y6/2灰黄色粘質土
3　2.5Y6/2灰黄色粘質土（地山ブロック混じる）
4　2.5Y6/1黄灰色粘質土
5　10YR5/2灰黄褐色粘質土（炭化物少し混じる）
6　10YR5/2灰黄褐色粘質土（炭化物少し混じる）
7　2.5Y4/1黄灰色礫混じり粘質土
8　10YR5/1褐灰色粘質土
9　2.5Y7/3浅黄色シルト
10　2.5Y3/1黒褐色粘質土
11　2.5Y3/1黒褐色粘質土（10YR7/4にぶい黄橙色粘土ブロック混じる）
12　10YR5/1褐灰色粘質土（微砂少し混じる、わずかに10YR7/4にぶい黄橙色粘土ブロック混じる）
13　10YR4/1褐灰色粘土
14　2.5Y5/1黄灰色細砂
15　10YR5/2灰黄褐色粘質土
16　2.5Y4/1黄灰色粘土（細砂少し混じる）
17　10YR6/2灰黄褐色 細砂～粗砂
18　10YR6/4にぶい黄橙色砂礫（21層ブロック混じる）
19　10YR5/1褐灰色粘土
20　10YR6/4にぶい黄橙色砂礫（21層ブロック混じる）
21　2.5Y5/1黄灰色シルトや細砂
22　10YR5/1褐灰色粘土や大（細砂多く混じる）
23　10YR6/2灰黄褐色砂礫
（人頭大～拳大の礫や10YR6/2の粘質土ブロック混じる）
24　10YR6/2灰黄褐色砂礫（23層より礫の目が細かい、細砂～拳大の礫混じる）
25　10YR5/2灰黄褐色粘質土（拳大の礫多く混じる）
26　10YR4/1褐灰色粘質土（拳大の10YR7/1灰白色シルトブロック混じる）
27　10YR4/1褐灰色粘質土（細砂や粘土ブロック混じる）
28　10YR4/1褐灰色粘質土
29　2.5Y3/2黒褐色粘質土（細砂多く混じる・北区11・12層に対応）【黒褐色土】
30　10YR4/1褐灰色粘質土（2.5YR2/0灰白色粘土ブロック混じる）【SD02：野寺小路西側溝】

【近世以降の土坑】
【SD01：野寺川Ⅰ】
【SD01：野寺川Ⅱ】
【SD01：野寺川Ⅲ】
【SD01：野寺川Ⅳ】
【SD01：野寺川Ⅴ】

地山
A　2.5Y8/4淡黄色シルト～粘土
B　10YR7/6明黄褐色砂質土
C　2.5Y8/6黄色粘土
D　5Y7/2灰白色シルト
E　10YR5/1褐灰色シルト（小礫多く混じる）
F　2.5Y8/2 灰白色粘土
G　2.5Y6/2 灰黄色細砂

0　2m

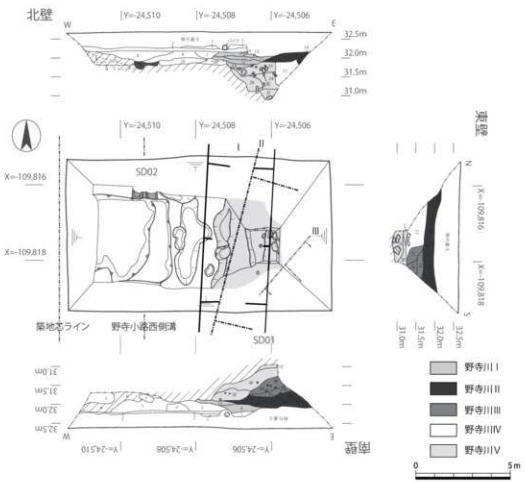


図14　南区野寺川変遷図（1：100）

m、深さ1.2mの西肩を検出した。断面形状は逆三角形である。埋土は、大きくⅠ～Ⅴに区分できる。上部から、Ⅰ：浅黄色シルトやにぶい黄橙色粘土ブロックを含む黒褐色粘質土、褐灰色粘土（図13-9～13層）、Ⅱ：黄灰色細砂や粘土（図13-14～17層）、Ⅲ：黄灰色シルトや細砂、黄灰色シルトや細砂のブロックが混じるにぶい黄橙色砂礫（図13-18～21層）、Ⅳ：灰黄褐色粘質土の小ブロックや細砂、拳大の礫が多く混じる灰黄褐色砂礫（図13-22～24層）、Ⅴ：灰白色シルトブロックや細砂の混じる褐灰色粘質土や拳大の礫が多く混じる灰黄褐色粘質土（図13-25～27層）である。Ⅰはほぼ南北方向の流れ堆積、Ⅱ・Ⅲと北東－南西方向の屈曲した流れ堆積である。Ⅳは砂礫が主体となる氾濫堆積と考えられるが、木杭が打ち込まれていること、ラミナを確認することができなかったことから、人為的な工作による堆積の可能性がある。Ⅴには粘土ブロックや礫などが多く混じり、その堆積状況も不均一で、人為的な工作によるものと考えられる。特にⅤには直径約5～6cmの木杭が南北方向に打ち込まれ、かつ木杭の東側、Ⅴの最下部には人頭大程度の河原石が二段ほど積まれていることから、護岸のための造作と考えられる。Ⅴで造られた人工の川が氾濫などの影響で、Ⅳ、Ⅲ、Ⅱと屈曲を繰り返し、Ⅰで南北方向の流れに戻ったと考えられる。Ⅳ・Ⅴともに量は少ないが、平安時代中期の遺物が確認できる。

この溝は、野寺小路路面に位置し、また周辺調査で確認されている野寺川の延長線上にあたることから、野寺川の一部であると考えられる。

SD02

調査区北壁中央部で検出した南北方向の溝で、北区SD02の延長部にあたる。幅0.65ｍ、検出長0.3ｍ、深さ0.2ｍである。埋土は褐灰色粘質土である。北区SD02と同じく、十四町の東を限る築地心想定位置から東に約２ｍの場所に位置することから、野寺小路西側溝と考えられる。遺物は確認できなかったが、北区SD02と同じく、平安時代中期頃には埋没したと考えられる。

４．遺　物

今回の調査ではSD01を中心として、土師器、須恵器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、木製品など縄文時代から明治時代までの遺物が３箱が出土した。しかしその大半は破片で、図化できるものは少ない。

北区SD02（野寺小路西側溝）（１～３）　１は黒色土器Ｂの椀の口縁部である。口縁部はやや内傾し、端部は丸く収める。内側にはナデによる沈線状の痕跡が残る。内外面ともに磨きが施される。10世紀前半頃か。２は緑釉陶器の皿の口縁部である。３は須恵器の壺である。ともに平安時代中期頃。

北区SD01（野寺川）（４～10）　４は土師器皿である。口縁部は緩やかに外反し、外面には二段ナデを施す。４Ｃに相当する。５・６は灰釉陶器で、５は壺の口縁部、６は壺の体部下半である。ともに平安時代中期。７～９は緑釉陶器で、いずれも椀の底部である。７の胎土は白く軟質である。釉色は浅黄色で、釉厚も薄い。長門産。８・９の胎土は灰色で、やや暗く、硬質である。釉は銀化し、深緑や暗緑色である。９の内面には陰刻が施される。ともに小塩窯である。10は木杭である。残存長は85.0㎝、最大径6.5㎝。一方の先を削り出す。一部に樹皮が確認できる。平安時代中期から後期と考えられる。

南区SD01（野寺川）（11～17）　11～13は野寺川Ⅲ、14・15は野寺川Ⅴから出土した。11・12は灰釉陶器、11は口縁部、12は高台部である。いずれも平安時代中期。13は越州窯の青磁椀

表３　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
縄文時代～古墳時代	縄文土器、須恵器		縄文土器１点、須恵器１点		
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、木製品（杭）		土師器１点、須恵器１点、黒色土器１点、緑釉陶器７点、灰釉陶器５点、青磁１点、平瓦１点、木製品（杭）３点	０箱	２箱
鎌倉時代	土師器、施釉陶器、焼締陶器		土師器１点		
江戸時代以降	焼締陶器、施釉陶器、陶磁器				
合　計		４箱	23点（２箱）	０箱	２箱

※コンテナ箱数の合計は、整理に伴い、Ａ・Ｂランクの遺物の抽出などの整理を行ったため、出土時より１箱多くなっている。

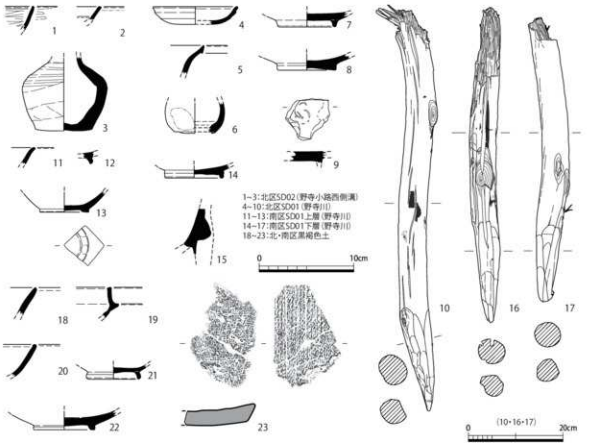


図15　出土遺物実測図及び拓影（1～9・11～15・18～22は1：4、10・16・17は1：8）

の下半部である。高台底面に貝目の痕跡が2か所確認できる。14・15は緑釉陶器で、14は椀の底部、15は脚付鍋の脚部接合部である。14・15とも銀化している。ともに小塩窯産で10世紀前半。15は猿投産か。16・17は木杭である。16は残存長は66.5㎝、最大径5.7㎝である。17は残存長は60.0㎝、最大径6.1㎝である。一方の先を削り出す。

黒褐色土（18～23）　18は縄文土器の口縁部である。表面は剥離し、調整は不明瞭である。19は須恵器杯身である。TK47型式に相当する。20は土師器杯Aの口縁部で、平安時代前期。21は灰釉陶器椀の底部である。猿投産で9世紀後半。22は緑釉陶器椀の底部である。釉色は淡緑色で、見込みには沈線を施す。洛西産で10世紀初頭か。23は平瓦である。

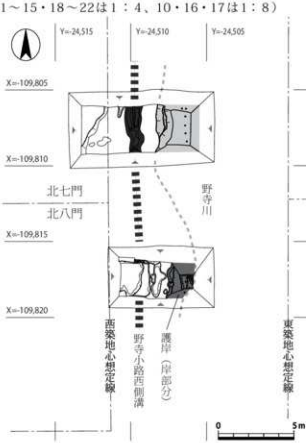


図16　野寺川及び西側溝復元図（1：250）

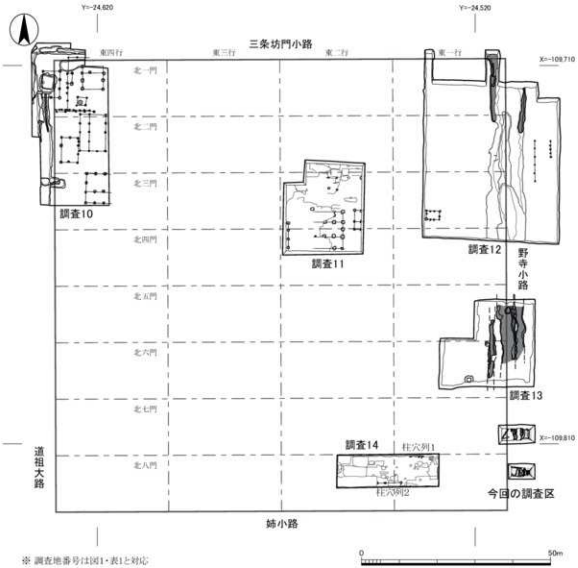


図17　十四町内調査遺構配置図（1：1,000）

5．まとめ

今回、野寺小路西側溝と人工河川である野寺川を確認した。特に野寺川については、これまでの調査成果（調査10～13）を勘案すると、大規模建物などが衰退した平安時代中期以降に開削され、室町時代まで維持されていると考えられる。また今回、北区で確認した黒褐色土は、遷都に伴い条坊が施工された後、平安時代中期頃までに、自然地形である谷筋が埋没したと考えられるが、その堆積範囲が、野寺大路の路面上であることから、条坊道路の整備状況を考える上で重要な資料になるだろう。また谷地形が埋まった後に野寺川が開削されるが、北区と南区での状況の差異や南区で確認した護岸の状況は、これまで確認されている水利施設などと併せて検討することで、人工河川の排水を主目的とした治水以外の新たな役割のほか、施工についても新たな想定をすることが可能となる。

今後もこのような調査を積み重ね、右京域の都市としての維持・管理の様相を明らかにしていく必要がある。

（奥井智子）

Ⅳ　史跡 西寺跡、西寺跡（40次）、平安京右京九条一坊十一町跡、唐橋遺跡

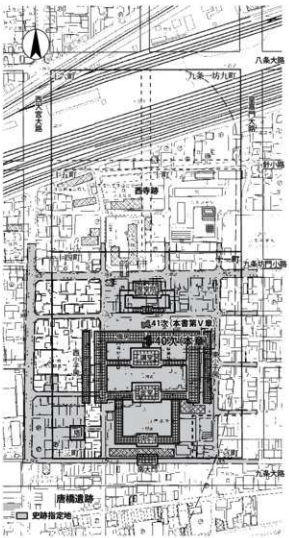


図１　調査位置図（１：5,000）

図２　調査前風景（西から）

１．調査経過

（１）調査に至る経緯

本件は、史跡西寺跡における範囲確認調査である。本市では、管理団体に指定されている史跡西寺跡について、将来の保存活用計画策定に向け、民有地を多く含む西寺跡の普及啓発及び正確な伽藍復元に有効な国土座標系に基づく基礎的データを得ることを目的として、平成30年度より唐橋西寺公園内を中心に範囲確認調査を実施しており、令和２年度には総括報告書を刊行している[1]（以下、「総括報告」という）。コンド山と称される講堂跡で実施した35・36・39次調査では、基壇や礎石、須弥壇を確認し、東寺と同規模と考えられていた講堂の規模が異なることが明らかとなり、創建当初から西寺と東寺ではその役割に違いがあった可能性が高まった。

そのため、寺院の役割を具現化する伽藍について、両寺の共通点及び相違点を明確にする必要が生じた。中でも北僧房については、西寺と東寺で復元位置が異なっており、その解明が求められていた。従来、西寺北僧房の復元根拠となっていたのは９次調査である[2]。調査で確認された東西方向の瓦散布を北雨落溝と捉え、その南側約3.5ｍに並ぶ東西方向の礎石抜取穴３基を北から２列目の桁行入側柱列と判断し、東寺北僧房よりも約４ｍ北側に配置された。その結果、北側に所在する食堂院との間に北小子房を配する余地が無く、復元されなかった（図７）。加えて、北僧房内の一房

図３　南区子ども発掘体験（東から）

図４　唐橋小学校現地見学（西から）

を桁行柱間３間分と捉え、総数十房で桁行30間の建物規模と想定したため、中央間に馬道が設定できず、講堂と北僧房を繋ぐ渡り廊下（講堂北軒廊）も存在しない復元となった[3]。その後、９次調査南西部で実施した詳細分布調査にて、梁行を示す２基の礎石抜取穴を確認したものの[4]、北僧房の建物及び位置を特定する情報を得るに至っていない。一方で、35・36・39次調査によって講堂跡が従来の復元より南に位置することが明らかになったことで、北僧房の復元に疑義が生じることとなった。

したがって今回の調査では、北僧房の位置を確定させること、講堂と北僧房とを繋ぐ軒廊の有無を確認することを目的とした。

（２）調査の経緯

調査地を実施するにあたり、文化財保護法第125条に基づく史跡名勝天然記念物の現状変更申請書を令和３年９月10日付けで提出し、10月15日付け３文庁第1253号で文化庁長官の許可を得た。また、調査地が唐橋西寺公園内に位置することから、９月27日付けで所管する本市南部みどり管理事務所に都市公園占用許可申請を提出し10月７日付けで許可を得た。

調査区の位置については、上記の調査目的を踏まえ以下の通り設定した。

北僧房の幅については、幅が確定している東僧房に準拠し、約15ｍと想定した。その上で北僧房北雨落溝と位置付けた９次調査の東西方向の瓦堆積から南に15m付近を調査区の中心とし、東

図５　土嚢養生（南西から）

図６　真砂土養生（北東から）

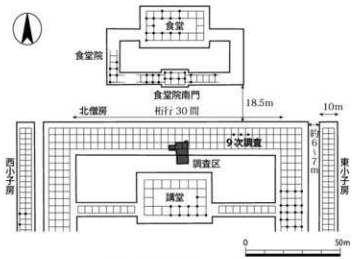


図7　講堂北側旧伽藍復元図（1：2,000）

寺北僧房と同位置であった場合のことを踏まえ、南北方向にやや長い調査区を設定した。加えて軒廊の存在を確認するため、伽藍中軸線付近を調査区西端に設定した（図8）。

調査は11月15日から開始し、重機にて近代の公園整備に伴う盛土、近世のコンド山盛土を除去した後に人力掘削を進めた。その結果、礎石抜取穴や雨落溝、南北方向の基壇盛土及び凝灰岩製基壇外装を確認したことから、それぞれ北僧房と北軒廊の遺構と捉え調査を実施した。さらに北僧房

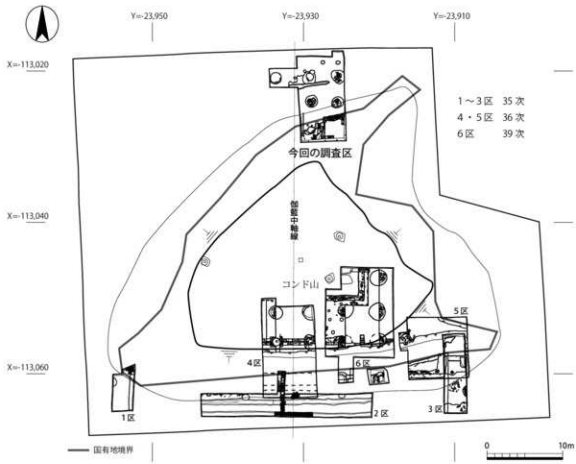


図8　調査区配置図（1：500）

梁行及び桁行中央間の確認を行うため、調査区の北東部と北西部にて拡張を行った。

調査期間中、調査区を囲うフェンスに西寺跡の概要や復元図、古写真、調査経過を掲示し、周知に努めたほか、11月23日に南区役所主催の子ども発掘調査体験の開催（図3）、11月24日に隣接する市立唐橋小学校3年生約90名への説明を実施した（図4）。なお、現地説明会についてはコロナウイルス感染拡大防止の観点からやむを得ず開催を断念した。

調査終了後、重要遺構は土嚢で養生し（図5）、遺構面は真砂土を敷き詰めて埋め戻しを行い（図6）、12月3日に全ての調査が終了した。最終的な調査面積は77㎡である。

2．遺　構

調査区がコンド山の北側裾部に位置していることから、層序は調査区の南北で異なる（図10・11）。北西端では、表土、近代コンド山盛土となり、GL-0.24ｍで近世耕作土、-0.33ｍで褐灰色砂礫の地山となる。地山上面が平安時代の遺構面となり、標高は19.25ｍ前後である。南西端では、表土、近代コンド山盛土と続き、GL-0.8ｍで中世～近世コンド山盛土、-1.93ｍで講堂北軒廊基壇床面となる。基壇床面の標高は19.75ｍである。

また、各遺構は地中保存のため、掘削を段下げ及び一部断割に留めている。

（1）北僧房（巻頭カラー図版1-1、図9～12、図版6～9）

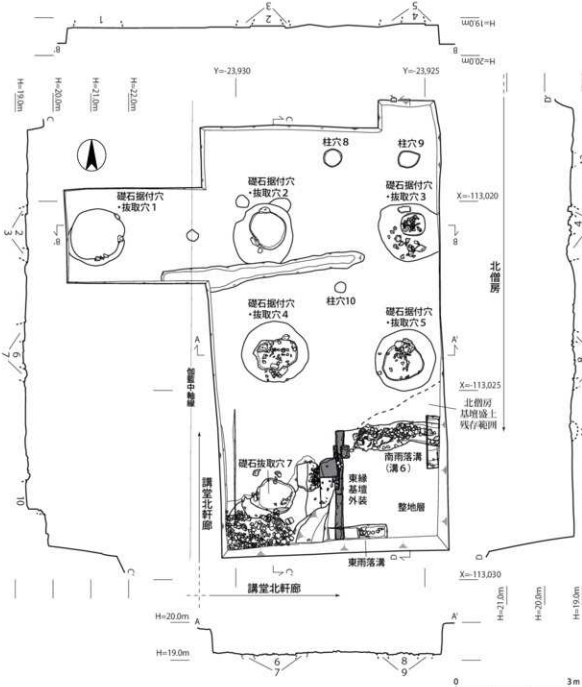
調査区中央から北半で礎石据付穴・抜取穴を東西方向2列の計5基（礎石据付穴・抜取穴1～5）及び南雨落溝（溝6）を確認した。礎石据付穴・抜取穴1～3が入側柱列で身舎桁行に、4・5が側柱列で庇桁行に該当する。桁行柱間は、西から4.48m（15尺）、3.73m（12.5尺）、梁行は3.43m（11.5尺）である。側柱列の南1.8ｍ（6尺）には東西方向の溝6が並列しており、南雨落溝となる。断割の結果、雨落溝は新旧2時期を確認した。基壇外装は無く土製基壇となる。調査区中央東端には、灰白色砂礫砂泥混じりの基壇盛土が僅かに残る（図10-82層）。また、北僧房と講堂北軒廊との入隅部分外側に整地層を確認した。

礎石据付穴・抜取穴1（図版7-1・2）　調査区北西部の拡張区で確認した。据付穴は抜取穴南側に僅かに残り、直径1.5ｍを測る。抜取穴は直径1.3ｍで、肩口には礎石根固め石となる径0.15～0.2ｍの河原石が据わる。

礎石据付穴・抜取穴2（図版7-3）　調査区北半で確認した。礎石据付穴・抜取穴1と伽藍中軸線を挟み、北僧房桁行中央間となる。据付穴は直径1.7ｍで、中央北寄りには直径1.0×0.85ｍの

表1　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
平安時代	礎石据付穴1～5、溝6、柱穴8～10、基壇盛土及び外装、整地層	北僧房礎石据付穴、南雨落溝、足場穴、基壇盛土 講堂北軒廊基壇盛土、東縁基壇外装
鎌倉～室町時代	礎石抜取穴1～5・7	北僧房礎石抜取穴 講堂北軒廊礎石抜取穴



1　10YR6/2 灰黄褐色泥砂【礎石抜取穴1】
2　7.5YR5/3 にぶい褐色泥砂（焼土・焼瓦片含む）【礎石抜取穴2】
3　10YR8/4 浅黄橙色泥砂【礎石据付穴2】
4　7.5YR7/2 明褐灰色泥砂（焼瓦片、花崗岩片を多量に含む）【礎石抜取穴3】
5　10YR8/4 浅黄橙色泥砂【礎石据付穴3】
6　7.5YR5/2 灰褐色泥砂（小礫・焼瓦片多量に含む）【礎石抜取穴4】
7　10YR7/8 黄橙色泥砂【礎石据付穴4】
8　10YR5/2 灰黄褐色泥砂（瓦片・花崗岩片を多量に含む）【礎石抜取穴5】
9　10YR6/6 明黄褐色泥砂【礎石据付穴5】
10　10YR6/2 灰黄褐色泥砂（瓦片・焼瓦片含む）【礎石抜取穴7】
11　2.5Y5/1 黄灰色泥砂【溝6】
12　10YR7/4 にぶい黄橙色泥砂【柱穴9】

図9　調査区平面及び柱列エレベーション図（1：100）

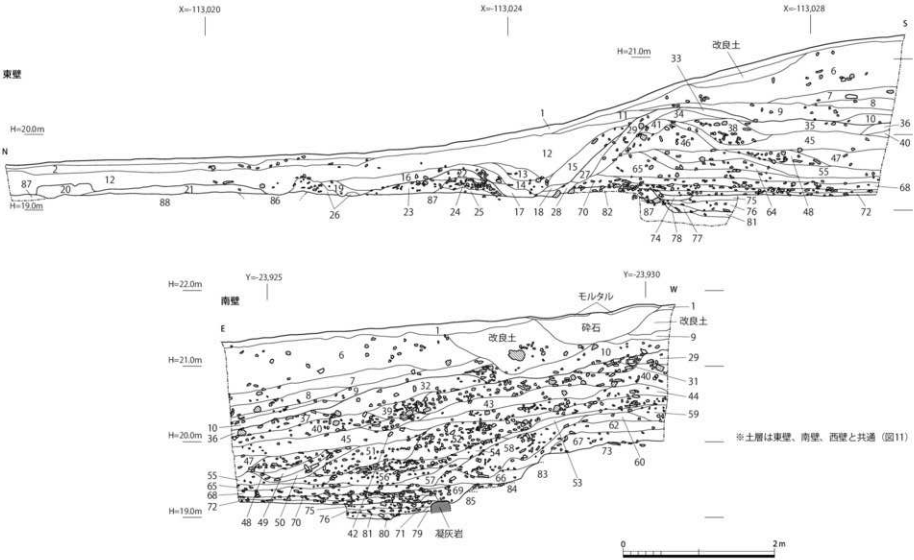
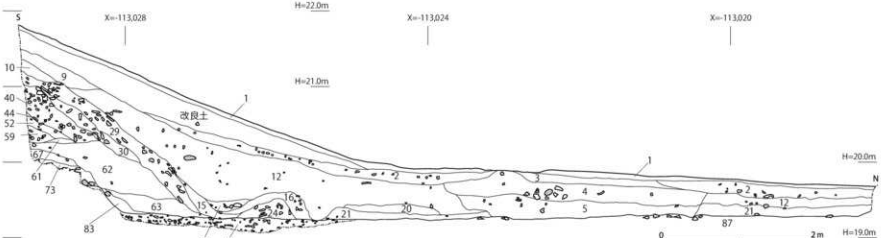


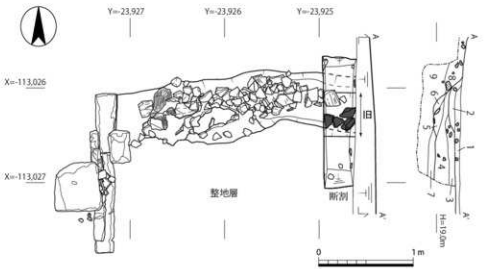
図10　東壁断面図（1：50）



1 表土
2 2.5Y7/2 灰黄色砂泥（小礫含む）
3 2.5Y8/1 灰白色粗砂
4 2.5Y8/2 灰白色砂泥（瓦片含む）
5 5Y7/1 灰白色砂泥（礫、瓦片含む）
6 2.5Y6/1 黄灰色泥砂（瓦片・小礫含む）
7 2.5Y7/3 浅黄色砂泥
8 2.5Y8/4 淡黄色砂泥
9 10YR3/1 黒褐色泥砂（小礫含む）
10 10YR5/1 褐灰色砂泥
11 2.5Y5/1 黄灰色泥砂（小礫含む）
12 5Y3/1 オリーブ黒色砂泥
13 10YR5/1 褐灰色砂泥
14 10YR4/1 褐灰色砂泥
15 2.5Y6/1 黄灰色砂泥
16 2.5Y4/1 黄灰色泥砂（瓦片含む）
17 2.5Y4/1 黄灰色泥砂
18 10YR4/1 褐灰色泥砂（小礫含む）
19 10YR5/1 褐灰色砂泥
20 7.5YR4/1 褐灰色泥砂
21 7.5Y6/1 褐灰色泥砂
22 10YR7/2 にぶい黄橙色泥砂
23 10YR4/1 褐灰色泥砂（瓦片・小礫多量に含む）
24 5Y7/1 灰白色砂礫
25 2.5Y5/1 黄灰色泥砂
26 10YR8/1 灰白色砂礫
27 2.5Y5/1 黄灰色泥砂
28 2.5Y5/1 黄灰色泥砂（小礫含む）
29 2.5Y6/1 黄灰色泥砂（瓦片多量に含む）
30 2.5Y7/2 灰黄色泥砂（瓦片多量に含む）
31 2.5Y8/6 黄色泥砂（瓦片多量に含む）
32 2.5Y8/3 淡黄色泥砂
33 2.5Y7/4 浅黄色泥砂
34 10YR7/2 にぶい黄橙色泥砂
35 10YR8/3 浅黄橙色砂泥
36 10YR8/1 灰白色泥砂（小礫含む）
37 2.5Y8/1 灰白色砂泥
38 10YR8/2 灰白色泥砂（瓦片多量に含む）
39 5Y8/1 灰白色砂泥（瓦片・小礫多量に含む）
40 2.5Y8/4 淡黄色泥砂（瓦片多量に含む）
41 2.5Y6/4 にぶい黄色泥砂
42 5Y8/3 淡黄色泥砂
43 5Y8/4 淡黄色泥砂
44 10YR7/2 にぶい黄橙色泥砂（瓦片・小礫多量に含む）
45 5Y8/2 灰白色泥砂
46 2.5Y8/3 淡黄色泥砂（小礫含む）
47 2.5Y8/4 淡黄色泥砂
48 2.5Y8/3 淡黄色砂泥（小礫・瓦片多量に含む）
49 2.5Y7/3 浅黄色泥砂
50 2.5Y7/2 灰黄色砂泥（瓦片多量に含む）
51 2.5Y7/4 浅黄色泥砂
52 10YR7/6 明黄褐色砂泥（小礫・瓦片多量に含む）
53 2.5Y8/2 灰白色シルト
54 2.5Y8/2 灰白色シルト（小礫含む）
55 2.5Y7/3 浅黄色泥砂
56 10YR6/3 にぶい黄橙色砂泥
57 2.5Y7/3 浅黄色泥砂
58 2.5Y7/2 灰黄色泥砂
59 2.5Y6/2 灰黄色砂泥（瓦片・礫多量に含む）
60 2.5Y8/2 灰白色泥砂
61 10Y8/1 灰白色泥砂
62 5Y8/1 灰白色泥砂
63 2.5Y8/1 灰白色泥砂（小礫・瓦片多量に含む）
64 5Y8/2 灰白色泥砂（小礫・瓦片多量に含む）
65 5Y8/1 灰白色泥砂（小礫・瓦片多量に含む）
66 10YR6/1 褐灰色泥砂
67 2.5Y6/2 灰黄色泥砂
68 7.5YR6/4 にぶい橙色泥砂（焼土多量に含む）【盛土】
69 10YR6/2 灰黄褐色泥砂（凝灰岩片少量含む）【凝灰岩版築】
70 10YR7/4 にぶい黄橙色泥砂（焼土多量に含む）【盛土】
71 10YR6/2 灰黄褐色泥砂（固く締まる）【羽目石押さえか】
72 10YR7/3 にぶい黄橙色泥砂（小礫・瓦片・焼土含む）【整地層】
73 10YR6/2 灰黄褐色泥砂（瓦片多量に含む）【火災堆積層】
74 10YR4/1 褐灰色砂泥（瓦片含む）【溝６（新）】
75 10YR5/2 灰黄褐色泥砂（焼土・炭化物・瓦含む）
76 7.5YR5/2 灰褐色砂泥【西寺期整地層】
77 10YR5/2 灰黄褐色砂泥【溝６（旧）】
78 10YR5/1 褐灰色砂泥
79 7.5YR4/1 褐灰色砂泥【地覆石押さえ】
80 7.5YR4/1 褐灰色砂泥【講堂北軒廊東雨落溝】
81 10YR3/2 黒褐色砂泥（凝灰岩粒を含む）【創建期整地層】
82 10YR7/1 灰白色砂礫砂泥混じり（固く締まる）【北僧房基壇盛土】
83 10YR7/4 にぶい黄橙色シルト（固く締まる）
84 10YR7/2 にぶい黄橙色砂礫シルト混じり【北軒廊基壇盛土】
85 2.5Y8/4 淡黄色シルト
86 10YR8/4 浅黄橙色泥砂（固く締まる）【礎石据付穴３】
87 10YR4/1 褐灰色砂礫【地山】
88 10YR7/2 にぶい黄橙色砂礫【地山】

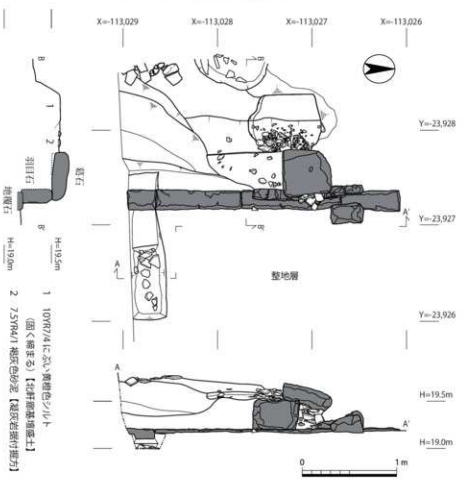
中世～近世コンド山盛土
中世～近世コンド山盛土
近代コンド山盛土
近世畔作土
近世畦畔
近世コンド山裾部

図11 西建築前回廊（1：50）



1　10YR7/3 にぶい黄橙色泥砂
　（小礫・瓦片・焼土含む）【整地層】
2　10YR4/1 褐灰色砂泥
　（瓦片含む）【溝６（新）】
3　10YR5/2 灰黄褐色泥砂
　（焼土・炭化物・瓦片含む）【西寺期整地層】
4　7.5YR5/2 灰褐色砂泥
5　10YR5/2 灰黄褐色砂泥
6　10YR5/1 褐灰色砂泥　【溝６（旧）】
7　10YR3/2 黒褐色砂泥
　（凝灰岩粉を含む）【創建期整地層】
8　10YR7/1 灰白色砂礫砂泥混じり
　（固く締まる）【北僧房基壇盛土】
9　10YR4/1 褐灰色砂礫【地山】

図12　溝６（新・旧）実測図（１：40）



1　10YR7/4 にぶい黄橙色シルト
　（固く締まる）【地軒廊基壇盛土】
2　7.5YR4/1 褐灰色砂泥【凝灰岩粉が層状】

図13　講堂北軒廊東縁基壇実測図（１：40）

抜取穴が位置する。抜取穴肩口には礎石根固め石となる径0.3ｍの河原石が３石据わる。埋土には焼土、焼瓦片が含まれ、鎌倉～室町時代の土師器、瓦質土器が出土した。

礎石据付穴・抜取穴３（図版８-１） 調査区北東部で確認した。据付穴は直径1.5～1.7ｍで、埋土には径0.15～0.3ｍの河原石が据わる。抜取穴は据付穴中央北寄りに位置し、直径0.65ｍを測る。埋土には、焼土、焼瓦のほか、礎石残欠である花崗岩片を多量に含む。

礎石据付穴・抜取穴４（図版８-２） 調査区中央西側で確認した。据付穴は直径1.7ｍで、中央に直径1.2×0.8ｍの抜取穴が位置する。抜取穴肩口には、径0.3ｍ前後の河原石が４石据わる。埋土には焼瓦片が多く含まれていたほか、土師器片が出土した。

礎石据付穴・抜取穴５（図版８-３） 調査区中央東側で確認した。据付穴は直径1.7ｍで、中央南西寄りに直径１ｍの抜取穴が位置する。抜取穴北肩口には径0.3ｍの河原石が据わり、埋土には花崗岩片を多く含む。抜取穴から鎌倉～室町時代の土師器、瓦質土器が出土した。

溝６（図12、図版６-２、９-１・２） 調査区南東で確認した２時期の東西溝である。礎石据付穴５の中心から約1.8ｍ南側に位置する。上層の溝（新）は、西寺整地層上面（図12-３層）で成立し、幅0.7m，深さ0.2m，長さ2.5m 以上を測る。東は調査区外に続き、西端は後述する北軒廊東縁基壇外装の凝灰岩列と入隅を為す。溝底には平瓦片が敷き詰められている。平瓦片は多量の焼土や焼けた壁土片によって埋没している。東壁の断割にて創建期整地層上面で成立する整地層（図12-７層）上面で成立する東西溝（旧）を確認した。溝底には上層の溝と同様に瓦片が敷かれてる。なお、下層の溝芯は上層よりも約0.1ｍ南側に位置している。断面観察で確認した幅は0.45ｍ、深さ0.1ｍである。

柱穴８～10 調査区北半にて柱穴８・９を、中央にて柱穴10を確認した。柱穴８・９は直径0.5ｍ、柱穴10は0.3ｍを測る。遺物は出土しなかったが、柱筋を揃えること、柱穴８・10が北僧房柱列の中間付近に位置することから、建築時の足場穴の可能性がある。

（２）講堂北軒廊（巻頭カラー図版１、図９～13、図版６・８～10）

北軒廊は、後世のコンド山盛土に覆われていたため残存状況が良好であった。調査区南西で南北方向の基壇土と凝灰岩製の基壇外装、礎石抜取穴１基（礎石抜取穴７）を確認した。

基壇（図13、図版９・10） 確認した範囲は東西３ｍ、南北3.2ｍで、さらに調査区外に続く。基壇盛土はシルト及び砂礫シルト混じりの互層で構築されており、上面は土間叩きとなる。床面の標高は19.75ｍとなる。上面には、焼瓦片が多量に堆積する。外装は凝灰岩製の切石積基壇で、北僧房雨落溝である溝６西端と接続する。長さ2.9ｍ分を確認した。地覆石、羽目石、葛石で構築され、地覆石４石、羽目石２石、葛石１石が残る。葛石と羽目石１石は、後世の削平によって一部が欠損する。葛石はやや傾くがほぼ原位置を保つ。羽目石表面の一部は被熱し、赤変する。地覆石の規模は幅0.18～0.22ｍで、長さは北から0.63ｍ、1.06ｍ、0.92ｍ、0.28ｍ以上とばらつきがある。厚さは0.1ｍ以上ある。全体が残る羽目石は長さ0.48m、高さ0.33m、厚さ0.12mである。葛石は0.52m以上、幅0.5m、厚さ0.18mを測る。地覆石上面から葛石上面の高さは0.5mで、軒廊

の基壇高を示す。また、断割調査にて地覆石東側0.4ｍで一段下がり、溝状の落込みに瓦を貼り付け、雨落溝を設けていることを確認した。雨落溝は西寺創建期の整地層上面にて成立する。溝は後述する整地層によって地覆石上面まで埋められるが、整地層上面には雨落の設えは認められなかった。

礎石抜取穴７（図版８-４） 基壇上面にて確認した。直径1.8m、深さ0.45m以上を測る。埋土には焼瓦や焼土を含む。掘方側面には、径0.2～0.3ｍの河原石や凝灰岩片が露出しており、根固め石と捉えられる。

（３）整地層（図９・10・12・13）

北僧房南雨落溝である溝６と講堂北軒廊東縁基壇外側に広がる西寺期の整地層である。調査区東壁及び南壁断割で確認した創建期整地層（図10-81層）に対し、厚さ0.2ｍの整地を行い、嵩上げが行われている（図10-75・76層）。整地層によって溝６（旧）及び講堂北軒廊東雨落溝が埋まる。整地層には、焼土、炭化物が含まれ、９世紀前半から中頃にかけての土師器細片及び緑釉陶器等が出土した。

３．遺　物（図14～16）

今回の調査で出土した遺物の大半は瓦類で、他に土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦質土器、施釉陶器、石製品など、コンテナ10箱分が出土した。西寺廃絶後のコンド山盛土からの出土が大半である。

土器類の出土は少量で、コンド山盛土、礎石抜取穴、整地層内から出土している（図14）。１は緑釉陶器皿である。内外面ともに施釉し、口縁端部はやや外反する。講堂北軒廊東縁雨落溝を埋める西寺期整地層から出土した。山城産で９世紀前半から中頃に属する。２は土師器皿Ｎである。口縁端部を上方につまみ上げる。14世紀前半に属するものである。礎石抜取穴５から出土した。３・４は瓦質土器羽釜である。３の口縁部はやや内傾し、鍔は短い。４の鍔は分厚く、端部は丸く収める。内面にはハケ目痕が残る。３はコンド山盛土下層、４は礎石抜取穴５から出土した。ともに14世紀前半に属する。

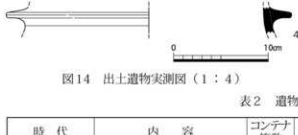


図14　出土遺物実測図（１：４）

表２　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、石製品、瓦類		緑釉陶器１点、軒平瓦３点、刻印瓦２点、石製品１点、ほか		
鎌倉～室町時代	土師器、施釉陶器、瓦質土器		土師器１点、瓦質土器２点、ほか		
合　計		８箱	10点（２箱）、ほか６箱	０箱	０箱

※コンテナ箱数の合計は、整理に伴い、出土時より２箱少なくなっている。

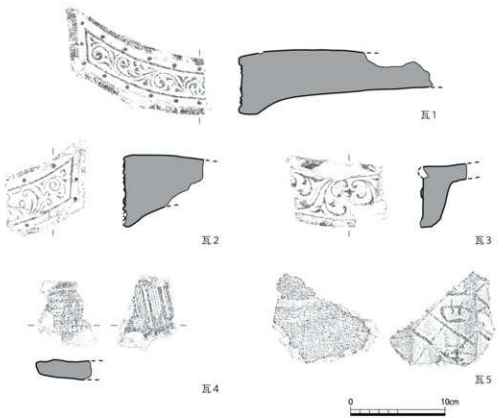


図15　出土瓦実測図及び拓影（1：4）

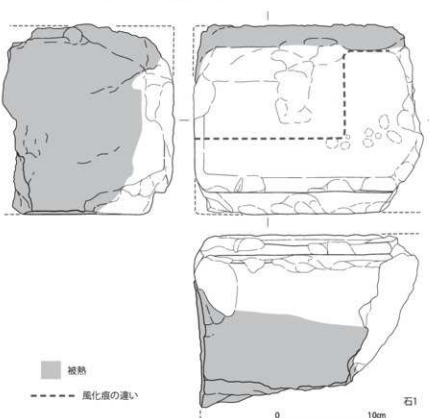


図16　石製品実測図（1：4）

瓦類は、軒平瓦、丸瓦、平瓦、緑釉瓦が出土した（図15）。瓦１～３は軒平瓦である。瓦１は均整唐草文で、西寺所用瓦である。総括報告瓦25と同笵瓦である。コンド山盛土から計７点出土した。唐草は外側に向かって大きく３回巻き込み、主葉の先端は水滴状を呈する。支葉の先端は「Y」字状を呈する。顎部は曲線顎で、焼成は硬質である。牧野阪瓦窯産。平安時代前期に属する。瓦２は唐草文である。総括報告瓦28と同笵瓦である。唐草は外側に向かって展開し、各単位が独立する。主葉は巻き込み、先端は水滴状を呈する。瓦当右側に笵傷が明瞭に残る。顎部は曲線顎で、胎土には砂粒を多く含み、焼成は硬質である。平安時代前期。山城産か[5]。瓦３は唐草文である。中心飾りは対向C字形で、中央やや上部に十字を配する。唐草は上から展開し、主葉は巻き込む。顎部は曲線顎で、胎土は密、焼成は硬質である。平安時代に属する。法隆寺から同文瓦が出土している[6]。瓦４・５は「西寺」銘を持つ平瓦である。瓦４は凹面に陽刻で「西」が残る。平安時代前期に属する。瓦５は凸面の格子目叩きの中に逆字で「西寺」銘が認められる。総括報告図44-２型式と同一の叩き板で製作されたものである。平安時代中期に属する。瓦４はコンド山での表採、瓦５はコンド山盛土から出土したものである。

石製品では、溝６西端で凝灰岩片（石１）が出土した（図16）。石１は、上面及び両側面が良好に残り、長さ0.24ｍ以上、幅0.2ｍ、厚さ0.18ｍ以上を測る。上面、破面を除き被熱を受け、赤変する。上面の一辺には抉りを入れ、組み合わせのための段差を設ける。上面の風化の度合いの違いと被熱面から、北僧房基壇南縁と講堂北軒廊との入隅部分を為す僧房側の隅石に用いられた可能性が高い。

４．まとめ

今回の調査では、北僧房及び講堂北軒廊に伴う遺構などを確認した。ここでは、調査で判明したことを整理し、課題を提示してまとめとしたい。

（１）北僧房

北僧房については、柱位置を示す礎石抜取穴を入側柱列３基、側柱列２基の計５基と南雨落溝を確認した。柱間は、西から桁行4.48ｍ（15尺）・3.73m（12.5尺）で、梁行は3.43ｍ（11.5尺）となる。このうち、礎石据付穴・抜取穴１、２は伽藍中軸線を跨ぐことから、柱間は桁行中央間と捉えられ、講堂身舎桁行柱間と同一であることから、講堂北軒廊に取りつく馬道と判断できる。中央間を除く桁行柱間は、９次調査成果を踏まえると、東僧房と同様の3.73m（12.5尺）等間に復元できる。その結果、北僧房桁行柱間数は中央の馬道を加え29間（約109ｍ）となろう。３間一坊とする従来の復元では齟齬が生じ、２間一坊又は２間と３間とを組み合わせる復元を想定する必要がある。梁行については東僧房と同様の柱間３間となり、中央間が身舎4.18ｍ（14尺）で、南北両側に3.43ｍ（11.5尺）の庇を持つ建物となる。

溝６は南雨落溝であり、北肩が北僧房基壇南縁となる。礎石据付穴・抜取穴５の中心から北肩まで６尺（1.79ｍ）、溝底に敷かれた瓦列までが７尺（2.09ｍ）であることから、それぞれ基壇の出

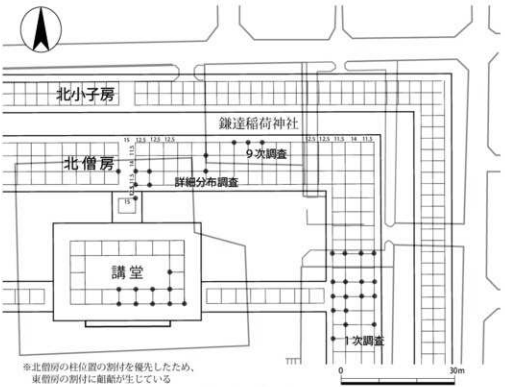


図17　北僧房復元試案（1：1,000）

及び軒の出を示している。よって、北僧房の基壇幅は14.62m（49尺）となる。また、溝6（新）に敷かれた瓦片の上には、焼土や焼けた壁土が厚く堆積しており、北僧房が焼失したことがわかる。正暦元年（990）の西寺焼亡に対応するものと判断できる。

基壇外装については、簡易な化粧が施されていると想定されていたが[7]、凝灰岩などの化粧はなく、盛土のみで構築されている。基壇高については、北僧房に取り付く講堂北軒廊の基壇高が0.5mであることを鑑みると、同様の高さであったことがわかる。

北僧房の位置については、これまで9次調査成果に基づき、東寺北僧房の位置よりも北側に復元されていた。今回の調査で南雨落溝である溝6を認め、基壇南縁が確定したことで、9次調査の桁行柱列は入側柱列ではなく、側柱列であることが確定した。その結果、北僧房の配置が約4m南側にずれることとなり、東寺北僧房とほぼ同位置となる。したがって、北僧房と食堂院との間に基壇幅約10mとされる北小子房を配する余地が生じることとなった[8]。

（2）講堂北軒廊

これまで復元されていなかった講堂北軒廊では、礎石抜取穴1基、基壇盛土及び外装と雨落溝を確認した。

軒廊の梁行柱間については、礎石抜取穴7が北僧房の梁行柱位置を示す礎石据付穴2・4と柱筋を揃えることから、北僧房桁行中央間及び講堂身舎桁行柱間と同様の4.48m（15尺）に復元できる。基壇の出についても、基壇東縁を確認したことから6尺（1.79m）となり、軒の出は雨落ちの瓦列までの7尺（2.09m）となる。したがって、軒廊は単廊で屋根は切妻に復元できる。なお北僧房との取り付きにあたる礎石抜取穴7と抜取穴4との間は3.6～3.7m（12尺～12.5尺）を測

る。また、北僧房南雨落溝（溝６新）の瓦列が入隅付近で途切れることから、北僧房との屋根の仕舞いは軒廊側の屋根が北僧房の軒下に収まることを示す。

北軒廊東縁の凝灰岩製基壇化粧は、地覆石、羽目石、葛石で構成される切石積基壇であることを確認した。基壇幅については、羽目石外側を伽藍中軸線で折り返した８m（27尺）であり、東西軒廊の幅と同一となる。基壇盛土上面には土間叩きの床面が残る。地覆石上面と葛石上面との高低差は0.5 mであり、基壇高を示す。一方、北軒廊と繋がる講堂の基壇高は1.35 mあり、0.85 mの比高がある。講堂北縁と北僧房南縁との距離は8.35 m（28尺）と短く、講堂との取り付きについては、39次調査で判明した東軒廊の登り廊下とは異なり階段であった可能性が高まった。

（３）整地層

北僧房と講堂北軒廊入隅外側に広がる整地層を確認した。上面にて溝６（新）が成立することから、西寺が十分に機能していた時期に整地を伴う造成を行う必要があったことを示している。造成の契機については、整地層内に含まれていた焼土や炭化物が参考となる。年代を特定するための土器類の出土は僅かであるが、９世紀前半から中頃に位置付けられる土器が認められること、整地層上面で成立する溝６（新）を正暦元年（990）の火災に伴う焼土が覆うことから、正暦元年以前に火災があったことが窺える。これまでの調査でも、西寺東築地西側で９世紀初頭の土器溜りと共伴する焼瓦を廃棄した落込みが確認されており、正暦元年の焼亡以前に火災があった可能性が指摘されている[9]。西寺では、天長元年（824）に宝蔵が雷火によって焼失し、桓武天皇追善のため、嵯峨天皇直筆の金字法華経七巻が失われたことが記録に残る[10]。宝蔵の位置は不明であるが、経典が納められたことを鑑みると、経蔵の可能性がある。経蔵は、古代寺院の伽藍配置において講堂南側に西の鐘楼と対を為して東側に設けられており、西寺でも同様であったと考えられる。今後、付近での調査の際には留意が必要だろう。

以上、今回の調査にて、北僧房及び北軒廊の建物及び基壇規模、外装等についての詳細な情報を得ることができた。これらは、失われた西寺の伽藍の姿を立体的に捉えていくために必要不可欠な資料となる。加えて、講堂北側の様相について伽藍復元図を見直す新たな知見が得られた。北僧房が従来の復元より南に位置し、桁行中央には馬道を設けていること、講堂と北僧房を繋ぐ北軒廊が存在することが明らかになった。北僧房が東寺北僧房とほぼ同じ位置を占めることで、北小子房を配する余地が生じることとなった。今後、北小子房の有無を把握する必要性があろう。

また、図17にて北僧房の復元試案を提示したが、９次調査は50年近く前、東僧房の１次調査に至っては60年以上前の調査となる。そのため、図面に国土座標が割り振られておらず、正確な伽藍復元を行う精度になく、各所で齟齬が生じることとなった。既存調査地を国土座標系にどのように当てはめるかは今後の課題といえよう。

（西森正晃）

註

1）西森正晃ほか『史跡 西寺跡発掘調査総括報告書』京都市文化市民局、2021年。

2）杉山信三『史跡 西寺跡』鳥羽離宮跡調査研究所、1979年。
梶川敏夫「史跡 西寺跡－北僧房跡発掘調査概要－」『鳥羽離宮跡・史跡西寺跡 京都市埋蔵文化財年次報告1974－Ⅳ』京都市文化観光局文化財保護課、1975年。

3）註2に同じ。

4）堀大輔「平安京右京九条一坊十一町跡・史跡西寺跡（10HR325）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成22年度』京都市文化市民局、2011年。

5）山崎信二「東大寺式軒瓦について」『論集　東大寺の歴史と教学/ザ・グレイトブッタ・シンポジウム論集第1号』東大寺、2003年に独立行政法人奈良文化財研究所が所蔵する西寺跡出土品の紹介をする中に同文瓦が掲載されている。

6）『法隆寺の至宝15　瓦　第15巻』法隆寺昭和資材帖編集委員会編、1991年。

7）註2に同じ。

8）令和4年度に実施された41次調査では、北小子房に伴う顕著な遺構は認められなかった（本報告書Ⅴ章参照）。遺構面が削平されている可能性もあり、北小子房の有無については慎重に検討する必要がある。

9）東洋一「平安京右京九条一坊十二町・西寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局、2014年。

10）『性霊集』巻六　奉為桓武皇帝講太上御書金字法華㊀一首「太上親握龍管奉為大行皇帝奉寫金字法華経一部七巻奉答海岳。天下寶祚之西寺前年冬月興天火滅紙」

Ⅴ　史跡西寺跡、西寺跡（41次）、平安京右京九条一坊十一町跡、唐橋遺跡

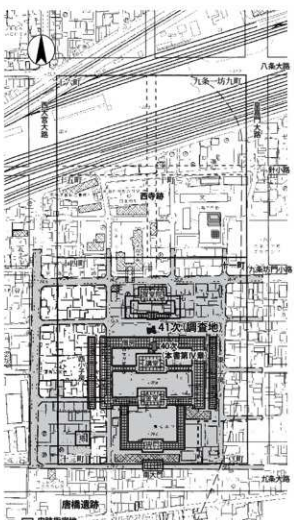


図1　調査位置図（1：5,000）

1．調査経過

本件は、史跡西寺跡における範囲確認調査である。調査地は南区唐橋西寺町57に所在し、唐橋西寺公園内に位置する。本市では、史跡西寺跡の史跡保存活用計画策定に向けて、伽藍復元のデータを得ること及び普及啓発を目的として、平成30年度より範囲確認調査を実施しており、今年度も調査を行う運びとなった。西寺跡41次調査となる。

文化財保護法第125条に基づく史跡名勝天然記念物の現状変更許可申請書を令和4年8月2日付けで提出し、10月12日付け4文庁第2573号で文化庁長官の許可を得た。調査は10月13日に開始し、重機掘削後、人力で掘削等を行った。10月15日には、地元向けに西寺についての勉強会及び発掘調査現場見学会を開催した。調査中には、隣接する市立唐橋小学校3年生及び6年生が現場の見学に訪れ、説明を行った。また、調査区を囲うフェンスに調査位置図、古写真等を貼り出し、周知に努めた。遺構を土嚢などで養生し、重機で埋め戻しを行い、11月4日に調査を終了した。調査区南側で遺構の広がりを確認するため数箇所を拡張し、最終的な調査面積は76㎡である。

2．遺　跡

（1）歴史的環境

西寺は、延暦13（794）年の平安京遷都に伴い、東寺とともに国家鎮護のために造営された官寺である。両寺は朱雀大路を挟んで、左右対称になるように伽藍を配置している。伽藍は、南から南大門・中門・金堂・講堂・僧房・食堂院が一直線に並ぶ。西寺では南西側、東寺では南東側に塔が

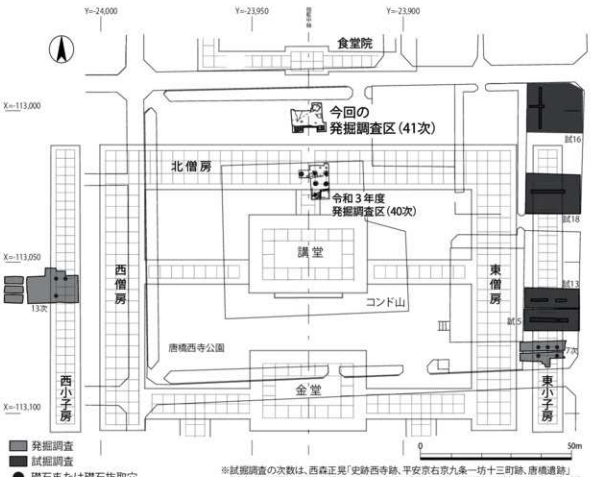


図２　調査区配置及び周辺調査位置図（１：1,250）

位置する。僧房は講堂の北・東・西側に配する三面僧房である。

西寺では、東僧房と西僧房の外側にそれぞれ東小子房及び西小子房を確認している。梁行２間の南北方向に長い建物である。北小子房に関しては、北僧房と食堂院の間に空間的余地がないことから、北小子房は存在しないとされてきた。しかし、昨年度実施した40次調査[1]で、北僧房の礎石抜取穴と南雨落溝を検出し、北僧房の南端が明らかになった。その結果、北僧房の位置が従来の復元より南に位置することがわかり、北僧房と食堂院との間に北小子房が存在する余地ができた。

図３　調査前風景（北東から）

一方、東寺の江戸時代の古図には、三面僧房の外側に小子房にあたる廻廊と名付けられた建物が巡る。発掘調査で、北僧房と食堂との間に北小子房（北廻廊）が存在することを確認している。調査の結果、南北幅が約５m間隔の根石を東西２箇所検出し、梁行１間で柱間が約５mの建物であることが判明した[2]。

以上から、西寺跡において北僧房と食堂院との間に北小子房が存在する可能性を踏まえ、北小子房の南端及び建物に関する遺構の有無を確認することを目的に、伽藍中軸上で調査を実施した。

（２）周辺の調査（図２）

西寺跡全体にかかる既往の調査事例は、『史跡西寺跡発掘調査総括報告書』[3]（以下、『総括報告』とする）に取りまとめられているため、ここでは小子房関連の調査について述べる。

東小子房推定地で行われた７次調査[4]では、調査区東側で南北方向の溝、西側で落ち込みを検出し、小子房の基壇東側の南北溝及び基壇西端であることが判明した。また、列をなす礎石抜取穴５基を検出し、東西方向の柱間が3.1m、南北方向の柱間が3.0mの南北方向に長い建物に復元されている。その北側では試掘調査（試５、試13、試16、試18）が行われており、基壇土、雨落溝、礎石据付の根石、整地層などを検出した。試５[5]では、基壇縁の落ち込みから基壇東西長約8.8mであることが明らかになった。基壇上で礎石据付の根石を１箇所確認している。また、試13[6]では東小子房基壇、試16[7]では整地層、試18[8]では基壇土及び基壇西縁の雨落溝をそれぞれ検出した。

西小子房推定地で行われた13次調査[9]では、基壇土、礎石抜取穴、西雨落溝を検出した。砂と粘土の粗い版築の基壇上で、礎石据付穴を確認している。西雨落溝は基壇端より0.6ｍ西側で、幅0.8～1.0mの南北方向の溝である。

以上のように、東・西小子房推定地において、基壇、雨落溝、礎石抜取穴など小子房に関連する遺構が検出されていることがわかる。

３．遺　構

（１）基本層序（図４）

調査地の現況は、標高約19.5ｍの平坦地である。基本層序は、表土、GL-0.1mで旧耕作土、-0.2mで明黄褐色砂泥の遺物包含層、-0.3ｍでにぶい黄色砂泥、-0.4mで黄褐色極細砂～シルトの流れ堆積である。調査区西壁中央付近では、GL-0.3mで灰褐色粗砂混じり砂礫、-0.4mで灰白色砂礫の流れ堆積である。灰白色砂礫層には古墳時代の遺物が含まれていたことから、古墳時代以降に形成された地層と考えられる。調査区南端では断面溝状を呈する落ち込みを検出した。落ち込みの堆積状況から、整地を行った様子が見られた（西壁10～13層、東壁５・６層）。また、この整地土及び流れ堆積の上面を遺構面とし調査を行った。遺構面は、標高約19.2ｍである。

（２）遺構（図５）

遺構は、平安時代の整地土、瓦溜り、土坑、ピットを検出した。

表１　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
平安時代	整地土、瓦溜り、土坑１、土坑２、ピット３～５	

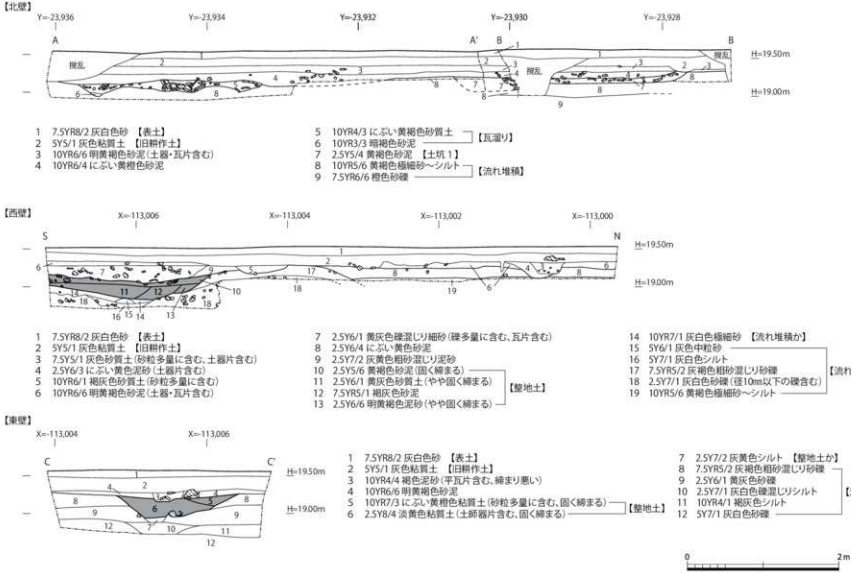


図4 調査区断面図(1:50)

図5　調査区平面図（1：100）

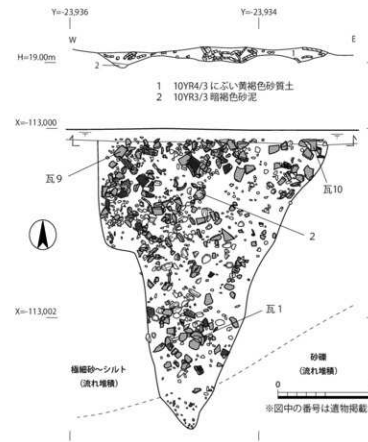


図6　瓦溜り平・断面図（1：40）

整地土

調査区南壁沿いで検出した整地土である。ほぼ正方位にのった東西方向の溝状の落ち込みに土を入れている。幅約1.5～1.7m、深さ約0.2～0.3mである。北肩は西から東にまっすぐに延びるが、南肩は調査区西端で南に折れ曲がる。調査区西端と東端を断割、堆積状況を確認したところ、土を入れ締め固めている様子が見られた。西端下層（西壁11～13層）から古墳時代の土師器、上層（西壁10層）から10世紀後半の土師器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、凝灰岩片などが出土した。

瓦溜り（図６）

調査区北西部で検出した瓦溜りである。南北3.0ｍ以上、東西2.4ｍの不定形で、調査区外に延びる。深さ0.06～0.20ｍで凸凹を呈する。凹みを埋めて整地をしたとみられる。10世紀前半の土師器、軒丸瓦、丸瓦、平瓦などが出土した。

土坑１（図７）

調査区北東部で検出した土坑である。南北2.8ｍ以上、東西2.0ｍ以上で、調査区外に延びる。深さ約0.2ｍである。埋土には、土器及び瓦を多量に含む。また、南端では瓦片の上面に煤や油煙が付着した灯明器が複数枚重なった状態で出土した。廃棄土坑と考えられる。このほかに10世紀前

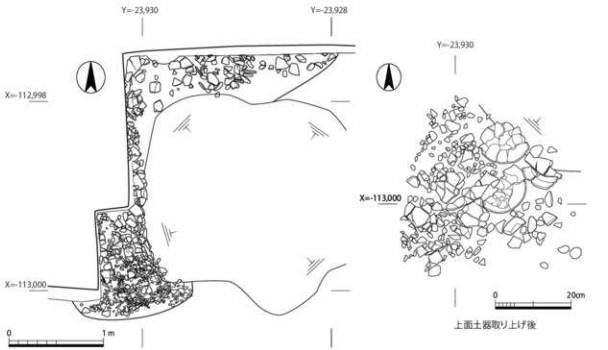


図７　土坑１遺物出土状況（１：40）及び上面土器取り上げ後平面図（１：10）

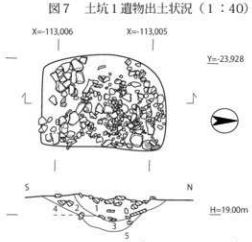


図８　土坑２平・断面図（１：40）

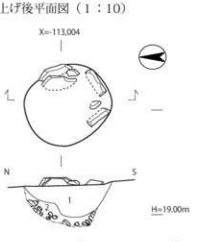


図９　ピット４平・断面図（１：20）

半の土師器、緑釉陶器、丸瓦、平瓦などが出土した。

土坑2（図8）

調査区南東部で検出した方形の土坑で、整地土を切る。南北1.3m、東西1.0m、深さ0.4mである。土坑最上層には、土器や礫などを多量に含む。10世紀後半の土師器、須恵器、丸瓦、平瓦などが出土した。

ピット3～5

調査区中央部で検出したピット群である。3箇所とも直径約0.4mのほぼ円形で、深さ約0.2mである。ピット4（図9）は、瓦を立ててコの字状に据える。土師器、瓦細片が出土した。

4．遺　物

コンテナ4箱の遺物が出土した。遺物は、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦などである。保存目的の調査であるため、遺物の取り上げは必要最低限にとどめ、残りは現地保存を行っている。なお、瓦の名称及び分類は『総括報告』に準拠した。

表2　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器				
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、石製品		土師器28点、須恵器1点、緑釉陶器3点、灰釉陶器1点、瓦14点、ほか		
合　計		5箱	47点(2箱)、ほか3箱	0箱	0箱

※コンテナ箱数の合計は、整理に伴い、出土時より1箱多くなっている。

（1）土器（図10）

瓦溜り　1～7は土師器である。1はⅢA、2～4は椀又は杯Aである。1は、口縁部が外上方へ延び、端部はやや外反しつまみ上げる。2～4は、口縁部が外上方へ延び、端部は内傾し丸く収まる。器壁が薄い。2は口径13.0㎝、高さ2.9㎝である。2は口縁部の縁の部分、3は内面と外面一部に煤が付着する。5～7は甕である。口縁部は外上方へ延び、端部は内傾しつまみ上げる。10世紀前半に属する。

土坑1　8～10は土師器ⅢAである。口縁部は外上方へ延び、端部はやや外反しつまみ上げる。8は口径10.9㎝、高さ1.1㎝である。11～23は土師器の灯明器である。11～14は椀又は杯Aである。口縁部は外上方へ延び、端部は11～13がやや外反しつまみ上げ、14が内側に丸く収める。底部は丸みを持つ。口径12.4～14.7㎝、高さ2.7～3.5㎝である。15～23は杯Aである。口縁部は外上方へ延び、端部は15～20が上部へつまみ上げ、21が内傾しつまみ上げ、22・23が内傾し丸く収める。底部はほぼ平坦をなしている。口径13.0～16.7㎝、高さ2.25～2.7㎝である。内面全体や一部に煤が付着するもの（11・12・14・16・19・21・22・23）、煤の上に油煙が付着す

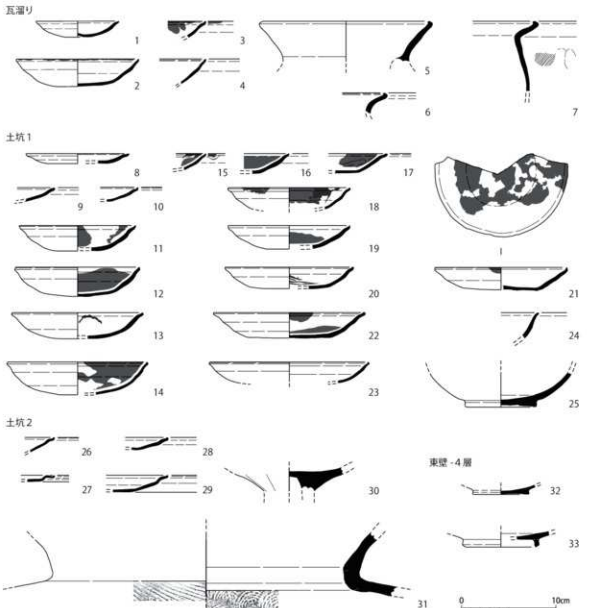


図10　出土遺物実測図（1：4）

るもの（15・17・18）、油煙のみが付着するもの（13・20）がみられた。10世紀前半に属する。24・25は緑釉陶器である。24は小杯の口縁部である。口縁部は外上方へ延び、端部は外反する。25は蛇の目高台を有する椀である。ともに内外面全体に施釉している。京都産である。

土坑2　26・27は土師器皿Aである。口縁部はやや強く外反し、端部は内側に丸く収める。10世紀後半に属する。28・29は土師器皿Aである。26・27より古い時期に位置づけられる。口縁部はやや外反し、端部は内側に丸く収める。10世紀前半に属する。30は土師器高杯の杯部である。外面にケズリを施す。内面の一部に煤が付着する。31は須恵器甕の頸部である。体部外面にタタキ、内面には同心円文の当て具痕が残る。

東壁－4層　32は緑釉陶器の底部である。平底で外傾する高台を有し、全面に施釉している。33は灰釉陶器の底部である。貼り付け高台を有する。高台は内傾し、内端面が接地する。

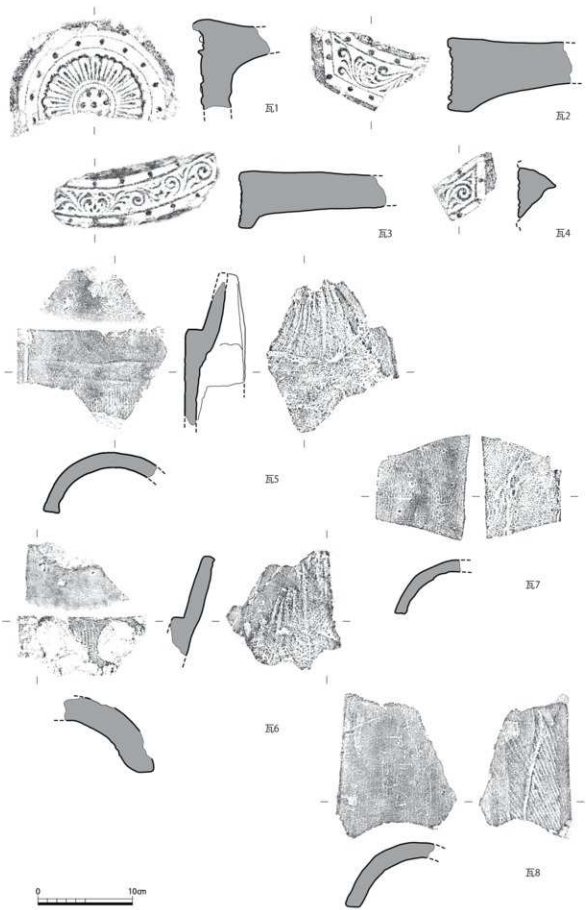


図11　出土遺物実測図及び拓影1（1：4）

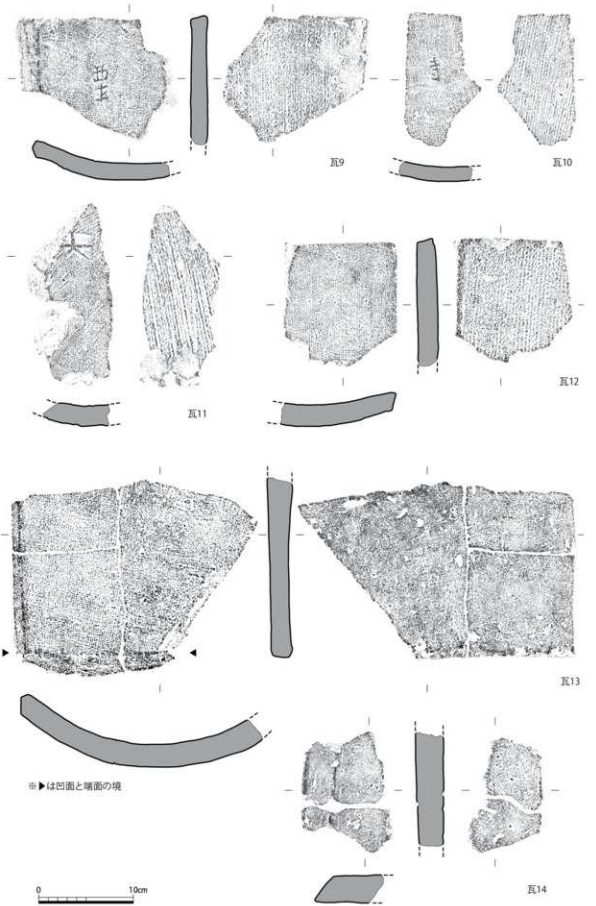


図12　出土遺物実測図及び拓影２（１：４）

（2）瓦（図11・12）

今回の調査では、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦などが出土した。

瓦1は、複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当文様は、中房に1＋6の連子を配し、花弁・間弁ともに盛りあがる。外区には圏線と珠文が巡る。『総括報告』瓦8と同笵である。周縁が内側に傾斜する。瓦当成形は瓦当貼り付けである。凸面はケズリ、瓦当裏面はナデを施す。胎土はやや粗く、焼成は軟質である。平安時代前期に属する。

瓦2～4は、軒平瓦である。瓦2～4は、均整唐草文軒平瓦である。瓦2の瓦当文様は、主葉が外側に向かって延び、先端が大きく巻き込む。外区には珠文が巡る。『総括報告』では出土していない。曲線顎。平瓦部凹面に布目が残る。顎部裏面はケズリを施す。胎土はやや粗く、焼成は硬質である。瓦3の瓦当文様は、中心に上向きの三葉を配す。主葉は外側に向かって3反転し、先端が水滴状に巻き込む。外区には珠文が巡る。『総括報告』瓦25と同笵である。曲線顎。平瓦部凹面に布目が残る。顎部裏面は摩滅している。胎土はやや粗く、焼成は軟質である。瓦4は、瓦3と同笵である。胎土はやや粗く、焼成は硬質である。瓦2～4は平安時代前期に属する。

瓦5～8は、丸瓦である。瓦5は、玉縁部から胴部の凹面に布袋綴じ合わせが残る。凸面にナデを施す。瓦6の側面は外傾する。胴部凹面に布目が残る。凸面は縄タタキ後ナデ、側面はケズリを施す。側面は外傾する。瓦7は、凸面縄タタキ。凹面に布目が残る。瓦8は、凸面縄タタキ。凹面に糸切の痕跡が残る。平安時代前期に属する。

瓦9～11は、刻印を持つ平瓦で、刻印は凹面部分にある。それぞれ凸面に縄目、凹面に布目が残る。瓦9の側面はケズリを施す。瓦9は「西土」銘、瓦10は「寺」銘である。瓦11文字らしき銘が押印されている。瓦12・13は、平瓦である。瓦12は、凸面に縄目、凹面に布目が残る。瓦13は、凹面から端面にかけて連続する布目が残る。凸面は摩滅している。側面はケズリを施す。平安時代前期に属する。

瓦14は、熨斗瓦である。凸面に施釉している。胎土はやや粗く、焼成は軟質である。

瓦1、6～12は瓦溜り、瓦2～4は整地土、瓦5は土坑2、瓦13は土坑1、瓦14は東壁-4層から出土した。

5．まとめ

今回の調査地点は、西寺の伽藍中軸上で北小子房推定地の南端にあたる。北小子房に関する明確な遺構は確認できなかった。整地土、瓦溜り、土坑などを検出した。

調査区南壁沿いで検出した整地土は、ほぼ正方位にのった東西方向の落ち込みに伴うものである。北肩は西から東にまっすぐ延び、調査区外に続くことがわかった。何らかの基準であった可能性がある。調査位置を考慮すると整地土は、西寺の北小子房や北僧房に関わるものかもしれないが、確証は得られなかった。

調査区北側の伽藍中軸付近では、瓦溜りや土坑1を検出した。瓦溜りでは、「西土」「寺」などの刻印を持つ瓦や10世紀前半の灯明器を含む遺物が出土した。土坑1では、南端の瓦片上面に10世紀前半の灯明器がまとまって出土した。灯明器は、土師器椀・杯で、煤のみが付着するものや煤の上に油煙が付着するものと様々であった。北僧房の北側で食堂院にも近いことから、僧侶の日常生活で使用したと考えられる。

以上、今回の調査では、伽藍中軸上で北小子房に関わる直接的な遺構は検出できなかった。しかし、検出した遺構から、少なくとも10世紀代には当該地点に土地利用があったといえる。今後、範囲確認調査を継続的に行うことで、西寺跡での北僧房の規模及び北小子房の有無が明らかになるだろう。

（八軒かほり・熊谷舞子）

なお、今回調査では、下記の方々から多岐にわたる御指導、御協力を得ました。末筆ではありますがここに記し、感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

天野広一、網伸也、諫早直人、一瀬和夫、上村和直、鈴木久男、長宗繁一、西山良平、
長谷川行孝、前田義明、南孝雄

註

1）本報告書の第Ⅳ章を参照。
2）杉山信三ほか『教王護国寺防災施設工事・発掘調査報告書』、1981年。
3）西森正晃ほか『史跡西寺跡発掘調査総括報告書』 京都市文化市民局、2021年。
4）杉山信三 『史跡 西寺跡』 鳥羽離宮跡調査研究所、1979年。
5）長谷川行孝 「史跡西寺跡」『京都市内遺跡試掘報告概報 平成7年度』 京都市文化市民局、1996年。
6）「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成20年度』 京都市文化市民局、2009年。
7）「一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成26年度』 京都市文化市民局、2015年。
8）西森正晃 「史跡西寺跡・平安京右京九条一坊十一町跡・唐橋遺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成28年度』 京都市文化市民局、2017年。
9）「平安京右京九条一坊、西寺跡4」『昭和52年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、2011年。

参考文献

『第23回 古代官衙・集落研究会報告書 灯明皿と官衙・集落・寺院』奈良文化財研究所研究報告第26冊 奈良文化財研究所、2020年。

Ⅵ　植物園北遺跡

１．調査経過

調査地は、京都市北区上賀茂梅ケ辻町7-9（２号地）、7-10（３号地）に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地である「植物園北遺跡」に該当する。当地において個人住宅の建設が計画され、令和４年１月18日付で文化財保護法第93条第１項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」がそれぞれ提出された。当該地宅地造成に先立って令和３年に実施された発掘調査で飛鳥時代～室町時代の遺構群が確認されたことから、当該地においても遺構が展開する可能性が高く、記録保存のための発掘調査が必要と判断し、文化庁国庫補助事業による調査を実施することとなった。

調査期間は令和４年１月26日から２月10日までである。調査区は２号地を１区、３号地を２区と設定した。１区は東西５m、南北5.5 mの範囲で設定し、一部拡張を行い調査面積は33.5㎡である。２区は東西5.5 m、南北５mの範囲で設定し、調査面積は27.5㎡である。調査面積の合計は61.0㎡となった。

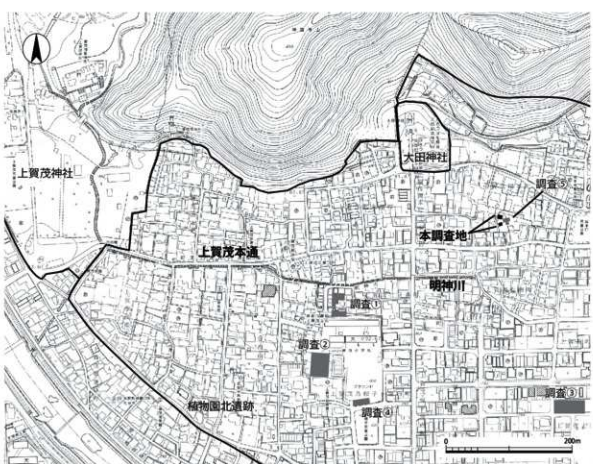


図１　調査位置図（１：6,000）

図２　調査前全景（南東から）

図３　作業風景（南西から）

（１）立地と歴史的環境

植物園北遺跡は、北西端は上賀茂神社付近から京都府立植物園の東半を含み、南は北泉通付近、東端は京都市営地下鉄烏丸線松ヶ崎駅付近までに至る東西約２km、南北約1.5kmに広がる大規模遺跡である。本調査地は、植物園北遺跡の北西部に位置し、南側に上賀茂本通を挟み明神川が流れる。周辺には大田神社があり、上賀茂神社の氏人が集住した社家町が広がる。社家町は、寛仁２年（1018）に賀茂六郷とよばれる惣郷組織が作られ、上賀茂神社周辺に分布し、田地の作人（百姓）や町人などが集住するようになり、社家町が形成された。文明８年（1476）には社司と氏人との対立があり、上賀茂神社の社殿が焼亡する「文明の一社騒乱」にまで発展する。天文年間（1532～1555）には、「構」が築かれるようになる。それらの「構」に対して氏人が置文によって維持管理する条文を定めている。近世になると人口が増加し社家・寺家分や農民のほか、大工などの職人も集住するようになり、上賀茂周辺は大規模な門前集落に発展していく[1]。

（２）周辺の調査

周辺では弥生時代後半から室町時代にかけての遺構が多数確認されている。

調査①では、古墳時代の竪穴建物を２棟と室町時代の構跡や集石遺構を確認している。この調査で確認された構は置文に見られる構の可能性が高いと考えられており、社家町に関連する遺構が初めて確認された[2]。

調査②では、弥生時代から古墳時代にかけての自然流路や古墳時代の竪穴建物を確認しており、本調査地から北西に向かって竪穴建物が分布することを確認した。また、平安時代の隅丸方形の柱穴や庇付き建物、竪穴建物３棟を確認している[3]。

調査③では、弥生時代後期から古墳時代前期の流路、古墳時代前期から中期の竪穴建物を確認した。竪穴建物の貯蔵穴から滑石製の勾玉模造品などが出土した[4]。

調査④では、古墳時代の掘立柱建物や自然流路や柱穴を確認した。出土遺物は少量であるが室町時代の土坑や柱穴群を確認した[5]。

調査⑤では、飛鳥時代の竪穴建物や平安時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代にともなう遺構群を確認している。調査区の南西隅で室町時代と考えられる常滑焼の底部を据え、複数の土師器皿を重ね、上部には大型の自然石が置いた状況の土坑を確認している[6]。

以上のように周辺では古墳時代の建物跡などの遺構が多数確認されている。一方で少数であるが室町時代の遺構も確認されており、上賀茂神社の社家町に関連する遺構が広がっている状況が窺える。

2．遺　構

（1）1区の遺構（図5～9、表1）

基本層序

1区の基本層序は西壁において、GL-0.15m（H=79.7m）でにぶい黄褐色泥砂の近世包含層（西壁2層）、-0.35m（H=79.5m）で明黄褐色シルトの地山（西壁7層）である。

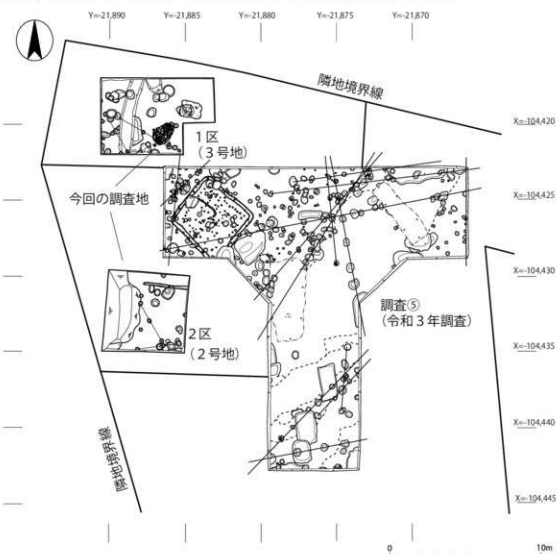


図4　調査区配置及び調査⑤遺構平面図（1：250）

表1　遺構概要表

時　代	1 区 遺 構	2 区 遺 構
鎌倉時代	柱穴19・20・21 土坑53・55	土坑4・23
室町時代	土坑11・17・26・32・34・49　柱穴22　柱列A・B ピット18・31・38・45・46・54・58	土坑16・22 柱列C・D

遺構検出は地山上面で行った。調査区中央付近で南北方向にのびる明治時代以降の攪乱を確認した他は、鎌倉時代、室町時代の2時期の遺構が展開する。検出した遺構は土坑・柱穴・柱列・ピットなどである。以下、主要な遺構について報告する。

遺　構

室町時代の遺構

土坑11　調査区南西端で検出した。東西0.4m、南北0.3m以上の土坑の一部で、深さは0.25mである。埋土は単層で、にぶい黄褐色泥砂である。遺物は土師器の皿が出土した。

土坑17　調査区南西端で検出した。東西0.18m以上、南北0.45mの土坑の一部である。深さは0.4mである。埋土は単層で灰黄褐色泥砂である。遺物は土師器の皿、瓦器の鍋が出土した。

柱穴22　調査区中央付近で検出した。径0.6mの楕円形の柱穴で、深さは0.45mである。埋土は3層に区分でき、にぶい黄褐色泥砂、地山ブロックを含む灰黄褐色泥砂、にぶい黄褐色細砂である。遺物は土師器の皿、瓦器の鍋・羽釜、須恵器片などが出土した。

土坑26（図7）　調査区南東側で検出した。長径1.6m、短径1.1mの楕円形の集石土坑である。深さは0.35mである。埋土は2層に区分できる。上層が灰黄褐色泥砂で下層が粘質土を含むにぶい黄褐色泥砂である。下層に径0.2～0.3mの自然石を充填する。埋土から土師器皿、瓦器の鍋、鉄釘片などが出土した。

土坑32　調査区南端で検出した。東西0.7m、南北0.5m以上の土坑で、深さは0.45mである。埋土は2層に区分できる。上層が黒褐色泥砂で、下層が明黄褐色シルト～細砂を含む黒褐色泥砂である。遺物は土師器の皿が出土した。

土坑34　調査区南端で検出した。東西0.55m、南北0.3m以上の土坑の一部で、深さは0.08mである。埋土は単層で、にぶい黄褐色泥砂である。遺物は土師器の細片が出土した。

土坑49（図7）　調査区東壁で一部を確認し、調査区を東へ延長して検出した。南北1.1m、東西1.4mの方形の土坑で、深さは0.25mである。埋土は単層で、にぶい黄褐色泥砂である。上層に径0.2～0.3mの石を含む。遺物は土師器の皿、鍋、須恵器片、鉄滓などが出土した。

柱列A（柱穴5・14・44）（図8）　調査区南西側で検出した。柱穴が3基並び、北から西に30°振れる。掘方は0.3～0.4mで、深さは0.1～0.2mほどである。柱穴5と柱穴14の間が1.6mで、柱穴14と柱穴44の間が1.9mとなる。柱穴14と柱穴44の間に攪乱が存在したため、不明確である

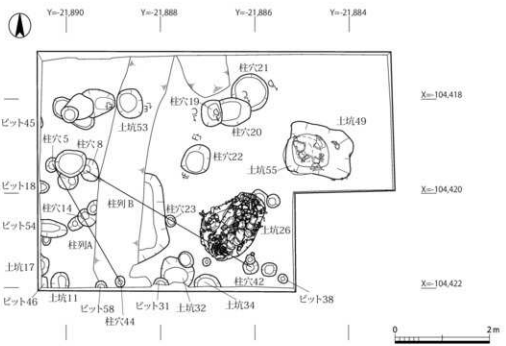


図5　1区平面図（1：80）

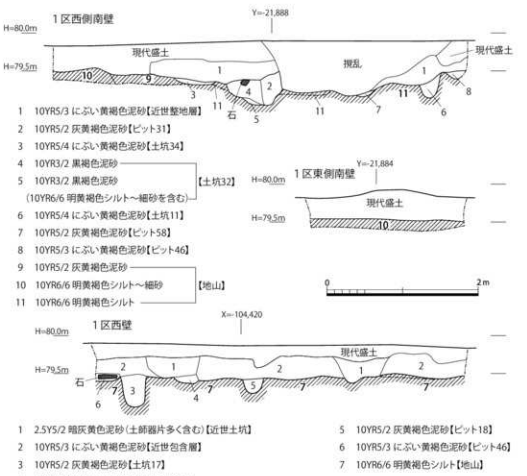


図6　1区壁面断面図（1：50）

がもう一基、柱穴が存在した可能性がある。柵などの可能性が考えられる。

柱列B（柱穴８・23・42）（図8） 調査区南西側で検出した。柱穴が３基並び、北から西に60°振れる。掘方は0.2～0.4mで、深さは0.1～0.25mほどである。柱穴８と柱穴23の間が2.1mで、柱穴23と柱穴42の間が1.9mとなる。柵などの可能性が考えられる。

ピット18・31・38・45・46・54・58

調査区西壁面及び南壁面付近で検出した。ピット38は平面円形を確認できるが、他は全て壁面に接しており一部分のピットである。堀方は0.2mで、深さは0.1～0.2mである。ピット18・31から土師器の皿、ピット38から瓦器の鍋が出土した。

鎌倉時代の遺構

柱穴19（図8） 調査区北側で検出した。柱穴20を切って成立する。径0.56mの円形の柱穴で、深さは0.32mである。埋土は３層に区分できる。柱あたりは炭化物を含む灰黄褐色泥砂、堀方が灰黄褐色泥砂、黄褐色細砂である。埋土の上層に完形の土師器皿が一点置かれている状況であった。遺物は土師器の皿・鍋、須恵器の甕片、小型の丸瓦や鉄釘などが出土した。

柱穴20（図8） 調査区北側で検出した。柱穴21を切って成立する。径0.6mの円形の柱穴であ

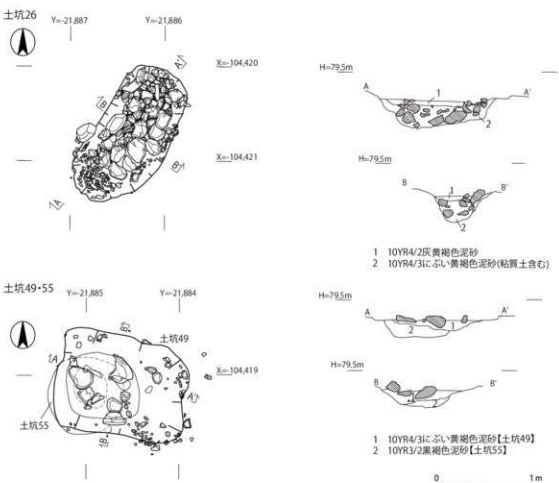


図7　１区土坑26・49・55遺構図（１：40）

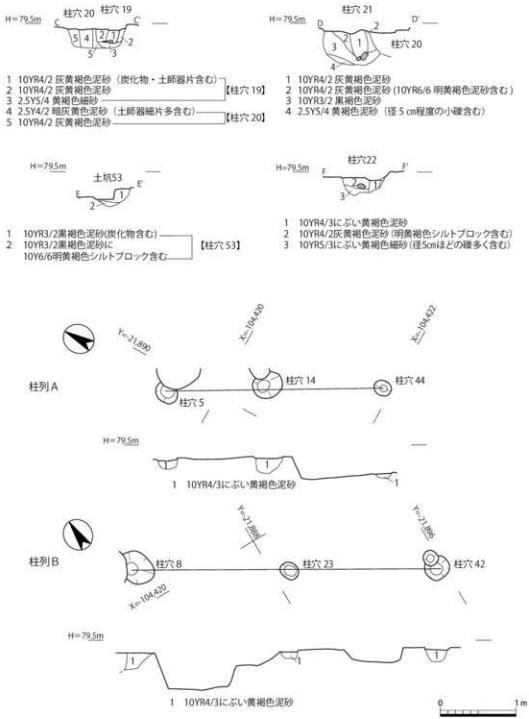


図８　１区柱穴19～22、土坑53、柱列A・B遺構図（１：50）

る。深さは0.35ｍである。埋土は２層に区分できる。柱あたりは暗灰黄色泥砂で、掘方が灰黄褐色泥砂である。遺物は土師器の皿、石鍋片、須恵器の甕片、小型の平瓦などが出土した。

柱穴21（図8）　調査区北側で検出した。柱穴20に切られる。径0.8ｍの円形の柱穴で、深さは0.48ｍである。埋土は４層に区分できる、柱あたりはにぶい黄褐色泥砂、堀方は３層に分けられ、明黄褐色泥砂を含むにぶい黄褐色泥砂、黒褐色泥砂、黄褐色泥砂である。遺物は土師器の皿、瓦器の鍋片、須恵器片が出土した。柱穴20に切られていることから柱穴20成立以前の成立と考えられる。

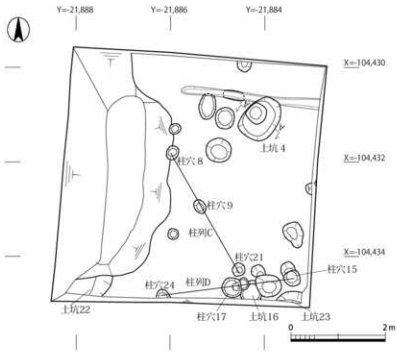
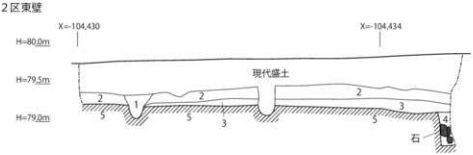


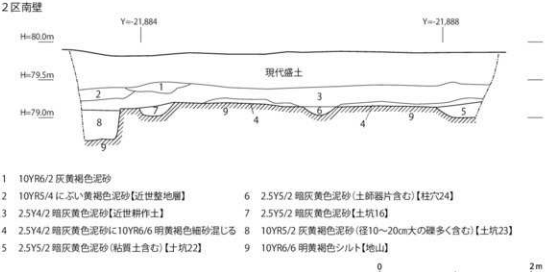
図9　2区平面図（1：80）

2区東壁



1　10YR5/1 褐灰色泥砂【近世耕作溝】
2　10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂【近世整地層】
3　2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂【近世耕作土】
4　10YR5/2 灰黄褐色泥砂（径10～20cm大の礫多く含む）【土坑23】
5　10YR6/6 明黄褐色シルト【地山】

2区南壁



1　10YR6/2 灰黄褐色泥砂
2　10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂【近世整地層】
3　2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂【近世耕作土】
4　2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂に10YR6/6 明黄褐色細砂混じる
5　2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂（粘質土含む）【土坑22】
6　2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂（土師器片含む）【柱穴24】
7　2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂【土坑16】
8　10YR5/2 灰黄褐色泥砂（径10～20cm大の礫多く含む）【土坑23】
9　10YR6/6 明黄褐色シルト【地山】

図10　2区壁面断面図（1：50）

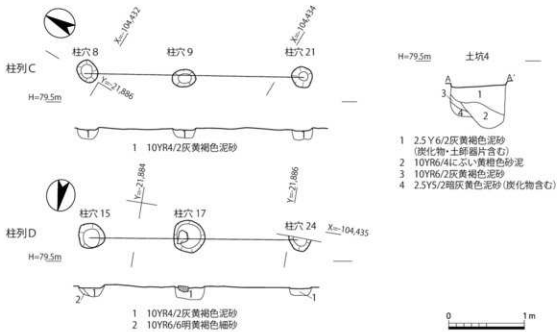


図11　2区土坑4、柱列C・D遺構図（1：50）

土坑53　調査区北西部分で検出した。攪乱に切られており、南北0.6ｍの隅丸方形の土坑である。残存する深さは0.3ｍである。埋土は２層に区分できる。上層は炭化物を含む黒褐色泥砂で下層が明黄褐色シルトブロックを含む黒褐色泥砂である。遺物は土師器皿が出土した。

土坑55　調査区北東側で検出した。径1.0ｍの円形の土坑で、残存する深さは0.2ｍである。土坑49に切られ、土坑の上層は失われる。残存する深さは0.2ｍで、埋土は単層で、黒褐色泥砂である。径0.05ｍ～0.3ｍの石を含む。遺物は土師器の皿、鉄釘、須恵器の甕が出土した。

（2）２区の遺構（図８・９、表１）

基本層序

２区は調査区西側に深さ２ｍ以上の攪乱が及び、中央部分と東側にのみ遺構が残存する。

基本層序は、東壁においてGL-0.35ｍ（H=79.5m）でにぶい黄褐色泥砂の近世整地層（東壁２層）、-0.55ｍ（H=79.3m）で暗灰黄色泥砂の近世耕作土（東壁３層）、-0.65ｍ（H=79.2ｍ）で明黄褐色シルトの地山（東壁５層）に至る。地山上面で遺構検出を行った。１区に比べ遺構の存在は希薄であった。以下、主要な遺構を報告する。

遺　構

室町時代の遺構

土坑16　調査区南端で検出した。南北0.4ｍ以上の楕円形の土坑の一部で、深さは0.25ｍである。埋土は単層で暗灰黄色泥砂である。

土坑22　調査区南西で確認した。東西0.85ｍ以上、南北0.45ｍ以上の土坑で、深さは0.2ｍである。埋土は単層で粘質土を含む暗灰黄色泥砂である。土師器は皿、瓦器の鍋が出土した。

柱列C（柱穴8・9・21）（図11）　調査区中央から南辺で検出した。柱穴３基並び、北から西に

30°振れる。深さは0.15～0.25mほどである。柱穴8と9の間が1.3mで、柱穴9と21の間が1.6mとなる。柵などの可能性が考えられる。遺物が確認されなかったことから明確な時期は不明であるが、1区の柱列Aと方位が同じであることから南北朝～室町時代の可能性が考えられる。

柱列D（柱穴15・17・24）（図11） 調査区中央～南辺で検出した。柱穴が3基並び、西から南にに7°振れる。掘方は0.3～0.4mで、深さは0.13～0.28mほどである。柱穴15と17の間が1.3mで、柱穴17と24の間が1.4mとなる。柵などの可能性が考えられる。

鎌倉時代の遺構

土坑4 調査区北東側で検出した。長径0.95m、短径0.75mの楕円形の土坑である。深さは0.6mである。埋土は4層に区分できる。炭化物・土師器細片を含む灰黄褐色泥砂、にぶい黄橙色砂泥、灰黄褐色泥砂、炭化物を含む暗灰黄色泥砂である。遺物は土師器の皿・白磁片が出土した。

土坑23 調査区南東隅で確認した。東西0.5m以上、南北0.25m以上の土坑の一部で、深さは0.45mである。埋土は単層で径0.1～0.2m大の礫を多く含む灰黄褐色泥砂である。遺物は瓦器の鍋や鉄釘が出土した。

3．遺　物

遺物はコンテナ4箱分出土した。細片が多く、全体を復元できるものは一部に限られる。中でも1区の土坑26と柱穴19から出土した遺物は量が多く、遺存状況が良好である。1～28は1区で、29～40は2区から出土した遺物である。

柱穴22、土坑11、柱穴8、ピット38 1は柱穴22、2は土坑11、3はピット38、4は柱穴8から出土した。1・2は土師器で皿Acである。いわゆる「コースター状」である。口径は8.4㎝と8.7㎝で小型である。3・4は瓦器の鍋である。ともに口縁部は受け口状である。4は内面にハケメを施す。

柱穴19 5～11は土師器の皿Nである。口径は復元できるもので8.2㎝～8.7㎝に収まる。6B～6C頃のものと考えられる。12は土師器の鉢である。13は丸瓦である。凸面に縄叩きを施し、凹面はわずかに布目が残る。14は平瓦である。

表2　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
鎌倉時代	土師器、須恵器、瓦類		土師器13点、須恵器2点、丸瓦1点、平瓦1点		
室町時代	土師器、瓦器		土師器 13点、瓦器10点、		
合　計		5箱	40点（1箱）	1箱	3箱

※コンテナ箱数の合計は、整理後にAランクの遺物を抽出し、詰め直しを行った為出土時より1箱多くなっている。

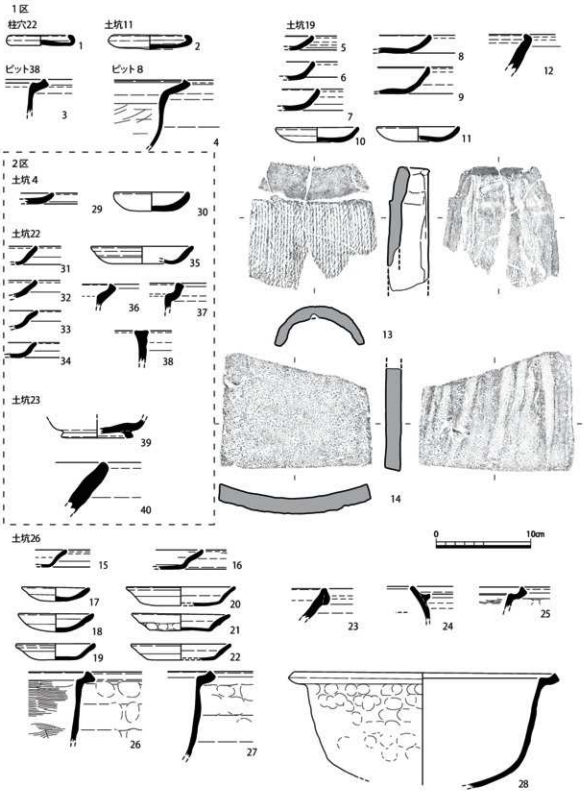


図12　出土遺物実測図及び拓影（1：4）

土坑26　15～22は土師器のⅢNである。口径は復元できるもので7.2～10.6㎝に収まる。7C頃のものと考えられる。23は東播系須恵器の鉢である。口縁端部が外側に突出するものである。24は瓦器の釜である。25～28は瓦器の鍋である。いずれも口縁部は受け口状となる。25・26は内

面を横方向のハケメ、外面に指オサエを施す。27は外面に指オサエを施す。28は内面にわずかにハケメの痕跡が残るのみで調整単位ははっきりしない。外面は指オサエを施し、煤が口縁部から底部にかけて付着する。

土坑4　29・30は土師器の皿Nである。6B頃と考えられる。

土坑22　31～35は土師器の皿Nである。7C頃のものと考えられる。36・37は瓦器の鍋、38は、瓦器の鉢である。

土坑23　39は須恵器杯Bの底部で、高台は貼り付けである。混入品と考えられる。40は土師器の鍋の口縁部である。鎌倉時代頃と考えられる。

4．まとめ

本調査の発掘調査成果

今回の調査では、鎌倉時代～室町時代にかけての遺構群を確認した。調査⑤で確認された飛鳥時代の竪穴建物やその他の周辺調査で古墳時代の建物跡などが多く確認されているが、今回の調査で古墳時代の遺構は確認できなかった。また、調査①のような上賀茂神社の焼亡に関する堀・構の遺構は確認されなかったものの今回検出した遺構の大半は室町時代の遺構であることが確認できた。中でも室町時代の遺構である1区の土坑26のように石を充填し、土師器や瓦器の鍋が多く出土した状況の集石遺構は、周辺の調査①でも確認されている。また、1・2区ともに室町時代にかけての瓦器の鍋の出土が多いことから、室町時代に集落が活発に営まれていたことが明らかとなった。

図13　『社領絵図』（上賀茂神社蔵）と調査地の位置関係

文献史料から見る調査地

発掘調査成果で確認できる様相は文献史料からも見ることができる。文献史料では室町時代以降に上賀茂の名称が出てくる。天文年間の史料『貝武引付』には梅辻町の地名が見られ[7]、宝徳３年（1451）に作成された「地かがみ帳」には、梅辻・池殿・竹ケ鼻・岡本・山本の田地の作人（百姓）の所在地が示されている[8]。今回の調査地の住所にある「梅辻」や他の地名についても現在の社家町の地名と一致しており、当時から町形成がなされていたようである。さらに、明治の頃には明神川付近に社家の神官が住まい、その周辺に百姓や町人が住まう形となり、現在の社家町の様相が確立していくが、『上賀茂町なみ報告書』によると、享保４年（1719）の「社領絵図」（図11）[9]には、建物の描写が比較的細かく描かれており、民家は草葺屋根入母屋造で、絵図の中央付近に所在する社家会所の土蔵は瓦葺で描かれている。当時は社家と民家が混在して集住し、現在のような社家町の様相ではなかったと推測されている。

今回の調査で鎌倉時代～室町時代にかけての遺構を確認したが、文献資料で記される年代以前の様相が確認でき、中世の社家町の様相の一端が確認された。周辺では室町時代の遺構は確認されているものの、少量で不明な点も多い。今回の調査は社家町の形成を明らかにする一つの資料となった。今後、社家町の形成が明らかとなる調査・研究が進むことを期待する。

（清水早織）

註

1）京都市編『史料京都の歴史　北区６』平凡社、1993年。
『上賀茂　町なみ報告』京都市都市計画局、1978年。

2）調査①　辻裕司・木下保明『植物園北遺跡発掘調査概報　昭和59年度』(財) 京都市埋蔵文化財研究所、1984年。

3）調査②　久世康博・津々池憲一「植物園北遺跡１」『平成５年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財) 京都市埋蔵文化財研究所、1996年。

4）調査③　近藤章子・菅田薫「植物園北遺跡」『平成12年度京都市埋蔵文化財調査概要』㈶京都市埋蔵文化財研究所、1996年。

5）調査④　鈴木廣司・津々池憲一「植物園北遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報』2002-14、(財) 京都市埋蔵文化座研究所、2002年。

6）調査⑤　辻広志編『植物園北遺跡　京都市北区上賀茂梅ヶ辻町７、７－１～３・５、30－３、31－７・８、上賀茂岡本町36の発掘調査』(株) 四門、2022年。

7）『貝武引付』

8）『地かがみ帳』

9）「社領絵図」上賀茂神社絵図『賀茂別雷神社史料絵図』賀茂別雷神社、2008年。

Ⅶ　山科本願寺南殿跡

１．調査経過

調査地は山科区音羽伊勢宿町33-２、33-62に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地「山科本願寺南殿跡」に該当する。当地において個人住宅建設が計画され、令和４年７月29日に文化財保護法第93条第１項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。当該地は山科本願寺南殿跡の推定西端に位置しており、その範囲を復元するための重要な位置を占める。本市はこのことから、小規模な建物計画ではあるものの、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、事業者と協議の上、国庫補助による発掘調査を実施することとなった。発掘調査は令和４年９月26日に開始、10月６日に現地での作業を完了し、現地復旧などの付帯工事を12月８日まで実施した。調査の実働は８日間で、調査面積は15㎡である。

２．遺　跡

（１）立地と歴史的環境

山科盆地は東、北、西の三方を山地で囲まれ、盆地北部では音羽川、安祥寺川、四ノ宮川が複合扇状地を形成している。東海道・東山道が盆地北端を通り、平安京から近江を経て東国へと通じる交通の要衝である。現在でもJR東海道本線（琵琶湖線）・湖西線、東海道新幹線、京阪電気鉄道京

図１　調査地及び周辺遺跡位置図（１：10,000）

図2　調査前全景（南西から）

図3　作業風景（東から）

津線、名神高速道路、国道1号線が盆地を横断している。盆地内は古くから土地利用がなされており、中臣遺跡は縄文時代から中世にいたる京都市を代表する集落遺跡である。また、明確な位置は不明ながら中臣氏による山階寺が造営され、天智天皇陵が営まれている。

本願寺は当初東山大谷に所在した。寛正6年（1465）に延暦寺宗徒によって大谷の本願寺は破却され、その後、八世宗主蓮如は越前吉崎に坊舎を築いた。文明10年（1478）、京都近郊への帰還を図った蓮如は洛東山科に本願寺の造営を開始した。文明15年（1483）頃までには御影堂や阿弥陀堂などの主要堂舎が揃っていたようである。山科本願寺は土塁と濠で囲まれ、堂舎の周りには寺内町が形成された環濠城塞都市であった。『二水記』には「富貴、誇栄花、寺中広太無辺、荘厳只如仏国云々。在家又不異洛中也。」とあり、寺院としても都市としても大いに栄えたことがうかがえる。蓮如は延徳元年（1489）、寺務を実如に譲り、自身は山科本願寺の東方約1kmに位置する南殿に隠居した。なお、山科本願寺から東方に位置するにもかかわらず、この隠居所が「南」殿とされるのは、本願寺が東山大谷に所在した際に南側に隠居所を設けていたことに由来している[1]。この南殿も本願寺本体と同様に土塁と堀で囲まれており、中心域には庭園を営んだ。南殿跡の一画に所在する光照寺の境内には、土塁と堀、築山と池からなる庭園遺構が現在でも良好な状態で残されている。天文元年（1532）、勢力を伸張させる本願寺を警戒した管領細川晴元は洛中の法華宗徒（法華一揆）と手を結び、さらに近江守護六角定頼と連合軍を形成して山科本願寺を攻撃した。この際、南殿は山科本願寺とともに焼亡した。その跡地には光称寺（現在の光照寺）が建てられ、現在にいたっている。

（2）周辺の調査

山科本願寺南殿跡では、過去に複数回の発掘調査を実施している。図5には遺跡内の既往発掘調査及び今回調査地点の近接地の試掘調査をまとめた。平成14年、光照寺東側での発掘調査では、山科本願寺南殿に関連する遺構が良好な状態で遺存していることが判明し（図5-1）、その後国史跡に指定された。現在の遺跡範囲は光照寺が所蔵する『御在世山水御亭図』に描かれた南殿の形状をそのままに、この発掘調査で検出した遺構及び現存遺構に重ね合わせて現代の地図上に推定したものである。しかし、近年の調査では音羽伊勢宿町を画する道路沿いで堀と思しき溝を検出しており

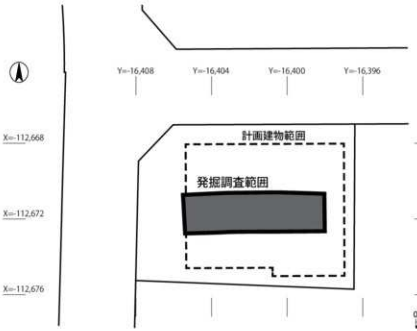


図4　調査区配置図（1：200）

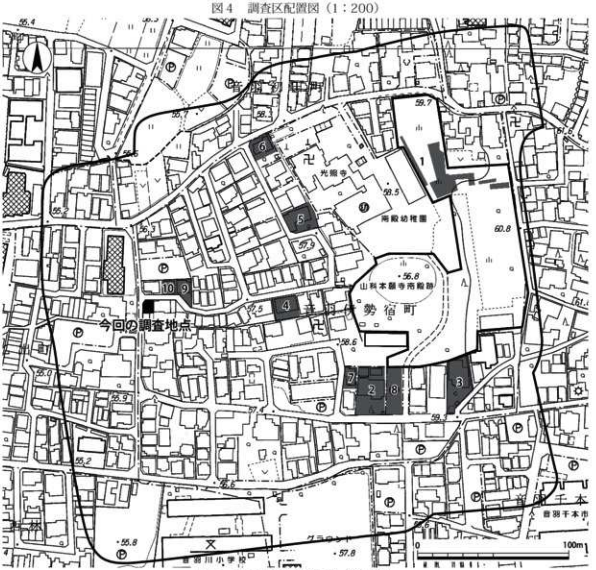


図5　周辺調査位置図（1：2,500）

（調査６）、絵図に描かれた南殿外郭の形状と音羽伊勢宿町の町境が相似形を為すことから、絵図は本来の遺構の位置関係をややデフォルメしており、現音羽伊勢宿町の町域がほぼ南殿の範囲を示している可能性が高まっている[2]。しかし、今回調査地の南西には蓮如が自ら指図して掘削させたとの伝承が残る「御指図の井」があり[3]、南殿の範囲についてはなおも確定をみていない。今回の調査地点は音羽伊勢宿町の西端に当たり、「御指図の井」との位置関係からも、南殿の復元上極めて重要な地点である。なお、今回調査地点の北東近接地２地点で試掘調査を実施しており、いずれも山科本願寺南殿の時期の遺構面を確認している（図5-9・10）。

周辺調査事例に係る調査報告書（番号は図５と対応）

調査１：出口勲「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査概要　平成14年度』京都市文化市民局、2003年。

調査２：平田泰「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成18年度』京都市文化市民局、2007年。

調査３：布川豊治「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成25年度』京都市文化市民局、2014年。

調査４：赤松佳奈「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成27年度』京都市文化市民局、2016年。

調査５：赤松佳奈「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成28年度』京都市文化市民局、2017年。

調査６：黒須亜希子・廣冨亮太「山科本願寺南殿跡（６～８次）」『京都市内遺跡発掘調査報告　令和元年度』京都市文化市民局、2020年。

調査７：調査６に同じ

調査８：黒須亜希子「山科本願寺南殿跡（第９次・第10次）」『京都市内遺跡発掘　令和３年度』京都市文化市民局、2022年。

調査９：京都市文化市民局「試掘調査一覧表（番号111）」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成28年度』京都市文化市民局、2017年。

調査10：赤松佳奈「山科本願寺南殿跡　№92（21S043）『京都市内遺跡試掘調査報告　令和３年度』京都市文化市民局、2022年。

3．遺　構

調査区は敷地中央に東西方向に設定した。調査地点は山科本願寺南殿跡の西側外郭線上に極めて近いと推定できることから、堀や土塁などの南北方向の区画施設が存在した可能性があり、それが存在した場合には東西方向の調査区によって確実に検出するためである。

（1）基本層序

調査地の地表面は東から西へとわずかに下がっており、調査区東端で標高56.0m、西端で55.8mであった。解体撹乱及び盛土が地表面下0.25～0.4m、層厚0.2m程度の灰黄褐色砂泥層に続き、下層の灰黄褐色砂泥層となる。この上面を第1面とした。下層の灰黄褐色砂泥層は0.2m程度堆積しており、その下に厚さ0.4m程度の黒褐色泥砂、以下、にぶい黄色砂礫の地山となる。黒褐色泥砂層上面を第2面、にぶい黄色砂礫上面を第3面と設定した。なお、第1面の調査完了後に、下層を確認するため、調査区の東西両端を断ち割った。その結果、地山面までは地表面から1m強の深度となり、敷地内での排土仮置きが難しいことが判明したため、第2面及び第3面は調査区内全体での掘り下げを断念し、部分的な調査にとどめた。

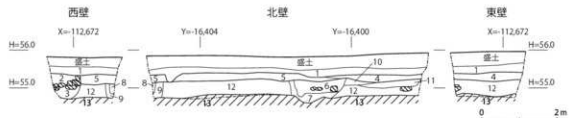


図6　調査区断面図（1：100）

（2）遺構

上述したように3面の遺構面を設定した。このうち、第2面、第3面は調査区内の部分的な調査にとどまる。第2面で山科本願寺南殿に伴う可能性のある柱穴を検出し、ほかに溝や土坑を検出した。以下に概略を報告する。

第3面

地山上面で成立する遺構は検出できず、第2面で成立した遺構の掘削底が地山面まで及んでい

表1　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
戦国時代～安土桃山時代	SK2、SP3	
江戸時代前期	SD1	

ることを確認した。

第２面

SK２　調査区中央付近で検出した土坑である。北側は調査区外へと連続しており、全形は明らかではない。埋土は上下２層に分かれ、上層は灰黄褐色泥砂、下層は黒褐色砂泥である。上層には拳大から人頭大の礫が多量に含まれていた。遺物はわずかで、図化に耐える大きさのものがなかったが、10段階（16世紀）と思われる土師器片が出土している。

SP３　調査区北西隅で検出した柱穴である。第１面西端でおこなった断割部分に当たっていたため、平面的な検出はできていないが、断面にて確認した。遺存する断面から推定すると一辺40～50cm程度、柱当たりは20cm弱となり、柱当たりには焼土が含まれている。遺物は出土しておらず、積極的な時期の推定は難しい。第１面検出遺構の埋土及び第１面構成土中に17世紀前半の遺物が含まれること、焼土の混入が焼き討ちによる焼亡で廃絶したことを想起させ、山科本願寺南殿に伴う遺構である可能性もある。

第１面

SD１　調査区南半で検出した溝である。第１面の遺構検出段階で、調査区中央に東西方向の石列が確認でき、これを境に南北で土が異なっていた。平面的には堆積の順序を確定できなかったが、調査区東西両端の断割により、南側が溝になることが確認できた。排土の仮置き場所の都合上、調査区中央東側の部分的掘削にとどめたが、拳大から人頭大の礫が多量に含まれていた。調査区西端では底部レベルが54.7ｍなのに対し、中央部では55.0ｍとなり、調査区東壁の断割部では埋土が確認できなかった。東から西へと傾斜している。また、調査区西端断割では、55.0ｍ付近に礫が集中し、その上下で埋土が異なる。中央部でも上下２層の堆積を確認しているため、ある時期に掘り直しや改修が加えられた可能性もある。

４．遺　物

遺物はコンテナに１箱出土した。江戸時代の陶磁器が多く、山科本願寺南殿の時期に属するものはわずかである。図化できた資料は第１面で検出したSD１出土遺物及び第１面を構成する灰黄褐色砂泥層出土遺物であり、いずれも江戸時代以降のものである。以下、それぞれについて報告する。

１～４はSD１から出土した。１は瀬戸・美濃産の施釉陶器で折縁皿である。口縁部のみが遺存しており、全形は不明だが、17世紀前半頃の所産であろう。２は唐津産の施釉陶器で溝縁皿である。

表２　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
戦国時代	土師器				
安土桃山時代～江戸時代	土師器、陶磁器		土師器１点、焼締陶器３点、施釉陶器４点		
合　計		２箱	８点（１箱）	０箱	１箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理に伴い、Ａ・Ｂランク遺物を抽出したため、出土時より１箱多くなっている。

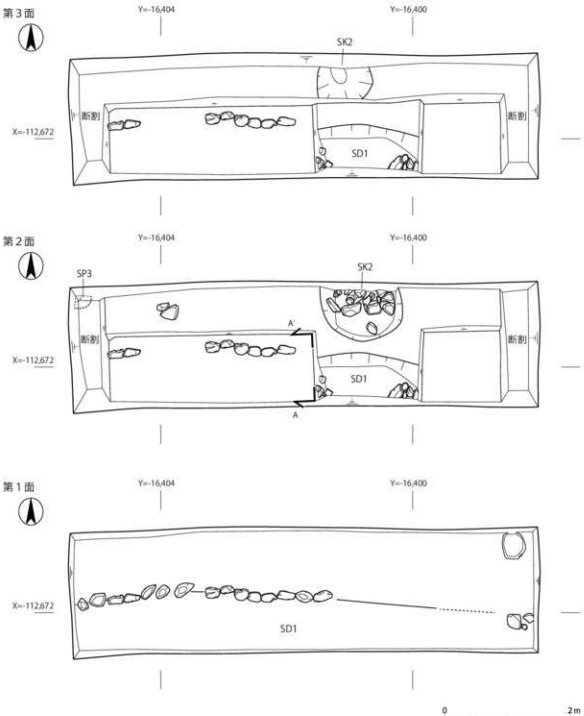


図７　各遺構面平面図（１：60）

1　10YR3/3暗褐色砂泥
2　10YR4/1褐灰色泥土
3　10YR4/2灰黄褐色砂泥
4　10YR2/2黒褐色砂泥

図８　SD１断面図（１：40）

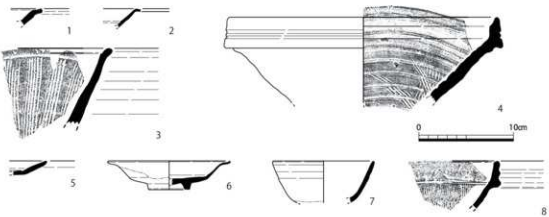


図９　出土遺物実測図（１：４）

３は信楽産の焼締陶器で擂鉢である。擂目は６条１単位であり、16世紀末から17世紀前半頃のものであろう。４は備前産焼締陶器の擂鉢であり、16世紀後半から17世紀前半の所産である。SD１出土遺物は総体として17世紀前半頃までに帰属している。

５～８はSD１よりも北側で第１面を構成する灰黄褐色砂泥層を掘り下げる際に出土した。５は土師器皿Sで、12段階頃のものである。６は唐津産施釉陶器の溝縁皿であり、見込に砂目が残る。７は唐津産施釉陶器の椀である。８は信楽産焼締陶器で擂鉢である。密に擂目を施している。遺物には年代幅があり、17世紀中頃から後半に属する。遺物の年代観はSD１が相対的に古くなり、堆積状況を逆転する。SD１がある時期に掘り直された可能性を示唆するものか。

５．まとめ

山科本願寺南殿跡の遺跡範囲は光照寺所蔵の『御在世山水御亭図』に描かれた南殿の形態を現存遺構に合うように縮尺・方位を合わせたものであり、土塁や庭園など、諸施設の位置関係や相対的な距離は絵図に描かれたままである。しかし、遺跡範囲を実地において確認すると、現況地割や地形とは合わない箇所が多い。近年の発掘調査で、音羽伊勢宿町を囲む道路に沿って、溝が検出されていることや、光照寺の寺域北端の土塁状の高まりが南殿遺構である可能性があることなどを合わせ考えれば、音羽伊勢宿町の町域こそが

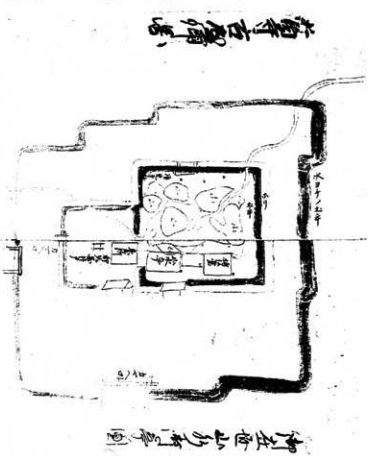


図10 『御在世山水御亭図』（光照寺所蔵・上が北）

南殿の範囲となる可能性がある。平成28年度に実施した発掘調査の報告書では、音羽伊勢宿町を南殿の範囲とした復元案を提示している[4]。

今回の調査地は、新復元案において山科本願寺南殿の西端に位置している。『御在世山水御亭図』では南殿の周囲は、「水ヨケノドヰ」すなわち土塁で囲まれ、さらに西と南には「カマヘ口」という鳥居状の構造物が描かれている。「カマヘ口」は門のような施設であったことが推測される。調査開始前にはこれら囲郭施設の検出を想定していたため、外郭想定線に直交する方向に調査区を設けた。結果として、今回の調査区内では堀や土塁の痕跡は検出できなかった。調査区西端から敷地西端までは若干の距離があり、この間あるいは西側道路付近に囲郭施設が存在した可能性は排除できないものの、南殿西辺ラインの確定は持ち越しとなった。調査区北西端で検出した柱穴SP３は山科本願寺南殿に伴う遺構である可能性もあるが、確定はできない。

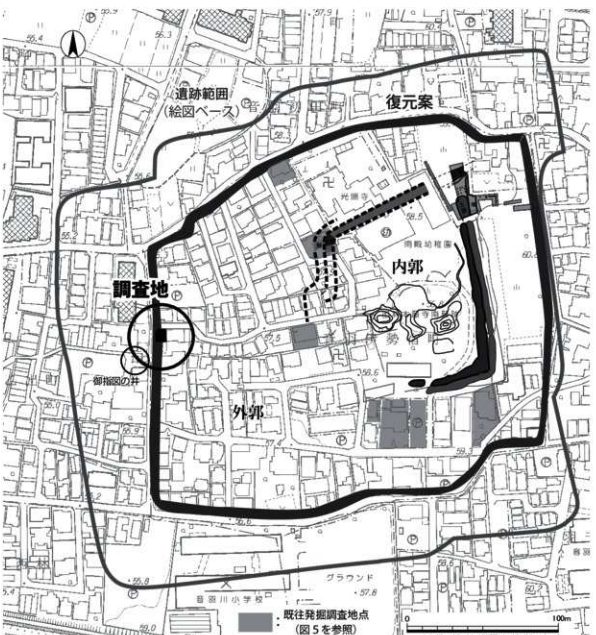


図11　山科本願寺南殿跡復元図（1：2,500）

また、今回検出した遺構から、山科本願寺及び南殿の廃絶後、この地点では少なくとも17世紀には土地利用が再開されたことが分かった。旧地の管理や土地利用がいかに進んだのかを探る手がかりとなる。

今後、さらなる情報の収集をおこない、山科本願寺南殿跡の正確な範囲把握を進めたい。

（新田和央）

註

1）吉井克信「蓮如隠居所南殿と光照寺」『戦国の寺・城・まち―山科本願寺と寺内町』、山科本願寺・寺内町研究会、1998年。

2）なお、平成19年の遺跡地図改訂よりも前には、おおむね音羽伊勢宿町の範囲が「山科本願寺南殿跡」の範囲であった。

3）かつてこの地域の住人が行基に水を与えなかったことから、井戸水が出なくなったが、蓮如が指示して井戸を掘らせたところ、水が出て、この地域唯一の用水となった、との伝承を持つ。井戸が南殿「内」にあったかどうかは不詳であり、これが南殿の外側になるような復元で矛盾が生じる訳ではない。

4）赤松佳奈「Ⅲ　山科本願寺南殿跡」『平成28年度京都市内遺跡発掘調査報告書』、京都市文化市民局、2017年。

Ⅷ　伏見城跡

1．調査経過

調査地は、伏見区桃山町下野41に所在し、明治天皇陵への参道から桓武天皇陵へ向かう参道の西側、治部池の南西にあたり、周知の埋蔵文化財包蔵地「伏見城跡」に該当する（図1）。対象地は財務省近畿財務事務所の管理地であるが、近年、当該地が民間への売却予定地になったことで、財務省近畿地方整備局と協議の上、文化庁国庫補助事業による遺跡発掘事前総合調査を行うこととなった。対象地の敷地形状は、南北に長く、逆L字のような形状で、巨木や雑木、竹が覆い茂る。敷地内を歩くと、近世から近代の瓦片や陶磁器片などを確認することができる。敷地内での比高は約12ｍあり、西から東、北から南へと下がる。一番高い西側に一部平坦面があり、この他、大小の段差と小さな平坦面が存在する地形である。このため、段差など地形の変換点を中心に東西方向の調査区を3箇所、南北方向の調査区を1箇所の計4箇所の調査区を設定した。また当該地は生活道路に接道している範囲が狭小で、調査区まで安全に通行することが困難であったため、宮内庁の協力を得て、宮内庁管理地内の一部を通行し、調査を行った。調査後は、土嚢などで養生して、埋め戻しを行った。調査期間は令和4年8月29日から10月5日、調査面積は56㎡である。なお調査期間中は、大学生ボランティアを随時、受け入れた。

図1　調査地位置図（1：10,000）

図２　３区重機掘削風景（南東から）

図３　３区ボランティア受け入れ風景（北東から）

図４　４区重機掘削風景（南東から）

図５　４区作業風景（東から）

図６　４区石材調査風景（東から）

図７　記者発表風景（南西から）

図８　４区土嚢養生風景（南西から）

図９　４区埋戻し風景（南東から）

2．遺　跡

（1）地理的環境と歴史的環境

調査地は、京都盆地の東側を画する東山の南端、桃山丘陵の南西の頂上部にあたり、大阪層群上部層が分布し、標高は約80ｍである。この丘陵の西側にある緩斜面には所々に平坦部分が存在しており、伏見城築城の造成時に地形が大きく改変された際の名残りと考えられている。この地形改変により、調査地周辺では室町時代以前の痕跡を確認することは少ないが、古くは縄文土器の散布地である金森出雲遺跡や古墳時代の桃山古墳群（永井久太郎古墳）、奈良時代前期の瓦が確認されている御香宮廃寺などが想定されている[1]。また、丘陵の裾付近では、室町時代の濠や土塁状の高まり、柱穴、井戸なども確認されるなど[2]、部分的ではあるが伏見城築城以前の痕跡を確認でき、当時の様子を知ることができる。文献上では、平安時代後半になると橘俊綱による伏見殿が建立された後に皇室御領となる伏見荘が形成されるなど、風光明媚な土地であったことも知られている。

伏見城は、慶長の大地震後、伏見山（木幡山）に豊臣秀吉により築城された城である。大規模な曲輪群や武家屋敷群、町家などの周囲に惣構をめぐらせており、その範囲は、東西約3.3km、南北約2.2kmにおよぶ。秀吉は晩年をこの城で過ごし、慶長３年（1598）に生涯を閉じる。その後、慶長４年（1599）に徳川家康が入城する。慶長５年（1600）の関ヶ原の戦いの前哨戦で主要な建物は焼失するが、同年の関ヶ原の戦いで勝利をおさめた徳川家康により、翌年（1601）には同じ場所に伏見城の再建が始められ、慶長８年（1603）には征夷大将軍宣下をこの城で受けている。慶長20年（1615）の大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡し、二条城が造営されたことから伏見城は城郭としての役割を終え、元和９年（1623）の徳川家光の三代将軍宣下を最後に廃城となる。廃城の際、その遺材の一部は大坂城、淀城、二条城、本願寺唐門の修築などに使用されたと伝えられる。その後、奉行所などの一部機関を残し、江戸に拠点が移され、周辺の武家屋敷もその役目を終えることとなる。廃城以前の伏見城は、公儀の拠点、公儀の城、武家の棟梁の城として位置づけられ、政治の中心的存在であった。この後、伏見奉行所の管理下におかれ、明治に入ってからは桃山官林として管理された後、桃山陵墓地となった。陵墓造営以外の伏見城中枢部に大規模な改変が少なく、廃城時の様子がよく残っている。

（2）周辺の調査

調査地は、桃山城運動公園の南西に位置する。明治天皇陵から桓武天皇陵へ向かう現参道の西側にあたり、陵墓地に隣接する。現在も陵墓地内には「治部池」が存在しており、この池は伏見城下の大名屋敷配置を記した『伏見御城郭並武家屋敷取之絵図』（京都市所蔵）や『伏見城御城図』（中井家所蔵）では、西の丸の西、石田治部少輔囲の北に描かれている水濠の名残である。また対象地及び対象地西側の住宅地は現在も「桃山町下野」と住所表記が残っており、絵図上の「下野様」と記されている部分であると想定できる（図10）。今回の対象地は北西部に一部平坦面があるが、東側の現参道に向かい、いくつかの段差が認められる。対象地内の標高は65～80ｍと高低差が大き

く、比高は10～12mにもなる。絵図上ではややスケール感が異なるが、武家屋敷である「下野様」の屋敷地の東辺に描かれる南北方向の石垣と南辺に描かれる東西方向の石垣が想定できる。

推定屋敷跡地内[3]では、これまで多数の調査が行われている（図11・表1）が、GL-0.2～-0.65mで造成土や地山を確認するのみである。この造成土については遺物が出土せず時期を示すことはできないが、伏見城期の造成土である可能性は高い。屋敷地境界推定地付近では、武家屋敷の西側の石垣に関する調査が多く、調査１・２・５では西面を向く南北方向の石垣や裏込め、焼土層、暗

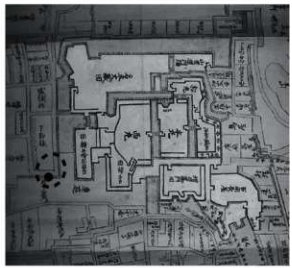


図10 『伏見御城郭並武家屋敷取之絵図』
（京都市所蔵）が今回の調査範囲、●が4区

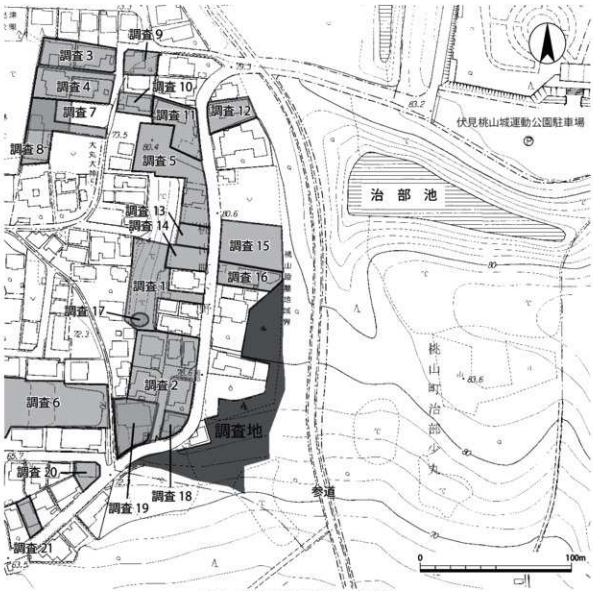


図11 既存周辺調査図（1：2,500）

表1　周辺調査一覧表

調査No.	調査区分	検出遺構	出土遺物	出典	備考
1	発掘	南北方向の石垣、礎土壇、根石設置痕、石敷場跡排水溝、遺構、石敷遺構など	土師器、陶磁器、瓦、金属製品	『伏見城跡　京都市伏見区桃山町下野27-1の発掘調査』株式会社四門	豊臣期石垣：砂岩、ホルンフェルス、黒雲～粘板岩など、火℃なし、徳川期裏込め：チャート、黒雲～粘板岩、砂岩
2	発掘	南北方向の石垣、裏込め、石段石材、南北方向の石列遺構を確認。	不明	『聚五錦帯　其の二　伏見城』伏見城研究会	2006	
3	試掘	表土下20cm近世灰層、下層は青灰色砂質の無遺物層。遺構の検出なし。	なし	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告　昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター・財団法人京都市埋蔵文化財研究所　一覧表	1981 80F0004
4	試掘	表土下40cm近世灰層、下層は青褐色砂質の無遺物層。遺構の検出なし。	なし	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告　昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター・財団法人京都市埋蔵文化財研究所　一覧表	1981 80F0012
5	試掘	南北方向の石垣1・2、礎土壇、南北方向の石列遺	丸・平瓦、土師器細片	『京都市内遺跡試掘調査報告　平成7年度』京都市文化市民局　触媒	1996 石垣2：花崗岩の切石、矢穴・整形なし。
6	試掘	斜面地を削り出し、平坦面を造成。	なし	『京都市内遺跡試掘調査報告　平成23年度』　京都市文化市民局　一覧表No.82	2012 11F292
7	詳細分布	盛土のみ。	なし	『京都市内遺跡試掘立会調査報告　昭和58年度』京都市文化財保護課・財団法人京都市埋蔵文化財研究所　一覧表	1984 83F0015
8	詳細分布	盛土のみ。	なし	『京都市内遺跡試掘立会調査報告　昭和59年度』京都市文化財保護課・財団法人京都市埋蔵文化財研究所　一覧表	1985 84F0005
9	詳細分布	GL-0.67～-0.82mまで明黄褐色粘砂。	なし	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和3年度』京都市文化市民局　一覧表	2022 21F0384
10	詳細分布	GL-0.15mまで盛土。	なし	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和3年度』京都市文化市民局　一覧表	2022 20F0517
11	詳細分布	GL-0.3mまで現代盛土。	なし	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成16年度』京都市文化市民局　一覧表	2005 04F0210
12	詳細分布	GL-0.65mで造成土か？	なし	『京都市内遺跡試掘立会調査報告　昭和63年度』京都市文化財課局　一覧表	1989 88F0013
13	詳細分布	BM-0.87mで褐色砂足を検出。遺構・遺物は検出できず。	なし	『京都市内遺跡詳細分布報告書　平成21年』　京都市文化市民局　一覧表	2010 09F0207
14	詳細分布	№1：-0.28mで褐色砂足を検出。№2：-1.1mで黄褐色足砂を検出。遺構・遺物は検出できず。	なし	『京都市内遺跡詳細分布報告書　平成23年』　京都市文化市民局　一覧表	2012 10F0396
15	詳細分布	GL-0.13mまで盛土で、-0.3mまで固く締まる明赤褐色粘質土。	なし	『京都市内遺跡詳細分布報告書　平成27年』　京都市文化市民局　一覧表	2016 14F0390
16	詳細分布	GL-0.27mで明褐色砂質土、-0.46mで明黄褐色シルト（洪積世と真世ホシトプロック含む）、-0.59mで黄褐色細砂を引き落とみ、土師器を検出。	なし	『京都市内遺跡詳細分布報告書　平成29年』　京都市文化市民局　一覧表	2018 17F0426
17	詳細分布	松平下野守屋敷西端石垣と入口となる階段を確認。	瓦、青磁碗、三階壺	『京都市内遺跡詳細分布報告書　平成30年度』京都市文化市民局　V-5伏見城跡	2019 17F0570：表1-1 発掘調査報告書17番目
18	詳細分布	GL-0.18mで明色砂礫の地獄下明褐地層、-0.51～-0.84mで仁に小～黄色黄砂～粘土の地山。	なし	『京都市内遺跡詳細分布報告書　令和元年』　京都市文化市民局　一覧表	2020 18F0595
19	詳細分布	GL-0.13mで整地層、-0.3m以下、明黄褐色粘土の無遺物層。	なし	『京都市内遺跡詳細分布報告書　平成9年度』京都市文化市民局　一覧表	1998 97F0096
20	詳細分布	GL-0.7～-1.0mで淡黄灰色粘土の地山、-1.9～2.15mで赤褐色砂礫の地山を確認。	なし	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告　昭和54年度』京都市埋蔵文化財調査センター・財団法人京都市埋蔵文化財研究所　一覧表	1980 79F0197
21	詳細分布	GL-1.75mで黄褐色足砂を検出。	なし	『京都市内遺跡詳細分布報告書　平成14年度』京都市文化市民局　一覧表	2003 02F0147

巣排水施設、調査17では石垣に取りつく石階段と焼土層が確認されている。南北方向の石垣は2箇所確認されており、石垣の様相や焼土層との関係性から、伏見城築城当初の石垣と関ヶ原の戦いの前哨戦後の修復工事に伴う石垣がならんでいる。

註

1）「104　丹波橋」『京都市遺跡地図　平成26年度版』京都市、2016年。
　『史料　京都の歴史』第16巻　伏見区　京都市、1991年。

2）「伏見城跡」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1994年。
　「伏見城跡」『京都府中世城館跡調査報告書第3冊　－山城編1－』京都府教育委員会、2015年。

3）『伏見御城郭並屋敷取之絵図』より想定した範囲。

表2　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
伏見城期	石垣、造成土	
伏見城廃絶後	石垣崩落土	

3．遺　構

調査地は、伏見城中枢部の西側にあたり、中枢部と武家屋敷地を限る南北方向の石垣と、この石垣の延長にあたる南辺に東西方向の石垣が想定される場所である。このことから、調査は南北方向及び東西方向の石垣及び武家屋敷地内の様相を把握することを主目的とした。1・3区は南北方向の石垣、2区は武家屋敷地内の様相、4区は東西方向の石垣を想定し、調査区を設けた。

図12　調査区配置図（1：2,000）

1区

敷地内で西から東に向う水路代わりの約1ｍの段差に沿って調査区を設定した。この段差の東側は宮内庁管理地にまでのび、50～80㎝程の石が点々と確認できる。このため、宮内庁の協力を得て、1区の南壁断面に続く形で、地表面および断面を清掃し、表面観察を行った（図13・図版17-2）。観察からは、これらの石材は原位置をとどめている可能性は低いと考えられる。次に、地表面に堆積していた枯葉などを除去し、近現代の水路を中心に調査区を整え、周壁の断面観察を行った。基本層序は、褐灰色粘質土（図13-3・4層）の下、橙色粘質土やにぶい橙色粘質土（図13-5～9層）の西から東へのゆるい傾斜の堆積があり黄橙色粘質土、明黄褐色砂質土や（図13-10・11層）の水平に近い堆積を挟み、にぶい橙色粘質土や砂の多い橙色粘質土、灰白色粘質土が混在する黄橙色粘質土（図13-12～24層）が西から東へ傾斜する堆積の、大きく4つに区分できる。いずれの層も近代以降の再堆積とは考えにくく、伏見城期の造成土と判断した。明確な地山は確認できなかった。近現代の水路痕跡と考えられる（図13-1・2層）からは、人頭大の石材や平瓦、丸瓦片、桟瓦や瓶片、ビニールなどを確認した。

2区

敷地内で最も高い平坦部の南側に調査区を設定した。調査区の大半が近現代の撹乱を受けている。基本層序は、表土の下、現代盛土を挟み、GL-0.4～-0.5ｍで橙色粘土ブロックが混じる橙色砂質土（図14-3層）、橙色砂質土（図14-4層）、明褐灰色粘土ブロックが混じる橙色粘土（図14-5層）、橙色粘質土（図14-6層）、明褐色砂質土（図14-7層）の造成土を確認した。明確な地山は確認できなかった。3層上面（標高79.2～79.5ｍ）にて遺構検出を行ったが、遺構は確認できなかった。また、造成土からは遺物は確認できなかった。近現代の撹乱からは、「昭和二十九年」の10円玉のほか、平瓦片を確認した。

3区

敷地内で最も高い平坦部の東側斜面地に調査区を設定した。基本層序は、表土の下、東裾は明褐色粘質土（図13-1層）にて撹乱を受けているが、橙色粘質土（図13-2層）、にぶい黄橙色粘質土（図13-3層）、灰白色粘土ブロックの混じるにぶい橙色粘質土（図13-4層）などが水平に近いも

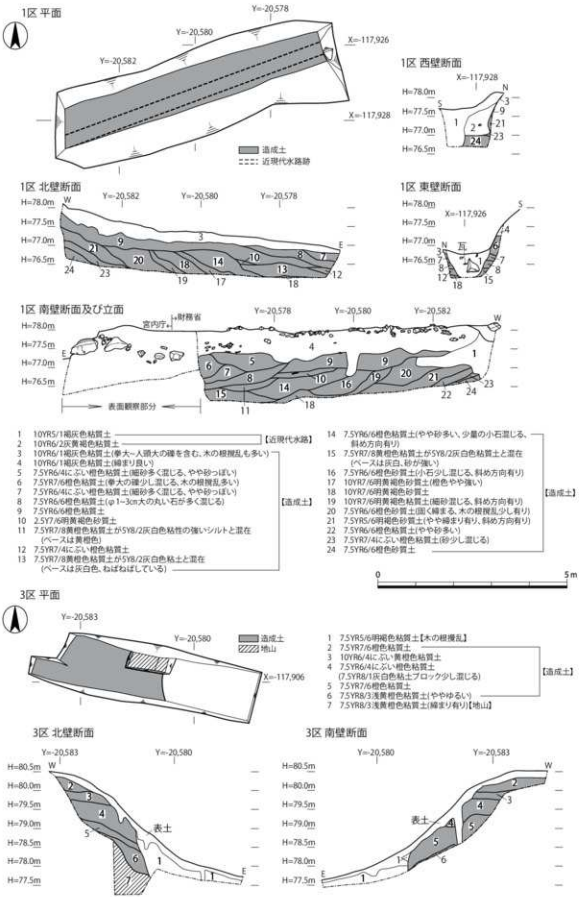


図13　1・3区平・断面図（1：100）

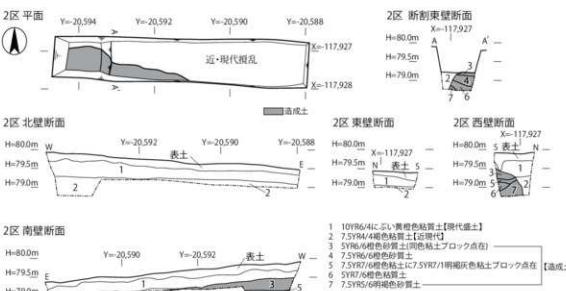


図14　2区平・断面図（1：100）

のの、西から東に緩やかに堆積する。遺物は4層から平瓦の細片が出土したのみである。いずれも造成土と考えられる。GL-1.6～-2.15mで浅黄橙色粘質土（図13-7層）の地山に至る。

1～3区では、表土直下で伏見城期と考えられる造成土を確認した。この造成土は調査地周辺の地山と土の様子が類似していたが、積む単位や方向、土の選定、締まり具合などから造成土であると判断した。武家屋敷が想定できる部分ではあるが、造成土以外の目立った遺構を確認することはできなかった[4]。また、南北方向の石垣に直接関連する遺構も確認できなかった。これらのことから、南北方向の石垣は、今回の調査対象範囲より東側に存在する可能性が高まった。

4区

敷地内の南側に東西方向の傾斜変換点に沿って調査区を設定した。表土直下で伏見城に伴う造成土のほか、東西方向の石垣や裏込めの石、崩落石などを確認した。なお石垣の最下段の状況、根石と据え付けの様子を確認するため、石垣前面に断割を設けた（断割1）。また石垣と裏込めの様相を確認するために石垣後部にもの断割を設けた（断割2）。

基本層序は、表土以下、GL-0.1mで拳の大礫が含まれるにぶい黄橙色粘質土（図17-4区西壁-1層）、-0.3～-0.4mで明黄褐色粘質土（図17-4区西壁2層）、-0.45～-0.5mで石垣石や裏込めである拳大礫が多量に混じる橙色粘質土（図17-4区西壁3層）、-0.8mで瓦細片が混じる橙色粘質シルト（図18-4区断割1-2層）に至る。橙色粘質シルトは非常に締まっていたため、この上面を遺構面として検出を行い、東西方向の石垣を確認した。遺構面の標高は石垣前面で65.45m、南壁沿いで65.2mと北から南に緩やかに傾斜している。焼土層などは確認できなかった。

石垣　検出した石垣は、高さ1.8m、幅7.0mで、最も遺存していた部分は4段である。残存石垣は30石、石垣の前面では10石の崩落した石垣石を確認した。石垣の傾斜角は67°である（図18）。石垣の積石一石の大きさは、小口が35～50cmと60～75cmに区分でき、奥行きは60～70cmが多く、最も長いのは95cmである。岩石名は、石英斑岩が25石（60%）、花崗斑岩が11石

図15　4区平面図（1：50）

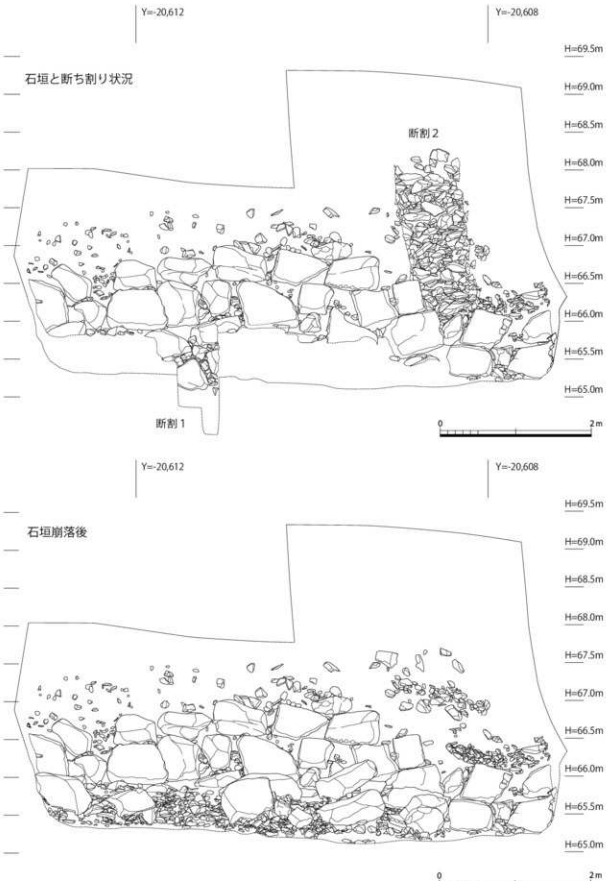


図16　4区立面図（1：50）

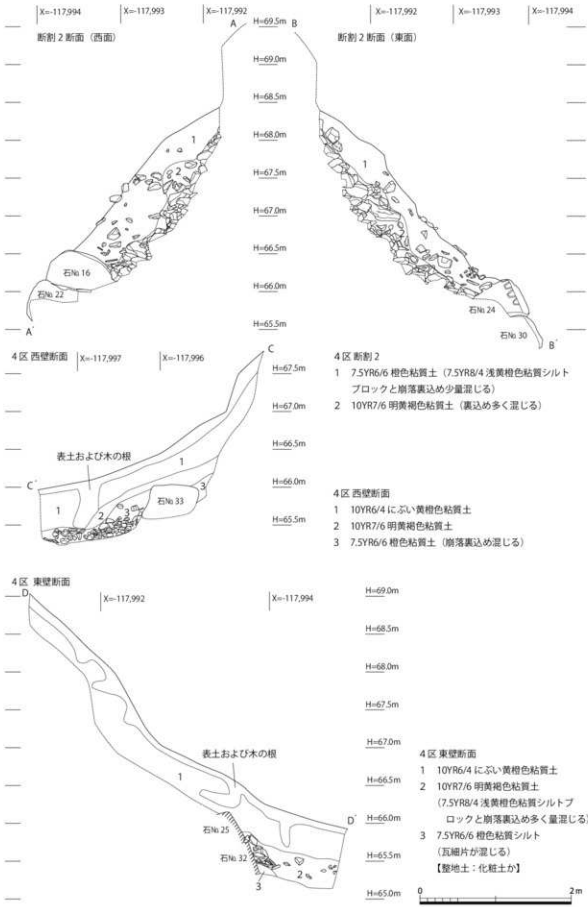


図17　４区調査区壁及び断割２断面図（１：50）

図18　4区断割 1 断面及び石垣エレベーション図（1：50）

(26%)、チャートが1石（2%）、泥質砂岩が1石（2%）、頁岩～粘板岩が4石（10%）であった（図19、表3）[5]。自然石と割石で構成されている。正面からの観察では、やや崩れているが布積みの要素がみてとれる。4石（図19の石№.5・21・24・31）の矢穴痕跡が確認でき、幅9～10cmと14～15cmの2種類が確認できる。特に№.24は3辺に矢穴痕跡が確認でき、回転技法が用いられていたことがわかる[6]。また石№.7には2～3cm幅の小さなはつり痕跡が確認できた。なお、墨書や刻印などは確認できなかった。間詰石は、頁岩～粘板岩を主に利用しているようだが、確認できる部分は少ない。断割1で確認した石垣最下部（石№.28・29周辺）では、頁岩～粘板岩のみで丁寧に間詰めされている状況が確認できた。このため当初は頁岩～粘板岩の間詰石が全面に施されていたと考えられ、当初あった間詰石は、破城の一環として抜き取られた可能性や廃絶後、後世に石垣石の再利用に伴い、抜き取られた可能性が考えられる。なお石垣の前面には崩落したと思われる積石や裏込めが多数確認できる。

断割1（図18） 遺構面である瓦細片が混じる橙色粘質シルト（図18-2層）上面から、GL-0.9mまで断割を行った結果、-0.8m（標高64.4m）で灰白色シルト（図18-10層）の地山を確認した。この地山の上面に、細砂が少量混じる浅黄橙色粘土ブロック（図18-9層）、灰白色粘土小ブロックの混じる淡橙色粘質土（図18-8層）、細砂と灰白色粘土大ブロックの混じる淡橙色粘質土（図18-7層）を積み上げている。その後、石垣前面を東側に斜めに掘り込み、瓦片や小礫が混じる明褐色砂質土（図18-4～6層）を3回に分けて斜めに積む。この後、根石据え付けの溝状の掘り込みを行い、根石を据え、埋戻し、根石設置部分も含めた石垣前面を厚さ8～10cmの瓦細片が混じる橙色粘質シルトで覆い、遺構面を形成している。石垣前面に斜め方向の細砂や礫を含む砂質土を選定しており、排水のための工夫と考えられる。また地山上面は鉄分沈着のため黄茶色に変色して、水が通っていたと考えられる。堆積土中に焼土は確認できなかった。

断割2（図17） 表土以下、GL-0.1mでにぶい黄橙色粘質土、-0.5mで浅黄橙色粘質シルトブロックを含む明黄褐色粘質土の下、-0.4～-0.6mで裏込めを確認した。裏込め上面の明黄褐色粘質土（図17-断割2-2層）には拳大の礫が混じっており、石垣石が崩落した後に堆積したと考えられる。堆積土には混入も含め焼土は確認できなかった。裏込めは、拳大から人頭大程の頁岩～粘板岩が主体で、河原石はほとんど認められなかった。確認できた頁岩～粘板岩には、割れ口が新しく、砕石場から割り出して得たものや、表面が少し風化しているもの、角に少し丸みがあるものなどが確認でき、多様な入手経路が想定できる。このことから、裏込めの石材については、選定が行われた結果、頁岩～粘板岩が使用されているものと考える。また、断割を行っていない部分でも、裏込め上部に堆積している明黄褐色粘質土に混じる礫はいずれも裏込めと同じ頁岩～粘板岩であることから、断割2にて確認したような頁岩～粘板岩の裏込めが、断割範囲外にも続くものと考えられる。裏込めを確認できた標高68.3m（当時の生活面からは2.5m以上（根石から約2.8m））の高さまで石垣が施工されていたと考えられ、7～8段以上の石垣が施工されていたことが想定できる。確認した石垣や構築土内に伴う遺物は乏しく、石垣の構築年代を遺物から断定することは難しい。

表3　4区石垣の石材観察表

No.	岩石名	大きさ(cm) 長径	中径	短径	円磨度	風化度	その他	備考
1	石英斑岩	55	20+	25	0.4	弱風化		
2	石英斑岩	60	35+	35	0.1～0.2	弱風化		
3	石英斑岩	75	20+	20	0.2	新鮮ないし弱風化		
4	石英斑岩	75	35+	35	0.4	弱風化	たまねぎ状風化	
5	花崗斑岩	75	45	20+	0.1	弱風化		
6	配置砂岩	50	35	25	0.5	新鮮	河床礫アリ	
7	石英斑岩	80	55	30+	0.1～0.2	新鮮		
8	チャート	40+	55+	50	0.1～0.2	新鮮	石英脈多い	
9	石英斑岩	60	30	20	0.4～0.5	新鮮	たまねぎ状風化	
10	石英斑岩	75	50	20+	0.1～0.2	新鮮ないし弱風化		
11	石英斑岩	75	55	35	0.3	弱風化		
12	石英斑岩	50+	30+	30+	0.3～0.4	弱風化		
13	石英斑岩	85	65	40+	0.3	弱風化	たまねぎ状風化	
14	花崗斑岩	20+	35	35	0.2～0.3	弱風化	たまねぎ状風化	
15	石英斑岩	60	50	50	0.1～0.2	弱風化		
16	花崗斑岩	95	50	35	0.1～0.2	新鮮	人為的割れアリ	
17	石英斑岩	70	50	35	0.2～0.3	弱風化	たまねぎ状風化	
18	石英斑岩	60	25+	30	0.2	弱風化		
19	頁岩～粘板岩	60	35	20	0.5	新鮮?		間詰石
20	石英斑岩	45+	30+	20	0.3	新鮮		
21	花崗斑岩	85	60	35	0.2～0.3	新鮮		
22	花崗斑岩	70	50	55	0.1～0.2	新鮮	石英斑岩的特徴アリ	
23	石英斑岩	75	35	25	0.3	弱風化		
24	花崗斑岩	75	60	55	0.2	新鮮	石英、斜長石、矢穴多数	
25	石英斑岩	45+	20+	35	0.2ぐらい	弱風化	たまねぎ状風化、つぶが細かい	
26	花崗斑岩	50+	45	25	0.1	新鮮		
27	頁岩～粘板岩	40	25	10	0.4	新鮮		間詰石
28	石英斑岩	40+	30	20+	0.6	弱風化		
29	石英斑岩	104	45	40	0.1～0.2	新鮮		
30	花崗斑岩	65	45	25	0.1	新鮮	石英、斜長石、黒雲母アリ	
31	頁岩～粘板岩	40+	25	20	0.2～0.3	新鮮～弱風化		間詰石
32	花崗斑岩	70+	50	25+	0.1	新鮮		
33	石英斑岩	105	55	40	0.1～0.2	新鮮～弱風化	たまねぎ状風化	崩落石
34	石英斑岩	75	60	30	0.1	新鮮	石英、カリ長石やや小さい	崩落石
35	石英斑岩	75	70	25	0.1～0.2	弱風化	カリ長石風化消失	崩落石
36	石英斑岩	120	55	30	0.3	弱風化		崩落石
37	花崗斑岩	85	55	25	0.2	新鮮		崩落石
38	石英斑岩	90	65	45	0.1～0.2	弱風化		崩落石
39	頁岩～粘板岩	130	40	25	0.1～0.2	新鮮	人為的割れアリ	崩落石
40	石英斑岩	80	45	40	0.2～0.3	弱風化	人為的割れ、たまねぎ状風化	崩落石
41	石英斑岩	70	50	40	0.5	新鮮	たまねぎ状風化、つぶが細かい	崩落石
42	花崗斑岩	75	70	35	0.1	新鮮		崩落石
43	頁岩～粘板岩	10～40			0.1～0.2		砂岩、河床礫時々	裏込め

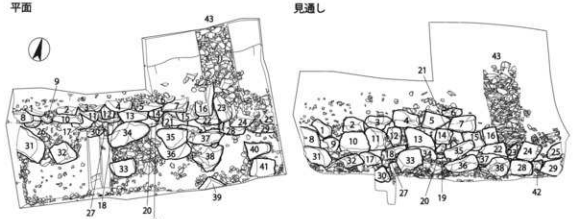


図19　4区石垣の石材No.分布模式図

4．遺　物

今回の調査では、伏見城期の造成土や崩落土などを中心に遺物が３箱出土しているが、その量は少なく、また細片で図化できるものは少ない。以下に図化できたものを報告する。

１は１区の造成土から出土した。天目椀の口縁部である。

２～６は４区の石垣前面にある崩落土内から出土した。２は炮烙である。口縁部は短く立ち上がり、煤が付着している。３は肥前青磁染付の椀で、内面見込みには五弁花、底部見込みには方形枠

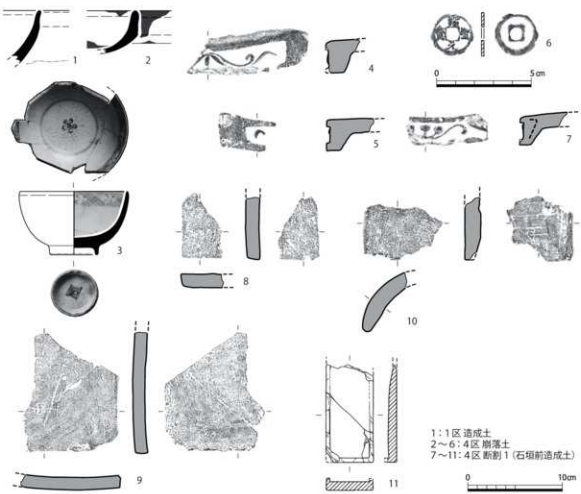


図20　出土遺物実測図及び拓影（１：４、６のみ１：２）

表４　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
伏見城期	施釉陶器、瓦、石製品		陶器１点、軒平瓦２点、平瓦２点、丸瓦１点、石製品１点	０箱	３箱
伏見城廃絶後	土師器、陶磁器、瓦、銭貨など		土師器１点、陶磁器１点、軒平瓦１点、銭貨１点		
合　計		４箱	11点（１箱）	０箱	３箱

※コンテナ箱数の合計は、Aランクの遺物の抽出などの整理を行ったため、出土時より１箱多くなっている。

内に何重もの円が書かれる。広瀬向窯産で、18世紀後半と考えられる。4・5は軒平瓦である。4は中心飾りに下向きの三葉文とともに唐草文が施される。5は唐草文の一部が確認できる。6は北宋銭の「紹聖元寶」である。

7～11は4区の断割1から出土した。7～10は4～6層、11は2層より出土している。7は軒平瓦である。中心飾りは上向きの菊文とともに、唐草文が施される。8・9は平瓦、10は丸瓦である。11は硯で、石材は粘板岩である。

5．まとめ

今回の調査では、伏見城期の造成土や石垣を確認した。ただ本調査範囲では、石垣構築の時期を断定する程の遺物は得られず、また石垣が焼けた痕跡や焼土のほか、石垣構築土内にも焼土や炭化物など、これまで確認されてきたような前哨戦の痕跡も確認できなかった。

調査地を含む範囲は、絵図から城中枢部と武家屋敷との境界にあたる範囲にあたり、その武家屋敷範囲には「下野様」の記述が確認できる。特に4区にて確認した東西方向の石垣は、この武家屋敷の南辺の石垣であると想定できる。これまで絵図にて石垣が想定されていたものの、今回の調査で初めて、その存在を明らかにでき、絵図のように南辺に石垣が施工されていたことが確実となった。また検出した石垣は上部が破壊され、上部に積んであったであろう石垣石が裏込めとともに石垣前面に堆積しており、廃城時の様子もよくわかる。

「下野様」の屋敷地想定範囲の西辺は、現状も10m以上も高低差のある南北方向の段差が存在する地形が確認でき、この段差部分では、これまでの調査で南北方向の石垣が確認されている。昭和2年（1927）及び平成26年（2014）の地形図と今調査地を重ね合わせ（図21・22）[7]、調査成果を考慮すると、現在も確認できる南辺の段差部分にも石垣が続くことが想定できる。また武家屋敷範囲の東辺の石垣については、今回の調査範囲内では確認できず、調査範囲外に想定することとなる。

確認した石垣は伏見城の中枢部に近接しており、この場所で石垣を確認できたことは大きな成果だといえる。現在、伏見城の中枢部はそのほとんどが、桃山陵墓地として宮内庁の管理地になっており、広範囲にわたり遺跡の保護が図られている。これまで陵墓地内では、当市と京都府が中世城館調査[8]の一環で、宮内庁書陵部桃山監区事務所の協力を得て、踏査や表面観察を行うほか、小規模掘削に伴う調査を当市と宮内庁書陵部と協同で行っている。また2010～2014年には大阪歴史学会が立ち入り調査[9]を行うなど、伏見城中枢部の調査は着実に積み重ねられている。しかし掘削を伴う調査の機会は、極めて稀であり、今回の調査は伏見城中枢部付近の石垣構築技術や中枢部と武家屋敷とを限る境界施設の状況を具体的に示す貴重な資料である。

（奥井智子）

註

4）伏見城下の想定前田屋敷跡内での発掘調査（2016）で、斜め方向の造成土の上面に、10～20cmの小礫を含む赤褐色粘質土を厚さ10～20cmで覆い、さらにその上面に約0.05～0.1mの厚さで細砂や粘

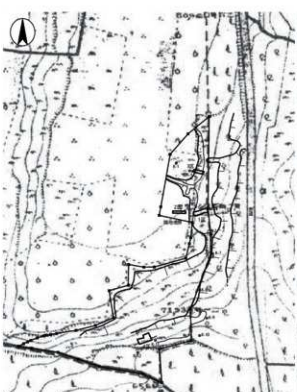


図21　昭和２年地形図と調査地（1：2,000）

図22　平成26年撮影空中レーザー測量図と調査地（1：2,000）

土を敷き、伏見城期の遺構が展開している。今回確認した造成土は、斜め方向の堆積のみであることから、本来の遺構面が削平されている可能性が高く、そのため、今回の調査範囲では武家屋敷に伴う遺構が確認できなかったと考えられる。「Ⅸ　伏見城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告書　平成27年度』京都市文化市民局、2016年。

5）石材は、現地にて橋本清一氏に測定・観察とご教示を得て、図19・表3にまとめた。また同氏より、「４区の石垣石材は、石英斑岩60％、花崗斑岩26％と、この２種類の岩石が全体の86％と圧倒的に多い。周辺の分布地には、大文字山の東から山科盆地北東にかけて南北に伸びて分布する幅広の岩脈と山科盆地北東の山中で、音羽の滝周辺の幾筋にもなるやや幅の狭い連続性の悪い石脈（刻印のある石切の帳場跡がある）が分布するが、採取地の断定にはもう少し検討が必要。頁岩～粘板岩の泥質砂岩、チャートは14％程度である。円摩度、風化度、その他の特徴を考えると丹波帯の堆積岩であるが、山地の谷川、崖錐礫や地山の大阪層群中の礫と推定される。」との見解を頂いた。

6）現地にて森岡秀人氏にご教示を得た。森岡秀人・藤川祐作「矢穴の型式学」『古代学研究』180　古代学協会、2008年。

7）図21：昭和２年（1927）「図版４ 伏見城・城下町跡の基本図（３）１陵墓図」『伏見城跡立入調査報告』大阪歴史学会、2022年を引用。
図22：平成26年（2014）「図版16 空中レーザー測量成果図（５）１空中レーザー測量による北半部陰影図」『伏見城跡立入調査報告』大阪歴史学会、2022年を引用。

8）『京都府中世城館跡調査報告書　第３冊　‐山城編１‐』京都府教育委員会、2014年。

9）『伏見城跡立入調査報告』大阪歴史学会、2022年。

Ⅸ　長岡京右京一条四坊十町跡（第1258次）、石見城跡

1．調査に至る経緯と経過

（1）調査に至る経緯

石見城は、西京区大原野石見町に存在したと推定される中世の平城である[1]。室町時代、桂川の西部一帯は「西岡（にしのおか）」と呼ばれ、幕府被官となった在地の土豪や国人は「西岡被官衆」と称された。被官衆は乙訓地域の各所に居館を築いており、「石見城」もその一つとして数えられている。文献史料によると「石見館」は応仁の乱時に焼失し、その後、廃絶したと推測されるが、今日に至るまでその詳細は不明である[2]。

現在、石見町集落の北東部には東へ張り出す微高地があり、地表に土塁や堀を想起させる凹凸が存在する。平成16年（2004）、集落の東半部で都市計画道路中山石見線建設に先立つ発掘調査が行われ、井戸や門、塀を備えた鎌倉時代から室町時代の屋敷跡が発見された。遺構面はさらに東へ続いており、その東の微高地（張り出し）にも同時期の遺構が展開する可能性が濃厚となった。

令和2年、当課は石見町集落及びその周辺を対象として航空レーザー測量を行い、微地形の詳細把握を試みた。その結果、張り出しの随所に現存する凹凸が人為的な造作である可能性がより高

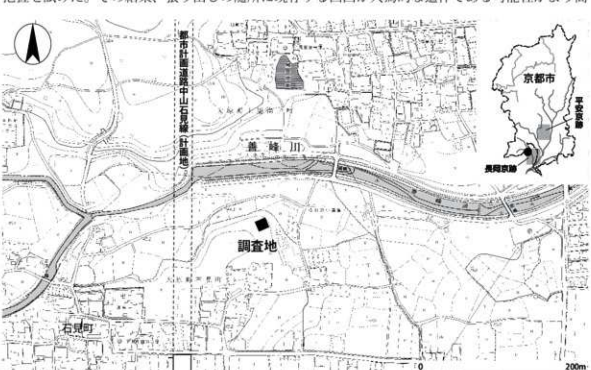


図1　調査位置図（1：5,000）

まった。このため、当課は文化庁及び京都府と協議を行い、数箇年に及ぶ遺跡保存を目的とした範囲確認調査を計画した。令和３年、土地所有者の協力を得られたことにより本発掘調査を実施する運びとなった。本文は、その第１次調査の成果を報告するものである。

（２）調査の経過と調査方法

現地調査は、令和３年11月29日～12月27日のうち13日間実施した。調査区は、当初100㎡の面積を設定したが（第１調査区）、堀状遺構の検出に伴い東方向への拡張が必要と判断し、東西方向の小トレンチを３箇所設定した（追加調査区１～３）。続いて、北辺の高まりの構造を探るため、追加調査区４を設定した。さらに、第１調査区の西壁断面で確認された遺構の性格を確認するため、調査区を一部拡張した（追加調査区５）。また、堀と推測される溝状遺構の延伸方向を探る

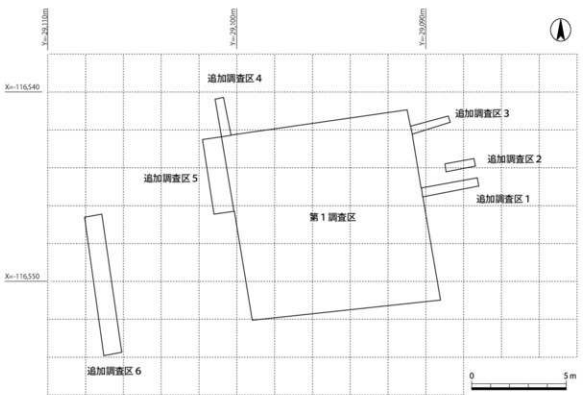


図２　調査区配置図（１：200）

図３　機械掘削作業状況（南西から）

図４　遺構面検出作業状況（南から）

ため、西側にトレンチを設定した（追加調査区６）。以上の一連の拡張により、最終調査面積は125㎡となった。

掘削は、はじめに重機（バックホウ）を用いて表土、盛土、近現代堆積土を除去し、続いて人力掘削を行った。その段階で、室町時代～江戸時代の遺構面を検出した。続いて調査区東西を深掘したところ、地山上面において古墳時代前期の遺構の成立を確認した。このため検出した遺構面は、２面３時期（江戸時代、室町時代、古墳時代前期）となる。なお今回の調査は、遺跡の保存を目的としたものであることから、遺構の掘削は最小限に留め、中世以前の遺構面については下層確認トレンチによる断面観察に留めた。遺構面では、全景写真の撮影や検出遺構の個別写真撮影、平面図の作成、標高値の計測、遺構実測等、一連の記録作業を行った。また、壁断面を図化し、土層堆積の記録を行った。出土遺物は、層序及び遺構ごとに収集し、登録した。なお、12月18日に近隣住民を対象として現地説明会を開催し、計80名の参加を得た。

調査後の整理作業は、現地調査期間中の休工日を含めて１月10日まで実施した。出土遺物の洗浄、選別（抽出）、遺構図の精査、版組、トレースを行い、報告書としての体裁を整えた。今回の作業は本報告の刊行をもって終了した。

２．位置と環境

（１）地理的環境

調査地は、京都西山連峰より流れ出る善峰川の右岸に位置する。善峰川は小河川を集めて東行し、小畑川と合流して南へ進路を変えた後、桂川から淀川へと続く。その作用により周辺では複合扇状地が発達し、北西から南東へ向かって開く地形を呈する。水田は主に河川付近で営まれ、櫛の歯状に残る丘陵地では近世以来の特産である竹栽培が盛んである。また人家は今も段丘上の旧集落付近に集中しており、近代以前に遡る近郊農村の景観を随所に留めている。

８世紀初頭、この地域は山背国乙訓郡の一部となり、大和から丹波へ抜ける丹波道が設置された。これを踏襲する「丹波街道」が現石見町集落の西側を通る。このため当地は、善峰川水運とあわせて水陸交通の結節点であったといえる。また784年の長岡京遷都に際しては、現石見町集落の中央付近に西京極大路（西四坊大路）が設定され、都城の一部として開発が進められた。集落の南に広がる水田地割は方位に即しており、条坊遺構の一端を示すとの指摘がある。

この地域の土壌は石見上里粘土層（大阪層群の一種）と称される砂質粘土を基盤とする。河川周辺ではその上位に河川由来の砂礫と近現代の耕作土が厚く堆積している。なお丘陵上の本来の堆積は薄いが、竹栽培による大規模な段造成が行われた地点も認められる。

（２）歴史的環境

調査地周辺では、大原野石見遺跡内で旧石器時代のナイフ形石器が採集されている。縄文時代、弥生時代の遺跡としては東方に上里遺跡があるが、集落が展開するのは古墳時代以後である。

長岡京期には、前述のとおり大々的な都城開発が行われたと想定される。しかし平安時代になると大原野一帯は王朝貴族の遊猟地となり、仁和3年（887）、「太上天皇遊猟の地」となった。これに先立つ天長年間（824～834）には、愛宕郡栗栖野や紀伊郡木幡野等とともに「禁野」となり、民衆の狩猟活動が禁じられている。ただし往来や伐木は許されていたことから、山林は放置されずに一定の環境保持が図られたものと推測される。

平安時代後期になると乙訓地域一帯で諸権門の荘園開発や売買が活発となり、この地域にも小領主がひしめいた。長久5年（1044）の按察大納言領長岡荘の臨時雑役免除に関する『山城国乙訓郡司解文』や、保安4年（1123）の『山城国富坂荘預解』によると、当地は富坂荘の一部であり、春宮大夫藤原頼宗や橘前司規光の所領が入り組んでいたと考えられる。一方、寛喜元年（1229）には橘前司領が三鈷寺の僧侶証空へ売却されたこと、また同寺へ寄進された土地もあったことから、領有関係はさらに錯綜したようである。

建武3年（1336）、室町時代に入ると文献史料に初めて「山城国西岡」の名が現れる（『足利尊氏御教書』）。この頃、西岡衆は幕府中枢の有力大名家の被官となり、その存在感を増していた。また自立・武装化が進み、農民とともに武力蜂起して守護に対抗することもあった。

文明2年（1470）、応仁の乱に際して石見城主は西軍に与したとみられ、東軍の野田泰忠の攻撃を受け、上里、井内の城館とともに焼失した（『野田弾正忠泰忠軍忠書』）。この時、上里・石見・井内には、物部氏や小野氏等の伊勢貞親被官衆が居住していたと推定される。このうち小野氏は、寛正6年（1465）の『親元日記』に小野新左衛門、長享元年（1487）の『神足友善連書状』に小野太郎左衛門尉景行と署名する人物があり、石見城焼失時の城主であった可能性がある。

なお石見の地名は、康永3年（1344）に海印寺の塔頭寂照院の仁王胎内に納められた結縁交名に「石見里」と「上里」と見えることから、14世紀にはすでに村落が一定の規模をもって形成されていたことがわかる。石見と上里は、近世以後も連名で記されることが多く、『元禄郷帳』（1700～1702）には「石見村共上里村」、『山城国高八郡村名帳』（1729）には「石見上里村」と記されている。

（3）周辺の調査成果

調査地周辺では、都市計画道路中山石見線の建設等に先立ち、試掘調査及び発掘調査が複数回行われている（図5・表1）。このうち、大原野石見遺跡発見の契機となった調査5（右京第746次）では、縄文時代後期に遡る流路が確認され、突帯文土器の深鉢や小型石棒の出土が報告されている。また調査6（右京第772次）では、縄文時代晩期後半の土器棺墓3基、土坑墓4基が確認されている。

弥生時代の遺構は、同じく調査6において方形周溝墓や流路が検出されている。報告された出土土器は弥生時代後期に限られているが、石鏃や石包丁の出土からそれ以前に集落が存在した可能性は高い。既往の調査成果より、上里遺跡の居住域はさらに北東側に展開することが明らかであり、当該地域は墓域として使用されたものと見られる。

古墳時代の遺構は、調査５・８（右京第879次）で確認されている。調査５では古墳時代前期の流路が、調査８では同じく前期の土坑群が検出されており、土師器甕、高杯が埋納された状態で出土した。また、善峰川の対岸に位置する堂ノ上古墳（調査９）は、墳丘裾にめぐらされた円筒埴輪の形状から、４世紀末～５世紀前半の築造と推測される。このほか、調査地の南に位置する芝古墳群のうち唯一の前方後円墳である芝１号墳（調査10）は、最大長32.3mを測る墳丘に周溝を巡らせる構造をもち、６世紀に築造された首長墓のひとつと認識されている。

長岡京期の遺構は、調査５で一条条間南小路の側溝が、調査６で西三坊大路側溝及び宅地内の内溝が検出されているほか、掘立柱建物や井戸、柵列等、都城に関連する遺構群が複数報告されている。

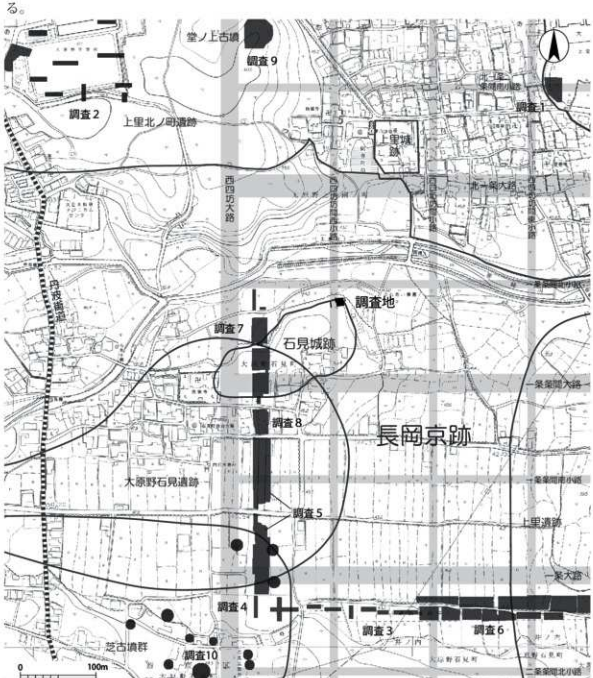


図５　既往の調査位置図（1：5,000）

表1　石見城跡周辺調査一覧表

No.	調査番号	遺跡名		種類	住所	調査遺構・出土遺物	調査機関	文献
1	89NG 248	長岡京跡	1989/8/7 ～ 1989/8/11	発掘	西京区大原野上里南ノ町（上里小学校）	平安時代／流路 出土遺物／土師器、須恵器、緑釉陶器	（財）京都市埋蔵文化財研究所	埋文研1994
2	92MK TC001 TC002	上里北ノ町遺跡	1993/1/6 ～ 1993/3/8	試掘 延長	西京区大原野上里町（大原野中学校）	鎌倉時代／掘立柱建物、土坑、区画溝、柵列、ピット群 出土遺物／土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、白磁、陶磁器	（財）京都市埋蔵文化財研究所	埋文研1995
3	01NG 238	長岡京跡 芝古墳群	2001/10/29 ～ 2002/1/25	試掘	西京区大原野石見町　地内	1～7Tr／長岡京期の遺構を確認、本調査へ 8～15Tr／遺構検出なし	（財）京都市埋蔵文化財研究所	埋文研2004
4	01NG 238	長岡京跡 芝古墳群	2002/1/24 ～ 2002/2/28	試掘	西京区大原野石見町　地内	1Tr／近代撹乱により削平 2～4Tr／弥生時代、長岡京期、中世遺構を多数検出。本調査へ	（財）京都市埋蔵文化財研究所	埋文研2004
5	01NG 238	長岡京跡 右京 第746次	2002/8/8 ～ 2003/2/28	発掘	西京区大原野石見町　地内	縄文晩期～布掘式／流路 長岡京期／一条条間南小路、条坊側溝、土坑、溝、柵列、掘立柱建物 鎌倉時代／柱穴、土壙墓、土坑、耕作溝 出土遺物／突帯文土器、弥生土器、古式土師器、土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦器、白磁、青磁、瓦、製塩土器、土製品、石器、銭貨	（財）京都市埋蔵文化財研究所	埋文研2003
6	01NG 238	長岡京跡 右京 第772次	2003/1/6 ～ 2003/8/6	発掘	西京区大原野石見町　地内	縄文時代／土器埋甕、土壙墓 弥生時代／方形周溝墓、流路 古墳時代／竪穴建物、溝、土坑 長岡京期／一条大路側溝、西三坊大路側溝、内溝、掘立柱建物、木棺墓、溝、井戸、柵列 平安時代／掘立柱建物 鎌倉～室町時代／溝、柵列 出土遺物／縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、灰釉陶器、緑釉陶器、白磁、青磁、土製品、石器、鉄器、木器	（財）京都市埋蔵文化財研究所	埋文研2003
7	01NG 238	長岡京跡 右京 第831次	2004/11/19 ～ 2005/2/9	発掘	西京区大原野石見町314ほか	縄文時代／土坑 古墳時代／掘立柱建物、竪穴建物、溝 長岡京期／掘立柱建物 鎌倉時代～室町時代／都市跡（掘立柱建物、門、溝、隅段状遺構、土坑、土壇状遺構、井戸、堀） 出土遺物／縄文土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、石鏃、石器、滑石製品、木製品、鉄製品	（財）京都市埋蔵文化財研究所	埋文研2005
8	01NG 238	長岡京跡 右京 第879次	2006/6/29 ～ 2006/9/11	発掘	西京区大原野石見町　地内	古墳時代／土器埋納土坑 長岡京期／掘立柱建物、柵列 鎌倉～室町時代／柱穴、土坑 江戸時代／掘立柱建物、井戸、石組土坑、区画溝、耕作溝、土坑 出土遺物／弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、白磁、青磁、焼締陶器、国産陶磁器、土製品、瓦、銭貨	（財）京都市埋蔵文化財研究所	埋文研2007
9	01NG 238	登ノ上古墳	2014/10/22 ～ 2014/12/26	発掘	西京区大原野上里南ノ町　地内	古墳時代／方墳、埴輪列、葺石 鎌倉時代／土坑 出土遺物／円筒埴輪、形象埴輪、瓦器	（公財）京都市埋蔵文化財研究所	埋文研2014
10	13MK 448ほか	芝1号墳	2013/12/02 ～ 2017/6/9	範囲確認	西京区大原野石見町632-3	古墳時代／前方後円墳（横穴式石室、周溝、石組み溝、墓道） 出土遺物／埴輪、土師器、須恵器、鉄製品	京都市文化財保護課	京都市2018

中世の遺構は現石見町集落付近に集中する。調査7では鎌倉時代～室町時代にかけて計3面の遺構面が確認されている。いずれも掘立柱建物や井戸、門等を備える邸跡で、時期ごとに建物の主軸を違えて配置されている。このうち、室町時代前期（14世紀後半～15世紀初頭）の遺構群が今回の調査地である北東部の張り出しに近い方向軸を示している。

註

1）『野田弾正忠泰忠軍忠書』には、「上里・石見・井内館」と併記されており、「城」とは表記されていないが、本稿では周知の埋蔵文化財包蔵地の名称に従い、「石見城」と呼称する。

2）山下正男 『京都市内およびその近辺の中世城郭 –復元図と関連資料–』京都大学人文学研究所、1986年。

3．調査成果

（1）基本層序

調査地の標高は、45.0m程度である。西が高く東へ向かって緩やかに下がり、張り出しの端から北と東の低地へ向けて崖状に落ちる。近年まで竹林であったことから、表土には竹根が密に入り込んでいる。

基本層序は、GL-0.3ｍで褐色細砂混じりシルトの近世堆積層（第１層）、-0.4mでにぶい黄褐色砂質シルトを主体とする中世以前堆積層（第２層）、-0.8mでにぶい黄褐色砂質シルトを主体とする古墳時代前期包含層（第３層）、以下、にぶい黄褐色粘土質シルトの地山である。

第１層は近世以後に竹林を造成するにあたって均された表土及び落込み埋土であり、層厚は0.2m程度を測る。この層を除去した段階で、大規模な大溝（堀）を有する室町時代～江戸時代の遺構面を検出した（第１遺構面、第２遺構面）。

遺構面の基盤層である第２層はブロック土を含むシルト層で、層厚は0.3～0.5ｍを測る。この層の上面では瓦器椀の破片が張り付くように出土することから、層形成の下限年代は13世紀以後に求めることができる。土質は単調で、版築や流れ堆積等は認められない。このため徐々に堆積した土壌ではなく、短期間の内に積み上げられた構築土の可能性がある。

第３層は、層厚0.2m程度の古墳時代包含層で、暗色を呈し、古墳時代前期の土師器片（布留式４期）や炭化物を多く含む。下層確認トレンチ内のみの確認であるが、その下面（地山上面）で小

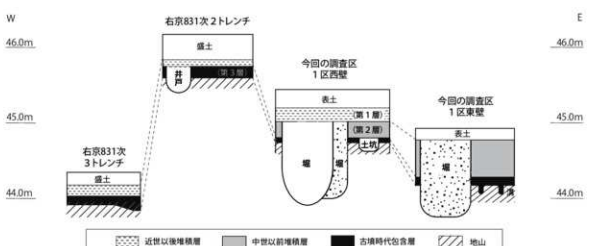
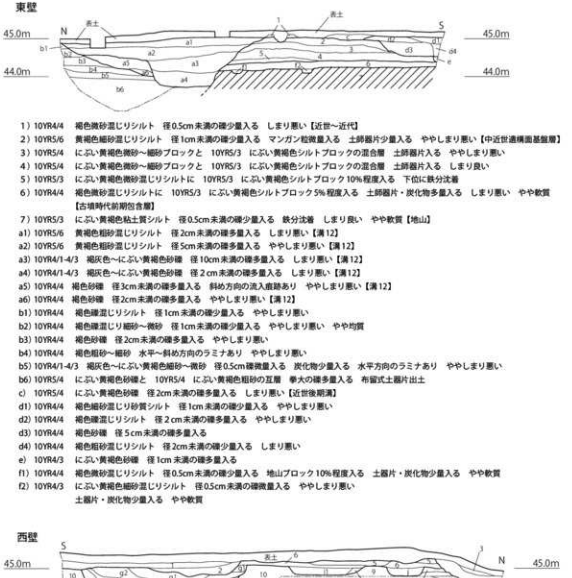


図６　基本層序模式図

表２　遺構概要表

時代	遺構	備考
古墳時代前期	土坑 13、溝 18・19、流路 20	
鎌倉・室町時代	溝（堀）11・12、焼土坑８	
江戸時代	溝２、土坑３、土坑（井戸）４、ピット１・９	



1）10YR4/4　褐色微砂混じりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る　しまり悪い【近世～近代】
2）10YR5/6　黄褐色細砂混じりシルト　径1cm未満の礫少量入る　マンガン粒微量入る　土師器片少量入る　ややしまり悪い【中近世遺構面基盤層】
3）10YR5/6　にぶい黄褐色微砂～細砂ブロックと　10YR5/3　にぶい黄褐色シルトブロックの混合層　土師器片入る　ややしまり悪い
4）10YR5/4　にぶい黄褐色微砂～細砂ブロックと　10YR5/3　にぶい黄褐色シルトブロックの混合層　土師器片入る　しまり良い
5）10YR5/3　にぶい黄褐色微砂混じりシルトに　10YR5/3　にぶい黄褐色シルトブロック10%程度入る　下位に鉄分沈着
6）10YR4/4　褐色微砂混じりシルトに　10YR5/3　にぶい黄褐色シルトブロック5%程度入る　土師器片・炭化物多量入る　しまり悪い　やや軟質
【古墳時代前期包含層】
7）10YR5/3　にぶい黄褐色粘土質シルト　径0.5cm未満の礫少量入る　鉄分沈着　しまり良い　やや軟質【地山】
a1）10YR5/6　黄褐色細砂混じりシルト　径2cm未満の礫多量入る　しまり悪い【溝12】
a2）10YR5/6　黄褐色細砂混じりシルト　径5cm未満の礫多量入る　ややしまり悪い【溝12】
a3）10YR4/1-4/3　褐灰色～にぶい黄褐色砂礫　径10cm未満の礫多量入る　しまり悪い【溝12】
a4）10YR4/1-4/3　褐灰色～にぶい黄褐色砂礫　径2cm未満の礫多量入る　しまり悪い【溝12】
a5）10YR4/4　褐色砂礫　径3cm未満の礫多量入る　斜め方向の流入痕跡あり　ややしまり悪い【溝12】
a6）10YR4/4　褐色砂礫　径2cm未満の礫多量入る　ややしまり悪い【溝12】
b1）10YR4/4　褐色礫混じりシルト　径1cm未満の礫少量入る　ややしまり悪い
b2）10YR4/4　褐色礫混じり細砂～微砂　径1cm未満の礫少量入る　ややしまり悪い　やや均質
b3）10YR4/4　褐色砂礫　径2cm未満の礫多量入る　ややしまり悪い
b4）10YR4/4　褐色粗砂～細砂　水平～斜め方向のラミナあり　ややしまり悪い
b5）10YR4/1-4/3　褐灰色～にぶい黄褐色細砂～微砂　径0.5cm礫微量入る　炭化物少量入る　水平方向のラミナあり　ややしまり悪い
b6）10YR5/4　にぶい黄褐色砂礫と　10YR5/4　にぶい黄褐色粗砂の互層　拳大の礫多量入る　布留式土器片出土
c）10YR5/4　にぶい黄褐色砂礫　径2cm未満の礫多量入る　しまり悪い【近世後期溝】
d1）10YR4/4　褐色細砂混じり砂質シルト　径1cm未満の礫少量入る　ややしまり悪い
d2）10YR4/4　褐色礫混じりシルト　径2cm未満の礫多量入る　ややしまり悪い
d3）10YR4/4　褐色砂礫　径5cm未満の礫多量入る
d4）10YR4/4　褐色粗砂混じりシルト　径2cm未満の礫少量入る　しまり悪い
e）10YR4/3　にぶい黄褐色砂礫　径1cm未満の礫多量入る
f1）10YR4/4　褐色微砂混じりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る　地山ブロック10%程度入る　土器片・炭化物少量入る　やや軟質
f2）10YR4/3　にぶい黄褐色細砂混じりシルト　径0.5cm未満の礫微量入る　ややしまり悪い
土器片・炭化物少量入る　やや軟質

1）10YR4/6　褐色細砂混じりシルト　径1cm未満の礫少量入る　土器片・炭化物入る　しまり悪い【近世堆積層】
2）10YR4/6　褐色細砂混じりシルトに　10YR5/3　にぶい黄褐色シルトブロック30%程度入る　径1cm未満の礫少量入る　ややしまり悪い【近世堆積層】
3）10YR5/6　黄褐色細砂混じりシルト　径1cm未満の礫少量入る　しまり悪い
4）10YR4/4　褐色細砂混じりシルト　径1cm未満の礫少量入る　しまり悪い
5）10YR4/4　褐色細砂混じりシルト　径1cm未満の礫少量入る　しまり悪い
6）10YR4/4　褐色細砂混じりシルトに　10YR6/4　にぶい黄橙色シルトブロック20%程度入る　土器片入る　径1cm未満の礫少量入る　しまり良い
7）10YR5/4　にぶい黄褐色細砂混じりシルトに　2.5Y6/4　にぶい黄色シルトブロック20%程度いる　ややしまり悪い
8）10YR4/4　褐色細砂混じりシルトと　2.5Y6/4　にぶい黄色シルトブロック20%程度入る　ややしまり悪い
9）10YR5/4　にぶい黄褐色砂質シルトに　10YR6/3　にぶい黄橙色シルトブロック20%程度入る　ややしまり悪い
10）10YR5/4　にぶい黄褐色砂質シルト　下位に向かって暗色化　ややしまり悪い
11）10YR4/3　にぶい黄褐色砂質シルト　径0.5cm未満の礫少量入る　土器片・炭化物入る【古墳時代前期包含層】
12）10YR5/4　にぶい黄褐色粘土質シルト　鉄分沈着　しまり良い【地山】
g1）10YR4/4　褐色礫混じりシルト　拳大の礫多量入る　しまり悪い【溝11】
g2）10YR5/4　にぶい黄褐色礫混じりシルト　径3cm未満の礫多量入る　ややしまり悪い
g3）10YR5/4　にぶい黄褐色粗砂混じりシルト　径2cm未満の礫多量入る　しまり悪い
g4）10YR4/4　褐色礫混じりシルト　径5cm未満の礫多量入る　しまり悪い
h）10YR4/4　褐色細砂混じりシルト　11）層ブロック20%程度入る　しまり悪い
i）10YR4/4　褐色細砂混じりシルトに　10YR6/3　にぶい黄橙色シルトブロック10%程度入る　土器片・炭化物多量入る　ややしまり悪い
i2）10YR5/4　にぶい黄褐色シルト　土器片入る　ややしまり悪い
j）10YR5/4　にぶい黄褐色シルト　土器片・炭化物少量入る　ややしまり悪い【流路20】

0　3m

図７　第１調査区壁断面図（１：100）

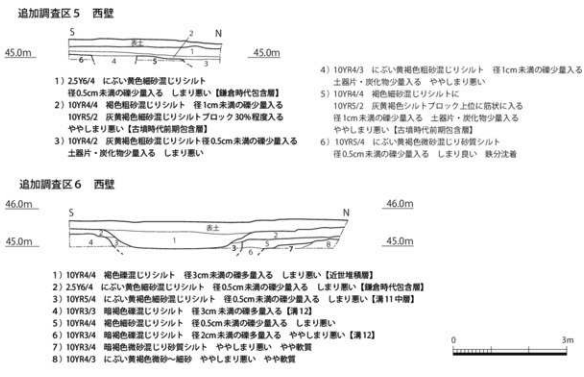


図８　追加調査区５・６壁断面図（1：100）

溝を検出したことから、遺構面と認識した（第３遺構面）。

なお、今回の調査では長岡京期と推測される遺物が一定量出土した。当該期の包含層は確認できていないが、第３層上面に長岡京期の遺構面が存在する可能性がある。

（２）遺構

第１遺構面（図９・10）

近世以後の堆積層（第１層）を除去した段階で検出した遺構面である。遺構の切り合いから２時期に分類できるため、便宜的に上位の遺構群を第１遺構面とし、下位の遺構群を第２遺構面として図示する。

第１遺構面では、土坑、溝、落込み、ピットを検出した。遺構の時期はいずれも近世である。

ピット１　調査区南東部で検出した遺構である。平面形状は最大長0.55ｍを測る不整形、断面形状は最大深度0.1ｍを測る皿形である。埋土はにぶい黄褐色粗砂混じりシルトを主体とする。溝２とは切り合う関係にあり、検出した遺構群の中では最も新しいと推測される。埋土より土師器甕の小片が出土した。遺構の性格は不明である。

溝２　調査区東辺を南北に続く遺構である。検出長は10.0m、最大幅は0.6mを測る。断面形状は0.08ｍを測る皿形で、埋土は褐色粗砂混じりシルトを主体とする。遺構の性格は不明であるが、張り出しの崖線と並行するように伸びることから、崖際に設けられた排水溝の可能性が考えられる。埋土から土師器皿、甕、須恵器甕の小片が出土した。

土坑３　調査区の北半部中央において検出した遺構である。平面形状は、長径2.3m、短径1.3mを

測る平面楕円形、最大深度は0.08ｍを測る。埋土は褐色礫混じりシルトを主体とし、下層に由来する円礫を多く含む。遺物の出土は確認できていない。遺構の性格は不明である。

土坑４　調査区中央付近で検出した遺構である。平面形状は長径1.9m、短径1.65mの不整形な円形を呈する。最大深度は0.3mである。中央がやや下がることから井戸や水溜として機能した可能性がある。埋土から瓦器椀（13世紀）、土師器甕の小片が出土した。

ピット９　調査区南東端において検出した遺構である。溝２と切り合い関係にあり、溝２の掘削時に存在を確認した。平面形状は径0.6ｍを測る円形で、断面形状は浅い椀形を呈する。最大深度は0.18ｍを測る。埋土は褐色細砂混じりシルトを主体とする。埋土から土師器甕の小片が出土した。遺構の性格は不明である。

落込み10（第1-2層）　調査区の南西部で確認した落込みである。方形を呈することから、竹林造成等に伴う段整形を施した範囲に土砂が溜まったものと推測される。埋土は、近世堆積層に近似したしまりの悪い褐色細砂混じりシルトを主体とする。埋土から、須恵器杯（長岡京期）、土師器甕、瓦器椀（13世紀）、陶磁器、染付碗、瓦等が出土した。

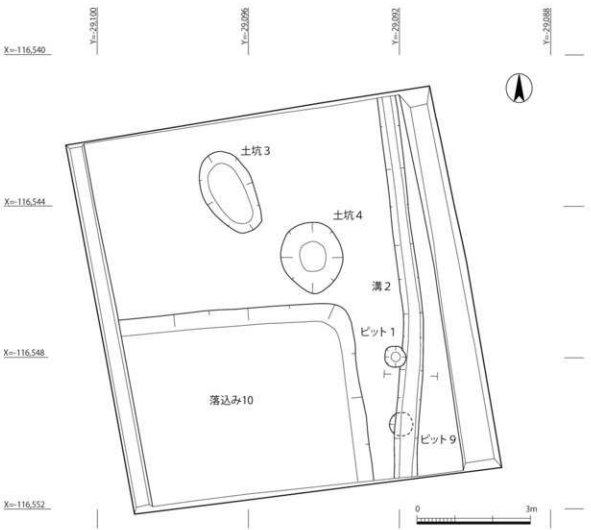


図９　第１遺構面全体図（1：100）

第２遺構面（図11・12）

土坑８　第１調査区北西部で検出した遺構である。平面形状は不定形で長辺1.5m、短辺0.8mを測る。最大深度は0.2m、断面形状は皿形を呈する。埋土は暗灰黄色細砂混じりシルトを主体とし、拳大の礫を少量含む。焼土及び炭化物が表層に多く含まれており、埋没後に被熱した痕跡を残す。埋土から土師器甕の細片が出土した。

溝（堀）11　上層の落込みを除去して検出した大型の溝状遺構である。検出長5.9m、最大幅4.0m、断面形状は逆台形に近いが、底面は安定せず凹凸が目立つ。また北肩には段を設けている。最大深度は1.15mを測る。追加調査区６の設定により、西方から連続して調査区内へ入り、ここで閉じることが明らかとなった。調査区西壁では、後述する溝12とほぼ同位置で検出したため当初は同一遺構と捉えたが、断面観察の結果、別遺構であると判断した。

埋土は、褐色～にぶい黄褐色の礫混じりシルトを主体とし、拳大までの円礫を多量に含む。上層の一部に粗砂の流入があるものの、その堆積状況から、自然の作用によって埋没したのではなく、人為的に埋め戻されたものと考えられる。埋土中の礫は、基盤層である第２層には全く含まれていないことから、他所から搬入したものと推測される。埋土から、土師器皿（16世紀）、信楽焼鉢（16世紀）、鉄刀等が出土した。遺構の最終埋没は江戸時代後期である。張り出しラインと並行して伸びること、また調査区外へ流出せずに閉じることから、人為的に設けられた施設であることは明らかである。規模及び連続性から、城に付随する堀（内堀）の一部である可能性が高い。

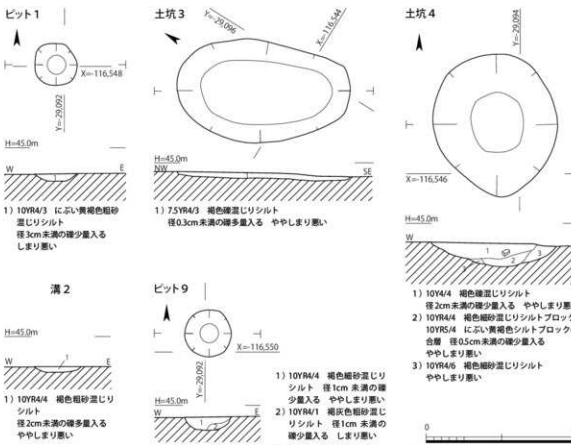


図10　第１遺構面遺構平・断面図（１：50）

溝（堀）12　調査区のほぼ中央を南西から北東に向かって伸びる大型の溝状遺構である。調査区西辺では溝11とほぼ重なるが、中央付近で鍵形に小さく屈曲した後、やや主軸を変えて北東方向へ続く。追加調査区１～３の設定により、張り出し以東へは流出せず崖面の途中で閉じることが明らかとなった。終焉部の平面形状は隅丸方形を呈しており、溝11と同じく人為的な施設である。検出（確認）長は約11.0m、最大幅は5.0m、断面形状は逆台形に近いがやや不定形である。最大深度は1.3mを測る。

埋土は大きく３層に分層できる（図12下段参照）。上層は溝全体を広く覆う層（c1・c2層）で、黄褐色粗砂混じりシルトを主体とする。中層は南半部に堆積する土層（c3・c4層）で、褐灰色～にぶい黄褐色砂礫を主体とする。下層（c5・c6層）は溝底面の北寄りに堆積する土層で、褐色砂礫を主体とする。いずれの層も拳大までの円礫を多量に含む。溝11より砂質が強く川砂に近い印象を受けるが、層内にラミナは認められない。溝11同様、他所（河川敷か）より砂礫を搬入し、埋め戻したものと推測される。層序の別は、数次にわたって段階的に埋め戻された痕跡と捉えることができる。

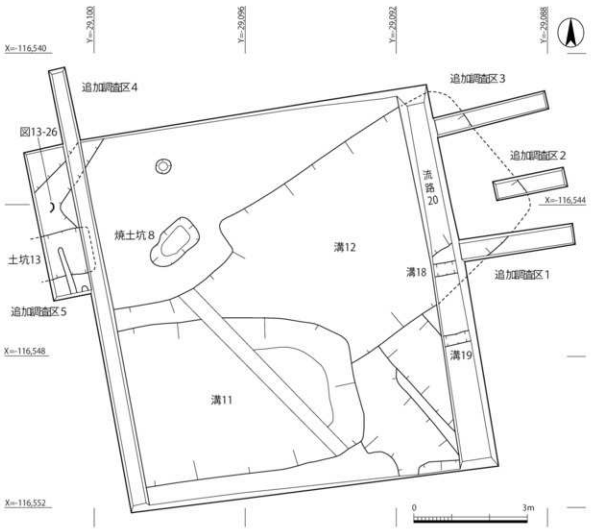
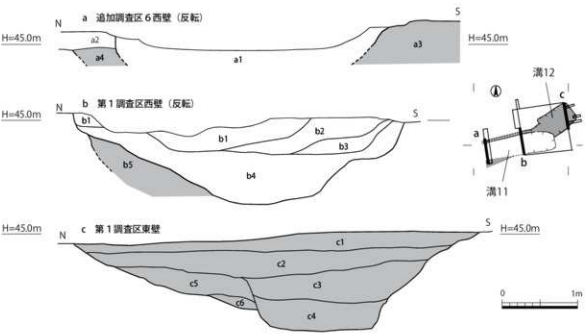


図11　第２遺構面全体図（1：100）

出土遺物は下層からの混入品のみであり、この遺構の埋没時期を示す資料は得られていない。ただし、基盤層である第２層の下限年代が13世紀であること、上位に設けられた溝11の最終埋没が江戸時代であることを考慮すると、鎌倉時代後半～室町時代に機能した施設と考えられる。遺構の性格は同じく堀と考えて良いだろう。

溝12の主軸が角度をつけて湾曲する理由については、一定の推測が可能である。北辺の張り出しラインは一部北東隅付近で角度を変える箇所があり、その変化が溝12の角度変化と合致している。このことから両者には有機的なつながりがあるとみてよいだろう。中世期の城郭には、鬼門にあたる外郭の北東角を切り欠いて成形する例があり、溝12及びその外縁にあたる張り出しラインについても、同様の造作が行われた可能性がある。

土坑13　追加調査区５において検出した土坑である。検出長1.2m、最大幅1.1mを測る遺構で、平面形状は隅丸方形を呈する。断面形状は皿形で、最大深度は0.15mを測る。埋土は炭化物を多く含むにぶい黄褐色粗砂混じりシルトを主体とする。遺構の成立は第３層上面であるため、その成立年代はこれ以後と考えられる。埋土からは土師器甕の破片が出土した。



a1）10YR5/4　にぶい黄褐色細砂混じりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る　しまり悪い【溝11中層】
a2）10YR4/4　褐色細砂混じりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る　しまり悪い
a3）10YR3/3　暗褐色礫混じりシルト　径３cm未満の礫多量入る【溝12】
a4）10YR3/4　暗褐色礫混じりシルト　径２cm未満の礫多量入る　ややしまり悪い【溝12】
b1）10YR4/4　褐色礫混じりシルト　拳大の礫多量入る　しまり悪い【溝11】
b2）10YR5/4　にぶい黄褐色礫混じりシルト　径３cm未満の礫多量入る　ややしまり悪い
b3）10YR5/4　にぶい黄褐色粗砂混じりシルト　径２cm未満の礫多量入る　しまり悪い
b4）10YR4/4　褐色礫混じりシルト　径５cm未満の礫多量入る　しまり悪い
b5）10YR4/4　褐色細砂混じりシルト　11）層ブロック20%程度入る　しまり悪い
c1）10YR5/6　黄褐色粗砂混じりシルト　径２cm未満の礫多量入る　しまり悪い【溝12】
c2）10YR5/6　黄褐色粗砂混じりシルト　径５cm未満の礫多量入る　ややしまり悪い【溝12】
c3）10YR4/1-4/3　褐灰色～にぶい黄褐色砂礫　径10cm未満の礫多量入る　しまり悪い【溝12】
c4）10YR4/1-4/3　褐灰色～にぶい黄褐色砂礫　径２cm未満の礫多量入る　しまり悪い【溝12】
c5）10YR4/4　褐色砂礫　径３cm未満の礫多量入る　斜め方向の流入痕跡あり　ややしまり悪い【溝12】
c6）10YR4/4　褐色砂礫　径２cm未満の礫多量入る　ややしまり悪い【溝12】

図12　溝11断面図（1：50）

（2）遺物

今回の調査では、古墳時代前期～江戸時代後期の遺物が２箱出土した（図13）。

第１層出土遺物　１・２は須恵器杯である。１は杯Bの蓋で端部に短い返しが付く。２は杯Gの身で器高が低く小ぶりである。ともに７世紀の製品である。３は土師器の灯明皿で口縁端部に煤が付着する。４は瓦器椀の底部である。13世紀の製品である。５は瓦質土器風炉の口縁部で16世紀以後の製品である。６・７は土師器羽釜の口縁部でともに落込み10より出土した。８は焼締陶器壺の口縁である。

溝11出土遺物　９～11は土師器皿である。９は器壁に指オサエを多く残す15世紀の製品、10・11は見込み部に圏線がめぐる16世紀の製品である。11は灯明皿で口縁に焦げた油滴が付着する。

表３　遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器（布留式）、須恵器	2	土師器14、須恵器２、瓦器２、瓦質土器３、焼締陶器２、施釉陶器１、緑釉陶器１、鉄製品１	0	1
長岡京期	緑釉陶器、須恵器				
鎌倉・室町時代	土師器、瓦器、瓦質土器、鉄製品（小刀）				
江戸時代	土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付、瓦				
	合計	2箱	26（1箱）	0箱	1箱

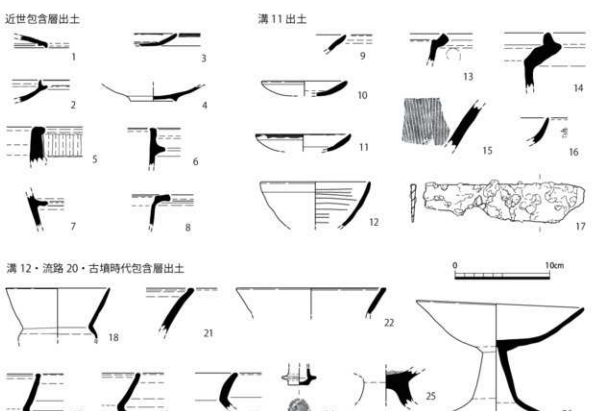


図13　出土遺物実測図（１：４）

12は椀葉型の瓦器椀で内面に疎らな暗文が認められる。13世紀の製品である。13は瓦質土器の鍋で14世紀、14は同じく鉢で15世紀の製品である。15は信楽焼の擂鉢で、8条1セットの擂目をもつ。16は施釉陶器の椀で、外面に濃紺色で絵付を行う。17は刀状の鉄製品で残存長17.0cm、最大幅4.0cmを測る。溝11下層より出土した。

溝12・流路20・第2層出土遺物　18～20は、土師器小型丸底壷である。18の器壁は薄く、内外面ともにミガキを施す。19・20は口縁端部を丸くおさめる。21は、土師器広口壷の口縁である。いずれも布留式に位置づけられる。第2層より出土した。

22・23は土師器甕である。ともに布留式（併行期）の製品である。22は口縁端部を平坦にナデている。25は土師器の低脚高杯で、杯部にハケ目が残る。庄内式に遡る可能性がある。流路20より出土した。

24は緑釉陶器浄瓶の蓋の下半部であると推測される。底部外面には糸切痕を残す。上面にはオリーブ色の釉薬が塗布されている。長岡京期の製品である。溝12上層の掘削中に出土した。

追加調査区5出土遺物　26は布留式の高杯で、ほぼ完形の状態で出土した。脚部は中空でやや傾いた杯部は段を持たず直線的に外方へ開く。追加調査区5の第3層内（図8-5層）より出土した。

4．まとめ

以上、令和3年度に実施した発掘調査について記述した。今回の成果により、堀を有する中世期の城館が当該地に存在した蓋然性は非常に高まったと言える。

図14　石見城跡遺構概略図（1：1,250）

今回の調査では、現存する筋状の凹地が大規模な溝状遺構の痕跡であることを確認した。その方向軸が張り出しのラインと並行すること、また低地へ流出せず、高台内で閉じることから、人為的な施設であることが確実となった。張り出した地形を城の外郭と見るならば、この溝は土塁の内側に設けられた内堀と見て良いだろう。その開削時期は鎌倉時代～室町時代と推測され、この地域で西岡被官衆が勇躍した時代と重なる。調査７でも同時期の遺構群が確認されているが、これを居住域（屋敷地）とし、今回の調査地である北東方向の張り出しを防御施設として使用したことは十分に想定されるだろう。今後、張り出し縁辺をめぐる土塁状の高まりや、郭の存在が想定される平坦地の調査を重ねることにより、遺跡の解明はより進むものと期待される。

なお今回の調査では、中世遺構面の下層に古墳時代前期の包含層及び遺構群が良好に残存することも明らかとなった。遺物の出土量も多いことから、集落が存在した可能性が高い。想定される長岡京期の遺構とあわせて注視しておきたい。

（黒須亜希子）

引用文献

調査１：(財) 京都市埋蔵文化財研究所 「38　長岡京右京一条四坊」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』、1994年。

調査２：(財) 京都市埋蔵文化財研究所 「10　上里遺跡」『平成４年度　京都市埋蔵文化財調査概要』、1995年。

調査３：(財) 京都市埋蔵文化財研究所 「４　長岡京右京一条四坊跡（１）」『平成13年度　京都市埋蔵文化財調査概要』、2004年。

調査４：(財) 京都市埋蔵文化財研究所 「５　長岡京右京一条四坊跡（２）」『平成13年度　京都市埋蔵文化財調査概要』、2004年。

調査５：(財) 京都市埋蔵文化財研究所 『長岡京右京一条四坊十三・十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-2、2003年。

調査６：(財) 京都市埋蔵文化財研究所 『長岡京右京二条四坊一・八・九町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-3、2003年。

調査７：(財) 京都市埋蔵文化財研究所 『長岡京右京一条四坊十五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-15、2005年。

調査８：(財) 京都市埋蔵文化財研究所 『長岡京右京一条四坊十四・十五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2006-22、2007年。

調査９：(公財) 京都市埋蔵文化財研究所 『長岡京右京北辺四坊八町跡・上里北ノ町遺跡・堂ノ上古墳』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2014-12、2015年。

調査10：京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 『芝古墳（芝１号墳）調査総括報告書』京都市文化市民局、2018年。

参考文献

林屋辰三郎・村井康彦　編 『京都市の地名』日本歴史地名体系第27巻　平凡社、1979年。

玉城玲子 「第７章第２節　一揆の時代」『長岡京市史』本文編１　長岡京市史編纂委員会編、1996年。

X　長岡京跡隣接地

1．調査経過

（1）調査に至る経緯

京都市は都市の利便性の向上及び地域の活性化を図ることを目的に、JR向日町駅へのアクセス道路となる「向日町上鳥羽線」（国道171号線から久世殿城町）の整備事業を進めている。道路整備予定地は、東側が「中久世遺跡」に該当するが、西側（南区久世殿城町内）は周知の埋蔵文化財包蔵地にはあたらない。しかし、向日市域の発掘調査によって長岡京の条坊施工範囲が、現在の北限とされている北京極小（大）路よりも北側に延長することが確認されているほか、弥生～古墳時代の集落跡とされている「野田遺跡」の範囲が、本市域付近まで及んでいる可能性が指摘されている（表1文献3）。このようなことから、周知の埋蔵文化財包蔵地外にあたる道路整備予定範囲の西側に対しても遺跡の展開状況を把握する必要があると判断し、道路建設課と協議を重ね、買収済み範囲の一部で範囲確認調査を実施することとした。

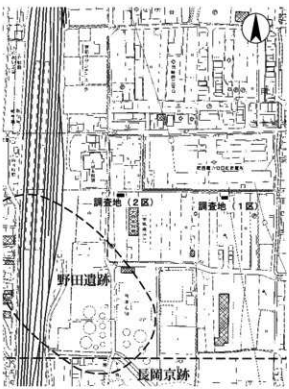


図1　調査位置図（1：5,000）

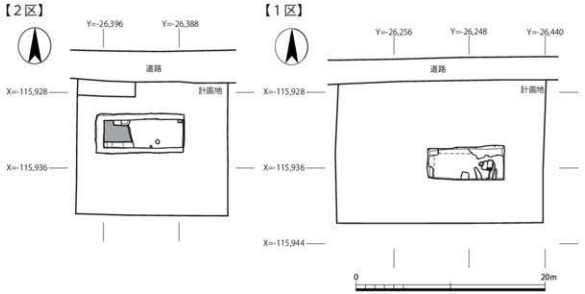


図2　調査区位置図（1：400）

（2）調査の経緯

調査区は道路整備予定地内にあたる耕作地の２箇所に設定した（図２）。１区は東西8.2ｍ、南北3.5ｍ、２区は東西9.4ｍ、南北4.0ｍとし、調査面積の合計は約69㎡である。なお、調査地は調査終了後も耕作地として利用することから、掘削時にあま土・床土（耕作土）などが混ざらないように注意を払いつつ調査を進めた。

調査は2022年２月24日より、機材搬入及び１区の重機掘削による耕作土の除去を行った。床土直下の地山直上を遺構面と認識し遺構検出を実施したところ、調査区中央東側で柱穴や溝などが確認できた。３月２日に２区の機械掘削による耕作土の除去を行い、１区と同様に地山直上を遺構面と認識し遺構検出を実施した。３月３日に１区の埋め戻し、10日に２区の埋め戻しを行い、同月11日に現地での作業を終え、16日に調査を終了した。

図３　１区調査前全景（北東から）

図４　１区作業風景（東から）

図５　１区埋戻し（北から）

図６　２区重機掘削（北東から）

図７　１区埋戻し終了状況（北西から）

図８　２区埋戻し終了状況（北東から）

2．遺　跡

（1）立地と歴史的環境

調査地は桂川沖積低地（弥生時代中期以降「旧寺戸川」左岸地）に位置し、長岡京条坊復元の北京極小（大）路及び、弥生～古墳時代の集落跡である野田遺跡に隣接する。当該地の南には、『東寺百合文書』に「今井用水」として記録されている寺戸川がある[1]。現在の寺戸川は、縄文時代～長岡京期前後の流路（旧寺戸川）を概ね踏襲し（表1文献3）、旧寺戸川の周辺に弥生～古墳時代の集落や水田が形成されていることが明らかにされている（野田遺跡・渋川遺跡・東土川西遺跡など）。当該地に最も近い野田遺跡は、JR東海道本線向日町駅南東一帯に展開し、これまで住居に関わる調査成果は得られていないが、灌漑用水路や木製品など水田関連の遺構・遺物が確認されている。また、少数ではあるが飛鳥時代の遺物も出土しており、継続的に土地利用が行われていたことが明らかにされている。

延暦3年（784）になると桓武天皇によって都が長岡の地（長岡京）に遷された。現在の長岡京条坊復元案によれば、当該地は京域の北限とされる北京極小（大）路の北側にあたり、長岡京の外側にあたる。ただし、当該地周辺を含めた長岡京外北側隣接地の発掘調査で、長岡京期の遺構・遺物の確認事例が増加していることから、長岡京の条坊施行範囲が現行の復元案よりも大きい、または平城京と同じく京の北辺に苑池を有する空間が設けられたと考えられている（表1文献10）。

（2）周辺の調査（図9・表1）

当該地の周辺の発掘調査成果は表1にまとめた。以下では主要な成果のみを述べることとする。なお、表に示した調査次数は報告書に準拠した（表1文献9）。

昭和60年（1985）の左京第142次（調査1）において、初めて古墳時代初頭の土器を含む溝が検出された。この成果を受けて、昭和63年（1988）に小字名「のだ」を冠した野田遺跡（集落遺跡）が周知されるに至った。調査3・4では北東から南西方向の流路跡（SD46316）を検出し、流路の一部に大形木材を配置・埋設させ水田作土を形成していたことが確認された。さらに、弥生土器などが流路の北側から集中して出土したことから、集落域が包蔵地の北東側に展開していると想定した。調査7では旧寺戸川と考えられる流路（SX47101）を確認するとともに、流路の中心部で木材と粘土で構築した堤状遺構（水利施設・SX47138）を検出している。調査7の北側に位置する調査8では、底面に杭が打設された北西から南東方向の流路跡（SX47510）を検出し、杭の打設部分（南西肩）を堰堤と考え、流路（SX47510）が本流から分流された水路であったと推測している。また、調査7で確認した水利施設と合わせて、灌漑用水利に関わる複合的施設があったと想定している。

一方の長岡京跡については、調査2～4（左京第345・463・464）で左京二条東二坊坊間小路、北京極大（小）路溝や掘立柱建物などを確認し、左京域の北辺についても北京極大（小）路付近まで土地利用が行われていたことを明らかにした。北京極大（小）路の道路幅が約9mの小路規模と

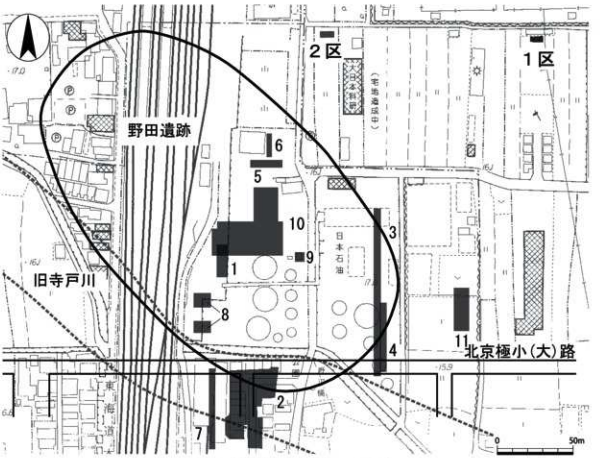


図9　周辺調査位置図（1：2,500）

判明したことにより、長岡京の北端を画する北京極大（小）路が「北一条大路」であった可能性を指摘する。調査2では「廩院」墨書土器、調査3では「伊勢□」墨書土器が出土している。「廩院」は民部省所管の倉庫施設名で、墨書土器が出土した流路が左京一条三坊一・四町を横断し、造営用木材陸揚げ地として約3000点の木簡が出土した左京一条三坊八・九町検出の流路[2]と合流することから、庸祖米などの税物を運ぶ水上交通の一幹線として用いられた可能性を想定している。また、周辺部に荷揚げ場の存在もしくは管理監督用の収納に関わる官司の出先施設があったと推測している。「伊勢□」の墨書は解釈が分かれており、人名、地名と見る意見と伊勢斎宮に関連する施設名と見る意見がある。調査10では、東二坊坊間西小路が北京極大（小）路より北側に延長すること、道路沿いで掘立柱建物や柵列、井戸などの住居に関わる遺構が確認された。このようなことから、長岡京条坊施工範囲が周知の埋蔵文化財包蔵地（長岡京跡）の範囲の北側にまで拡大していたとする。調査11（左京第631次）では、長岡京条坊に関わる南北両側溝、古墳時代に埋没した流路の一部で杭や矢板を打ち込んだ施設を確認している。また、弥生時代終末～古墳時代初頭の方形周溝墓も検出されている。

表1　周辺調査一覧表

調査番号	調査次数	調査期間・機関	主要遺構	主要遺物	備考	文献
1	左京第142次	1985/12/16～1986/1/28（向日市センター）	平安以降：土坑・溝。古墳以前：土坑・溝。	中世：土師器。古代：土師器・平瓦。古墳：土師器甕・須恵器など。		1
2	左京第345次	1994/5/16～9/2（向日市センター）	長岡京期以降：落込み・溝。長岡京期：東二坊坊間西小路両溝・東二坊坊間小路・土器埋納遺構。長岡京期以前：溝・流路。	長岡京期：土師器・「廂院」墨書土器・土馬など。		2
3	左京第463次	2001/5/11～17・25～28（向日市センター）	中世：溝。長岡京期：北京極小路両溝・掘立柱建物・柵。古墳：溝・流路。弥生時代：溝・流路。	中世：土師器・瓦器。平安：須恵器・灰釉陶器。長岡京期：土師器・須恵器・「伊勢二」墨書土器。製塩土器・単弁蓮華文軒丸瓦。古墳：土師器・須恵器。縄文～弥生：縄文土器・弥生土器・磨製石器・打製石器。	流路が一時（弥生～古墳時代）水田として利用されている。	3
4	左京第464次	2001/6/26～7/17（向日市センター）				4
5	野田遺跡第5次	2001/9/11～10/12（向日市センター）	近世以降：溝。時期不明土坑。	古代：土師器・須恵器。		5
6	野田遺跡第6次	2001/10/1～12（向日市センター）	近現代：溝。時期不明ピット。	近世：陶磁器。		6
7	左京第471次	2002/2/21～3/30（向日市センター）	中世：溝。中世～古代：土坑・溝。長岡京期以前：流路。古墳時代前期：水利施設・足跡。	中世～古墳：須恵器。弥生：弥生土器壺・甕。	灌漑用水利に関わる施設の存在が想定されている。	7
8	左京第475次	2002/6/24～7/24（向日市センター）	中世：溝・流路。古代：土坑。古墳：灌漑用水路（人的に盛土された堰堤によって本流から分流された水路）。	飛鳥：木製壺鐙。古墳～古代：須恵器。弥生：弥生土器。		8
9	野田遺跡第9次	2006/5/16～31（向日市センター）	近代：暗渠。			9
10	野田遺跡第10次	2008/5/8～9/8（向日市センター）	中世：溝。長岡京期：東二坊坊間西小路両溝延長・掘立柱建物・柵・井戸。古墳：土坑。	中世：瓦器。長岡京期：土師器・須恵器・複弁蓮華文軒丸瓦・唐草文軒平瓦。古墳：土師器・須恵器。弥生：弥生土器。縄文：縄文土器・石鏃。	東二坊坊間西小路が長岡京北限とされる北京極小路の北側に延長することが確認された。	10
11	左京第631次	2020/12/17～21/3/31（向日市センター）	中世：溝。長岡京期：北京極大（小）路両溝。古墳：方形周溝墓。			11

※向日市センター：（財）向日市埋蔵文化財センター

文献（表1　周辺調査一覧表の文献番号に対応）

1　山中章「長岡京跡左京第142次（7ANDND地区）～北京極大路、野田遺跡～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告』第27集　（財）向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会、1989年。

2　國下多美樹・松崎俊郎「長岡京跡左京第345次（7ANDKD-5地区）～左京北一条二坊一・四町、東二坊坊間小路、野田遺跡～発掘調査報告」『向日時埋蔵文化財調査報告書』第62集（第1分冊）（財）向日市埋蔵文化財センター、2004年。

3　國下多美樹・中島信親ほか「長岡京跡左京第463次（7ANDND-2地区）～左京北一条二坊四町、北京極大路、野田遺跡～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第62集（第1分冊）（財）向日市埋蔵文化財センター、2004年。

4　國下多美樹・中島信親「長岡京跡左京第464次（7ANDND-3地区）～左京北一条二坊四町、北京極大路、野田遺跡・南東部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第62集（第1分冊）（財）向日市埋蔵文化財センター、2004年。

5　中島信親「野田遺跡第5次（7ANDND-4地区）～野田遺跡東部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第65（第1分冊）（財）向日市埋蔵文化財センター、2005年。

6　中島信親「野田遺跡第6次（7ANDND-5地区）～野田遺跡・東部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第54集　（財）向日市埋蔵文化財センター、2002年。

7　中島信親「長岡京跡左京第471次（7ANDND-7地区）～左京北一条二坊一町、野田遺跡～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第64集（第1分冊）（財）向日市埋蔵文化財センター、2005年。

8　中島信親「長岡京跡左京第475次（7ANDND-6地区）～北京極大路、左京北一条二坊一町、野田遺跡～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第64集（第1分冊）（財）向日市埋蔵文化財センター、2005年。

9　中塚良「野田遺跡第9次（7ANDND-7地区）～野田遺跡中東部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第81集（財）向日市埋蔵文化財センター、2010年。

10　梅本康広「野田遺跡第10次（7ANDND-8地区）～野田遺跡中東部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第88集（財）向日市埋蔵文化財センター、2011年。

11　梅本康広「長岡京跡左京第631次（7ANDND-11地区～北京極大路、左京北一条二坊五町～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第122集　向日市教育委員会、2022年。

3. 遺　構

（1）基本層序

現地表は1区が標高16.14m、2区が標高16.3mと西側の方が僅かに高い。

基本層序は1区が北壁、2区が東壁を代表として述べる（図10・11）。

1区の基本層序は、耕作土直下のGL-0.4mで地山（H=15.75m）となる。地山は調査区西側が明黄褐色泥砂（礫混）に対して、東側が明黄褐色シルトとなる。遺構検出は地山直上で実施し、調査区の東側で溝・土坑・ピットなどを確認した。2区の基本層序は、耕作土直下のGL-0.3mで浅黄色砂泥の地山（H=15.73m）、-0.42mで明黄褐色砂泥（マンガン混）の地山となり、下位ほどシルト質が強くなる。遺構検出は地山直上で実施し、調査区の西側で土坑・落込みを確認した。

（2）遺構

1区

溝1　調査区東側で確認した南北溝である。柱穴2と溝7を切り込む。幅は約0.44～0.50m、深さ0.23mである。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄橙色泥砂にブロック状の褐灰色泥砂が混在する単層である（図10-南壁7層）。

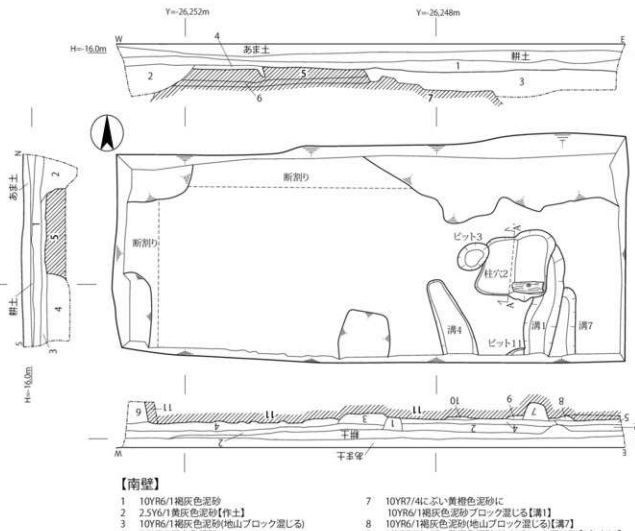
溝4　調査区中央で確認した南北溝である。幅は約0.20～0.55m、深さ0.10mである。埋土は褐灰色泥砂の単層である（図10-南壁10層）。

溝7　調査区東側で確認した南北溝である。溝1によって掘り込まれる。幅は約0.34m、深さ0.08mである。埋土は褐灰色泥砂にブロック状に地山が混在する単層である（図10-南壁8層）。

柱穴2　調査区東側で確認した柱穴である。平面は長辺1.15m、短辺1.05mの不定形で、深さ

表2　遺構概要表

時代	遺構	備考
弥生～古墳時代	落込み10	
長岡京期	土坑9	
近世	ピット3	
不明	溝1・4・7・柱穴2・ピット11	



【北壁】
1　2.5Y6/1黄灰色泥砂【床土】
2　5Y5/1灰色泥砂(地山ブロック混じる)　【撹乱】
3　2.5Y5/1黄灰色泥砂(石多く含む)
4　2.5Y7/1灰白色泥砂【床土】
5　10YR7/6明黄褐色泥砂(礫混)　【地山】
6　5Y5/1灰色砂礫
7　2.5Y7/6明黄褐色シルト

【西壁】
1　2.5Y5/1黄灰色泥砂
2　5Y5/1灰色泥砂(地山ブロック混じる)【撹乱】
3　2.5Y7/1灰白色泥砂【床土】
4　5Y5/1灰色泥砂(地山ブロック混じる)【撹乱】
5　10YR7/6明黄褐色泥砂(礫混)【地山】

【南壁】
1　10YR6/1褐灰色泥砂
2　2.5Y6/1黄灰色泥砂【作土】
3　10YR6/1褐灰色泥砂(地山ブロック混じる)
4　2.5Y7/1灰白色泥砂　【床土】
5　10YR7/2にぶい黄橙色泥砂
6　5Y5/1灰色泥砂(地山ブロック混じる)【撹乱】
7　10YR7/4にぶい黄橙色泥砂に
　10YR6/1褐灰色泥砂ブロック混じる【溝1】
8　10YR6/1褐灰色泥砂(地山ブロック混じる)【溝7】
9　10YR7/3にぶい黄橙色泥砂(地山ブロック混じる)【ピット11】
10　10YR5/1褐灰色泥砂【溝4】
11　10YR8/6黄橙色シルト【地山】

【柱穴2】
1　10YR6/2灰黄褐色泥砂(地山ブロック混じる)
2　10YR6/2灰黄褐色泥砂に
　10YR6/1褐灰色砂礫多く混じる
3　10YR7/1灰白色シルト(地山ブロック混じる)
4　10YR7/1灰白色シルトに
　10YR7/6明黄褐色
5　2.5Y8/6黄色シルト(地山ブロック混じる)
6　10YR7/6明黄褐色シルトに灰黄褐色泥砂混じる
7　2.5Y6/6明黄褐色シルトに灰黄褐色泥砂混じる
8　5Y8/6黄色シルトに灰黄褐色泥砂混じる
9　N6/灰色シルト【地山】

0　2m

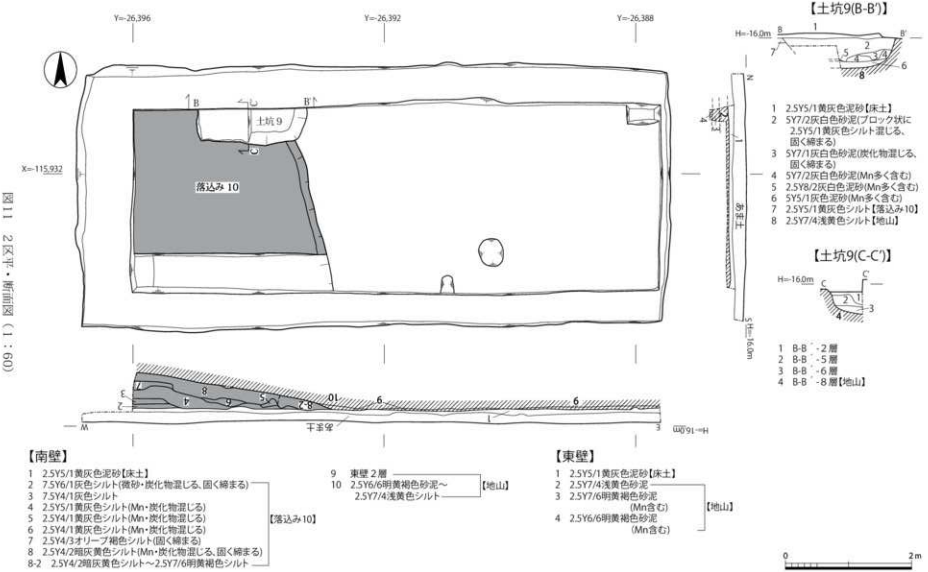


図 11 2区平・断面図(1:60)

約0.7ｍである。柱穴の南端の底部付近に直径約0.15ｍの丸太が据えられている。丸太は柱の真下ではなく掘方際に据えられていることから、柱が傾かない効果を期待したと推測できる。また、北東隅の掘方がやや北東側に張り出していることから、柱の抜き取りの痕跡と考えられる。埋土に遺物が混在していないこと、調査区内で対応する柱穴を確認できなかったことから、時期や性格は不明である。

ピット３　柱穴２の西側で確認したピットである。長辺0.5ｍ、短辺0.45ｍの楕円形で、深さ約0.4ｍである。柱穴２を掘り込む。埋土から近世の染付が出土した。

ピット11　溝１の西側で確認したピットである。長辺0.3ｍ以上、短辺0.1ｍ以上、深さ0.1ｍである。

２区

土坑９　調査区の北西で確認した土坑である。落込み10を掘り込み、調査区外に展開する。東西辺が約1.78ｍ、南北辺が約0.58ｍ以上、深さ約0.5ｍである。埋土は基本層序にはない灰白色砂泥で、最下層（図11-土坑９-６層）は滞水を示す。長岡京期～平安時代の須恵器などが出土した。

落込み10　調査区西端で確認した落込みである。流路の可能性が高いが、本調査区において西肩を確認できなかったことから落込みとした。北西から南東に向かって僅かに蛇行する。検出幅が3.1ｍ以上、深さ0.57ｍ以上である。調査区外の西側に向かって緩やかに落ち込んでいく。埋土はマンガンや炭化物を含むシルト質で、レンズ状に堆積していることから時間をかけて徐々に埋没したと考えられるが、部分的に微砂を含むことから一時緩やかな流れがあったと推測できる。埋土から弥生～古墳時代の土器小片が出土したことから、古墳時代以降に埋没したと考えられる。

４．遺　物

（１）遺物の概要（表３）

表３　遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
長岡京期～平安時代	須恵器		須恵器１点		
合計		２箱	１点（１箱）	０箱	１箱

※コンテナ箱数の合計は整理後、Ａランク遺物の抽出のため、出土時よりも１箱多くなっている。

出土した遺物は整理箱にして１箱である。内訳は弥生～古墳時代の土師器、長岡京期～平安時代の須恵器などである。すべて細片であり須恵器のみ図化することができた。

図12　出土遺物実測図（１：４）

土坑９　１は須恵器杯の底部である。長岡京期～平安時代の所産である。

5．まとめ

本調査では１区で時期不明の柱穴２、２区で長岡京期の遺物を含む土坑９や弥生～古墳時代の遺物を含む落込み10を確認した。僅かではあるが、落込み10から弥生～古墳時代の土器が出土したことから、当該地まで弥生～古墳時代の生活空間が広がっていたことが明らかになった。調査地の南側には旧寺戸川が流れており、調査11で流路を確認していることを踏まえると、落込み10は調査11（図９）の流路と接続し旧寺戸川に合流する流路（旧寺戸川支流）とも想定することができる。また調査地の南東隣接地の発掘調査（調査７・８）で、流路の一部に水利施設が築かれていたことが明らかにされており、調査11においても古墳時代前期に流路の一部を杭や矢板を設けて地盤補強した痕跡を確認している。このような周辺状況を勘案するならば、当該地の周辺においても同様の施設が設けられていた可能性が十分にある。

土坑９から長岡京期～平安時代の須恵器片が出土したことにより、長岡京期～平安時代にかけて土地利用が行われていた可能性が高まった。ただし、条坊に関わる遺構は未確認であることから、長岡京条坊範囲が当該地まで拡大していたのかは判然としない。

以上、今回の調査によって、道路整備予定地の西側においても弥生～古墳時代の遺跡が展開していることが明らかになるとともに、長岡京期～平安時代にも土地利用がなされていたことを確認することができた。ただし、限定的な調査であったことから、遺跡の詳細な展開範囲の確定には至らなかった。今後は、長岡京条坊に関わる遺構の有無を確認する必要があり、継続的な調査が必要と考える。

なお、本調査には周辺の調査で確認されている中世の耕作に関わる堆積層及び遺構がなく、地山直上の耕作土に鋼線などの現代遺物が含まれていることから、近世以降のほ場整備に伴って削平された可能性が高い。

（鈴木久史）

註

１）　玉城玲子「桂川用水と西岡の村々-国宝東寺百合文書の世界より-」向日市文化資料館、1997年。

２）　百瀬正恒「Ⅵ長岡京跡 37 長岡京左京一条三坊・戊亥遺跡」『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1993年。